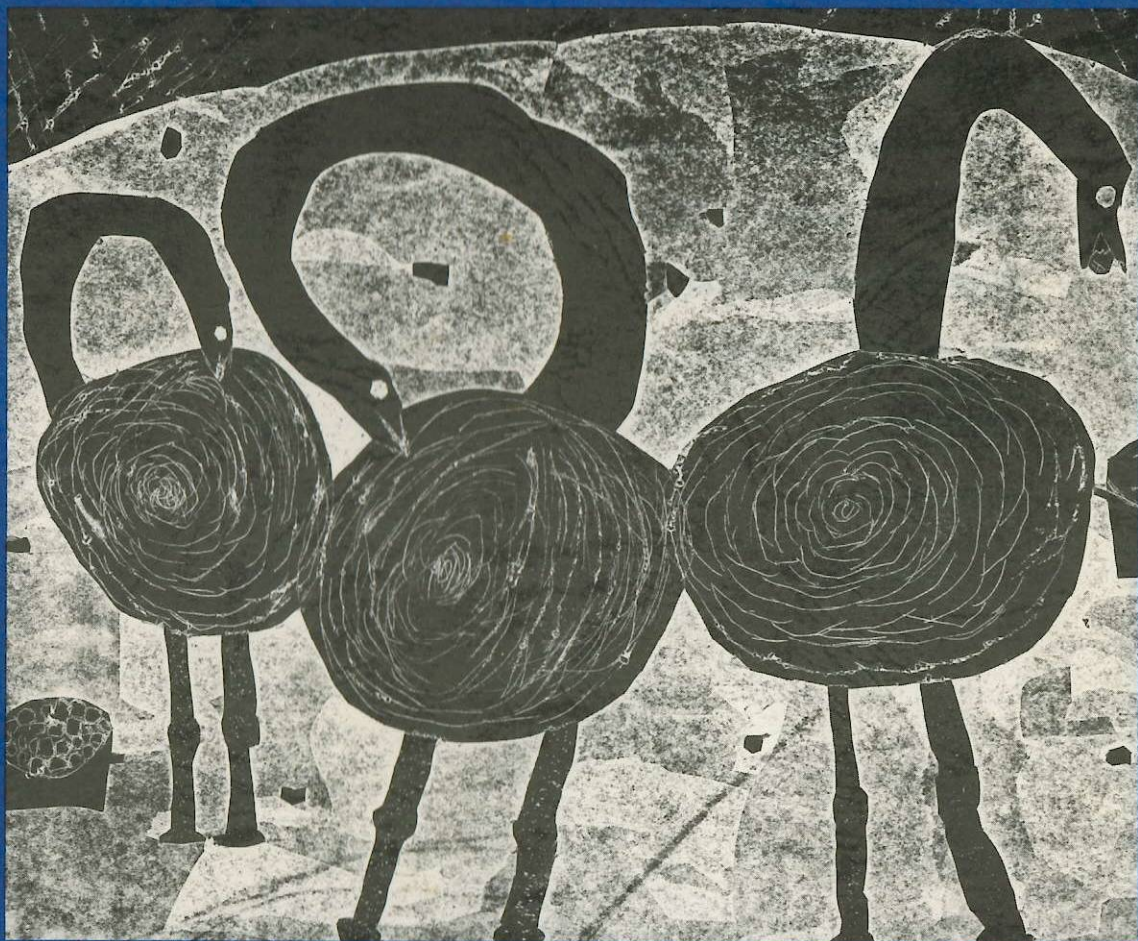


第34回

全道造形教育研究大会 札幌大会

大会集録



札幌大会研究部

◎ 目 次

シンボルマーク	1
大会日程	2
ご挨拶	3
公開授業 一覧	6
分科会一覧	9
幼稚園～授業研究と分科会	15
小学校～授業研究と分科会	27
中学校～授業研究と分科会	59
高等学校～提言と分科会	78
速報(1～12号)	82
年次研究主題	85
連盟規約	87
大会役員一覧	93

全道留萌教育研究大会

大会実行委員会



大会主催

留萌教育研究大会のシンボルマーク

留萌教育研究大会のシンボルマークは、留萌の海、町、人々を感じさせてくれたカジカマーク。とても印象的でした。

34

日誌

大会シンボルマーク

シンボルマークうらばなし

昨年の留萌大会の、あのなんとも素朴で機くさく、大らかな、留萌の海、町、人々を感じさせてくれたカジカマーク。とても印象的でした。

じゃあ、今年の札幌はなんでいこうか。海でもない、山でもない、時計台か、アカシヤか、トウキビの焼く匂いか……。

あれこれまよった末、やっぱり、「子供たちが主役」ということになりました。

「やったー！」
「できたぞー！」

誇らしげに、高々と、作品をかざす子供たちの姿をイメージしました。

● Design by
札幌真栄高校・教諭
佐野 千尋

第34回

全道造形教育研究大会

札幌大会

34

1. 大会主題

創りだす心を呼び起こす造形教育

札幌テーマ：知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動
(わきたつ発想・たしかな表現・つくりだす喜び)

2. 日 程

	8:00	9:00	10:00	10:10	10:50	11:00	12:00	13:00	16:00	17:00
(第一日)	受付	公開授業	移動	開会式 オリエン テーション	移動	分科会	昼 アトラクション (道中美会)	食 分科会	移動	交流 パーティー

	8:00	9:00	10:20	10:30	12:00	12:30
(第二日)	受付	作品を語る会(幼・小部会) 分科会(中・高部会)	移動	記念講演	閉会式	

大会事務局

札幌市豊平区福住3条5丁目
札幌市立福住小学校

事務局長 鹿島 健
TEL 011 (854) 1318

3. 主 催 北海道造形教育連盟
4. 後 援 北海道教育委員会 札幌市教育委員会 札幌市教育研究協議会
札幌市公立幼稚園長会 北海道私立幼稚園連合会
北海道社会福祉協議会保育協議会 北海道高等学校文化連盟
5. 会 期 昭和59年7月27日(金)・28日(土)
6. 会 場 札幌市立白楊小学校 (北区北24条西7丁目)
札幌市立白楊幼稚園 (北区北24条西7丁目)

第 24 回

北海道造形教育研究大会「札幌大会」を終えて

北海道造形教育連盟委員長 種市 誠次郎

昭和59年7月27・28の両日、札幌市立白楊小学校と白楊幼稚園を会場として、全道から、幼・保・小・中・高校の先生方、約600名の参加を得て、造形教育の研究会が盛大に催されました。今回、札幌での研究大会は、8年ぶり、8回目であります。熱心な図工・美術の実践者が、一堂に集まり、同じ道を歩む仲間として、人間的な心のふれあいの中で、造形教育のあり方や内容等について深めることができ、子どもたちに、目や手や心を通して、つくり出す仕事を進める中で、生きる喜びを与え、人間性の回復を図ろうという、初期の目的に迫り、無事に終了することができ、ここに集録刊行の運びとなりました。

札幌市教育研究協議会図工美術の先生の力を借りての授業や提言、全道からお願いした助言者や司会者、又、運営に当たられた方々や収録者等、皆様方の熱意や努力、多大のご苦労やお骨折りを得ましたことに、心から敬意を捧げ、深く感謝申し上げます。更に、この大会を暖かく見守り、ご援助くださった関係機関・諸団体の皆様にも、深くお礼申し上げます。

今大会の研究主題「創り出す心呼び起こす造形教育」札幌テーマ：知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動（わきたつ発想・たしかな表現・つくり出す喜び）の実践と理論の究明は、まさに今日的課題であり、これが領域別テーマに引きつがれ、それぞれの実践課題として具体化し、研究の視点が明確にされ、オリエンテーションでも、主題設定の背景、主題の意味するものと、そのための授業の構築の中で公開された授業は、真剣な子どもの願いと教師のみがかれた発問の中で、確実な力身につけさせる試みが展開され、分科会の提言も実践課題をよくとらえ、実践的研究の上での提言で、迫力のある発表となり、参加者の真剣な対議が交わされる中で、そのねらいや真ずいに肉迫することができたものと思います。

全日程を通して、どの場面にも主題追究の姿がみられ、一貫した大会であり、又、作品を語る会や分科会に引き続き、竹岡和田男講師の美術館についての講演や、児童のアトラクションも大会に華をそえていただき、誠に有難く、ご協力いただきました皆様方に心から敬意と謝意を表して私のお礼のご挨拶といたします。

仲間の強いきずなを確めて

札幌市立創成小学校 森 川 昭 夫

札幌大会の会場校をひきうけてからまる1年たち、無事終了することができましたことは、無上の喜びであります。

本大会は、札幌市内の幼稚園、保育園、札幌市教育研究協議会の図画・工作・美術部会、高等学校の先生方が一体となつての大事業でありました。たくさんの方々が、それぞれベストを尽して下さったおかげで大成功をおさめたものと確信いたします。

本当に心から感謝申しあげ、お礼を述べさせていただきます。

人を教える教師の研鑽には終わりがなく、その教え方に結論はありません。そして、子ども達の造形に対する能力や適正は一律ではなく千差万別であります。したがって、教師の教え方もまた定形があるわけではなく、それは自由で創造的でなければなりません。

しかし、教師の一寸した指導の誤りが、子ども達の創造意欲を減退させ、生気を失った作品になる例は、枚挙にいとまがないと言えましょう。

高度経済成長は、次から次にと便利な機械やロボットを生み出し、ボタンひとつで正確に作動する玩具や家庭用品など、眼を見張る発展をとげてきました。機械が素晴らしい動きを見せれば見せる程その反対に小学校の6年生になつてもマッチをすれない子ども、リンゴの皮をナイフでむけない女子中学生をつくり出してしまったようです。

小資源国であるわが国に育つ青少年が未来の国際人として生きていこうとすると、人間のもつ能力の開発である創意や工夫の素地を体験を通して、しっかり身につけることを考えていかなければなりません。

私たちは子どもたちが眼を輝かせる様な題材を開発し、その指導計画は学年の目標行動を時間の経過に合わせて設定し、題材の構造化をはかりました。そして、子どもたちの力で解決する手順や方法を見つけさせ、さらにその発展に眼を向けさせようと努力してまいりました。ひとりよがりの実践にならない様に、研究交流の重要性を身にしみている一人です。

この小冊子には、大会で発表し、互いに忌憚のない批判をし合つて積みあげたものです。ここに執筆して下さった先生方の背後に これらを支えて下さった多くの先生方を思う時、感謝の気持ちがいっぱいあります。

これを機会に私たちは、造形教育とは何か、二十一世紀に生きる子ども達の幸せはいかにあるべきかなど、造形教育そのものの真髄に迫るべく思いを新たに立ち上がりたいと思います。

全道の皆さん方との強いきずなで結ばれていることをかみしめ、本大会をふりかえり、あらためてご関係のすべての皆さん方に心からお礼申し上げます。

このエネルギーをいつまでも

札幌大会事務局長 鹿 島 健

諸々の事情で遅れましたが、研究部の熱意と精力的なとりくみにより札幌大会の研究集録を発行する運びとなりました。

昨年の大会では「知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動」という主題で札幌の仲間か追芸何年かの積みあげを発表することができました。それなりの成果と全道各地の仲間から好評を得ましたことは大会を主催した者のひとりとし喜びにたえません。

造形教育の重要性が叫ばれ、今日のように毎年全道大会が開かれるまでになった経緯については判りませんが、年々研究大会の質が高まっていくことは喜ばしいことです。

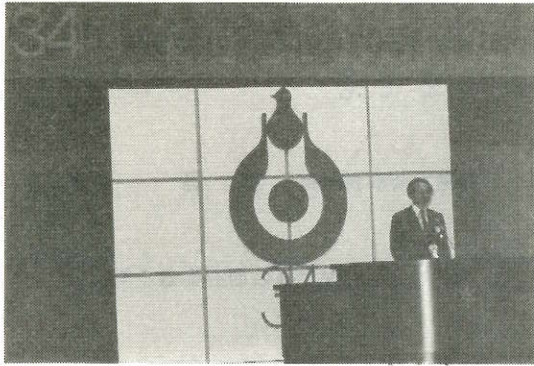
人を教える教師の研鑽に終わりがなく、教え方に結論がないと言われていています。そして、子ども達の造形に対する能力や適正はさまざまです。したがって、我々教師の教え方もまた、結論がなく子どもの能力に合わせて千差万別でなければならないと思います。

科学技術の進歩や高度経済の発達は仕事の便利さや安易な面のみ追求し、抵抗のあるものや面倒なことは避けてとおる人間をつくりあげてしまいました。更に、資源の乏しい我が国が未来の国際社会に仲間入りし、生きていこうとするとき、人間の持つ能力、即ち、創意や工夫の素地をしっかりと身につけることが重要であると考えられます。

こうしたとき、私達造形教育にたずさわる者の責任はまことに大きいものがあると思います。

私達は子ども達のニーズにこたえなければなりません。毎年開かれる全道大会が、そうした交流の場になることを願ってやみません。こうした願いを胸にこの研究集録を編集しました。ご批評を仰ぎたいと思います。

それにしても昨年は大変お世話になりました。私達事務局に課せられたものは「若手でやれ」ということでした。授業者も提案者も一気に若がえりしましたがそれなりに手落ちもあったのではと反省しております。しかし、大きな財産が残りました。それは若手に自信がついたことです。このことは今後の連盟の活動に大きな力となることでしょう。若手を支えて下さった連盟の諸先輩に心から感謝いたします。そして何よりも全道各地より札幌の地に集まり、大会を盛り上げて下さった600名の図工の仲間に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。



開 会 式



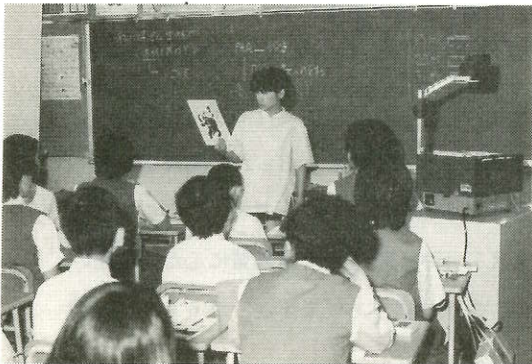
幼稚園 うみの中へいってみよう



小2 牛乳パックで遊ぼう



小3 彫塑 お話からつくる



中2 版画 私の好きな動物



中1 彫塑 にぎる手

6. 公開授業一覧

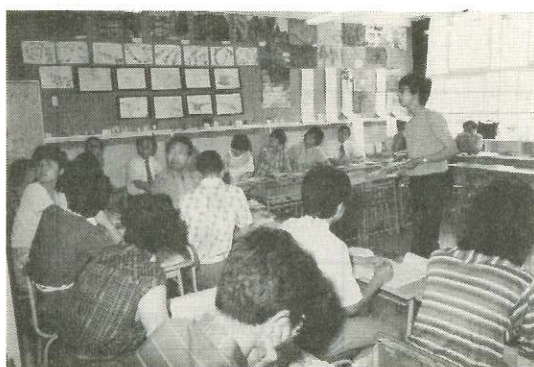
校種別	領域	題 材	学年	学校・園名 授 業 者
幼稚園	造形遊び	えのぐであそぼう	2少	白 楊 幼 大 川 和 子
	絵 画	うみのなかへいってみよう	2長	中 の 島 幼 大 西 明 美
	製 作	はこであそぼう	2中	第 一 幼 樋 口 裕 美
小学校	造形遊び	牛乳パックであそぼう	2	新 琴 似 緑 小 篠 原 寛
	絵画(低)	ひっかいてかく絵	2	白 楊 小 奥 山 慎
	絵画(中)	構想図「ふえのしらべに」	4	中 央 小 益 村 豊
	絵画(高)	物語の絵「つる」	6	西 岡 南 小 大 場 章 子
	版 画	「荒馬おどり」〈木版画〉	5	東 山 小 毛 馬 内 国 夫
	彫 塑	お話からつくる	3	新 琴 似 緑 小 桜 田 豊
	工作(低)	「わたしのアイデア」	2	三 角 山 小 高 橋 百合枝
	工作(高)	動くおもちゃ	5	白 楊 小 小 林 長 幸
中学校	絵 画	版画「私の好きな動物」	2	光 陽 中 平 林 冬 美
	彫 塑	に ぎ る 手	1	太 平 中 福 島 昭 一
	デ ザ イ ン	自然物の構成「身近な野菜から」	1	向 陵 中 高 橋 久 美 子
	工 芸	土の笛	2	北 都 中 石 谷 正 美



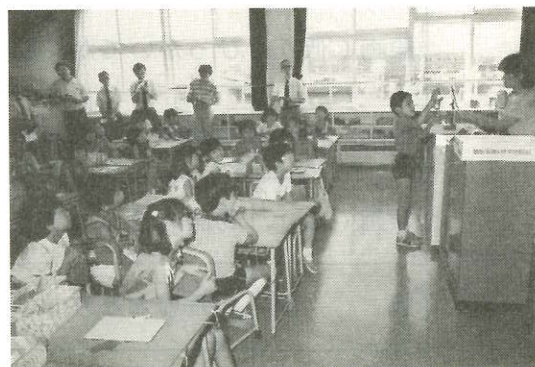
幼稚園 はこで遊ぼう



小2 ひっかいてかく絵



小6 物語の絵「タづる」



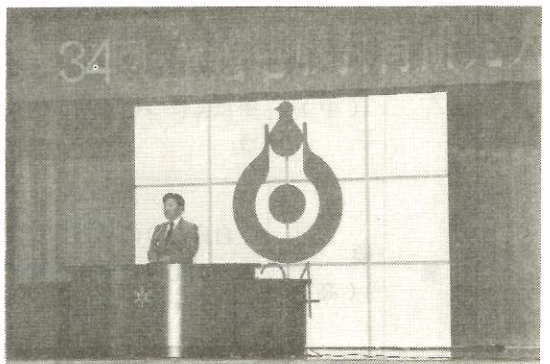
小2 動くおもちゃ



中1 自然物の構成「身近な野菜から」



中2 土の笛



分 科 会

校種別	領 域	テ ー マ	話 し 合 い の 視 点
幼稚園・保育部	造形遊び	かきたい・つくりたい 意欲をひきだす造形活動 について話しあおう	<ul style="list-style-type: none"> ・全身で遊べる造形活動をどのように指導するか ・遊びにとりくませる環境設定をどのようにするか ・身近な素材を使つての活動をどのように発展させるか
	絵 画		<ul style="list-style-type: none"> ・かきたいと思う意欲をどのようにしてひきだすか ・感動をどのようにして表現にむすびつけるか ・ものに感じる心をどのように育てるか
	製 作		<ul style="list-style-type: none"> ・つくりたいという意欲をどのようにひきだすか ・子どもの発想にどのように手助けをするか ・子どもの興味・関心をそそる素材は……
小学部	造形遊び	全身で生き生きとした造形遊びをさせる手だてについて話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・夢中で遊びにとりくむ題材の設定・与え方・指導過程について ・造形遊びを生活にむすびつける手だてについて ・造形遊びの評価について
	絵 画 (低)	新鮮なイメージをそつちよくに表現させる手だてについて話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな発想を育てるための題材について ・感動を表現にむすびつける手だてについて ・作品評価の観点について
	絵 画 (中)	発見したおどろきをたしかめながら表現させる手だてについて話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・題材とのかかわりで生活の中で何を見させ何に感動させていったらよいか ・感動を表現に結びつけるための描写力や表現技法について ・作品評価の観点について
	絵 画 (高)	自分なりの見方を表現の中で追求させる手だてについて話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・対象にたいし個性的な見方・考え方を育てるにはどうしたらよいか ・感動を表現に結びつけるための描写力や表現技法について ・作品評価の観点について
	版 画	版によるたしかな表現力を高める指導について話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・学年に適した題材の系統性と版種について ・版つくりにおける基礎指導のポイントについて ・主題につながる白黒の造形美と版種について

一 覧

提 言 者	司 会 者	助 言 者	記 録 者	運 営 委 員
徳 田 香 (中 の 島 幼)	吉 村 幸 子 (発 寒 幼)	佐 藤 吉 五 郎 (山 の 手 南 小)	田 中 歩 美 (あ か し や 幼) 田 村 由 美 (あ か し や 幼)	藤 塚 愛 子 (第 一 幼) 第 2 日 目 の 「 作 品 を 語 る 会 」 の 司 会 を 兼 ね る 。
嵐 な お み (福 住 幼)	石 崎 な お み (真 駒 内 幼)	金 井 秀 男 (南 小)	墓 田 厚 子 (大 谷 地 幼) 田 中 牧 子 (大 谷 地 幼)	
大 畑 洋 子 (愛 珠 幼)	藤 沢 邦 子 (み な み 幼)	森 川 昭 夫 (白 揚 小)	大 勝 ひ ろ み 石 川 ひ と み (第 一 幼)	
長 野 祐 平 (北 九 条) 宮 崎 む つ (澄 川 南)	赤 石 芳 郎 (藤 の 沢) 関 建 治 (恵 庭 市 柏 小)	佐々木 理 温 (伏 古) 白 坂 和 夫 (南 郷) 後 志 支 部	国 分 照 子 (真 駒 内 南) 青 木 賢 一 (月 寒 東)	平 島 恵 都 子 (清 田) 西 寛 (北 白 石)
高 田 珠 実 (二 条) 永 井 恭 子 (福 住)	佐 藤 靖 (篠 路 西) 空 知 美 術 研	佐 藤 圭 (南 白 石) 成 田 一 男 (美 香 保) 岩 田 宏 (別 海 町 中 西 別 小)	上 野 千 鶴 子 (真 駒 内 緑) 松 原 宏 行 (山 の 手 南)	伊 藤 武 司 (篠 路) 三 国 満 (東 札 幌)
小 柳 雄 嗣 (桑 園) 富 所 玲 (緑 丘)	福 島 斎 (平 和 通) 旭 川 教 研	秋 田 武 藏 (手 稻 東) 辻 悦 平 (願 問) 高 橋 諒 治 (羽 幌 町 曙 小)	宮 崎 美 智 子 (澄 川) 白 井 真 澄 (桑 園)	辻 井 秀 郎 (幌 北) 藤 井 正 治 (茨 戸)
窪 田 恵 子 (伏 古) 大 沼 芳 徳 (幌 西)	蛸 子 信 也 (北 陽) 稚 内 市 教 研	坂 口 清 一 (藻 岩) 高 橋 栄 吉 (願 問) 八 木 橋 哲 郎 (八 雲 町 立 大 関 小)	沼 沢 由 美 子 (旭) 稲 実 順 (西 園)	今 川 忠 良 (白 石) 千 葉 哲 (明 園)
葛 西 良 子 (新 琴 似 西) 伊 藤 誠 (札 苗 北)	日 高 晴 美 (新 陽) 函 館 市 美 術	船 着 昭 弘 (中 沼) 長 谷 川 伝 (願 問) 堀 合 隆 (乙 部 町 栄 浜 小)	渡 辺 美 智 子 (緑 丘) 若 狭 忠 平 (発 寒 東)	小 幡 静 子 (平 和 通 り) 早 坂 学 (北)

校種別	領域	テーマ	話し合いの視点
小 学 部	彫 塑	豊かな心情をかたまりとして生き生きと表現させる手だてについて話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・生き生きとした意欲的表現の土台となる心情をどのようにしてたがやしていくか ・意欲的に表現にとりくませる題材のあり方について ・質感と量感をださせる手だてについて
	工 作 (低)	豊かな発想とそれをたしかな表現にむすびつける手だてについて話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの興味・関心と題材選定について ・発想から表現へスムーズにむすびつける手だてについて ・アイデアを具体化する計画段階における材料選択・技法指導について
	工 作 (高)	発想を豊かにふくらませ計画的につくる力を育てる手だてについて話し合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発想を豊かにする指導・助言について ・アイデアを具体化する計画段階における材料選択・技法指導について ・機能性と美しさの調和を具体化させる指導の手だて
中 学 部	絵 画	すじ道のわかる絵画の授業を創造する	<ul style="list-style-type: none"> ・絵画における基本的事項をより明確にとらえる ・子どもの変容の見取り方、分析する観点を考える ・そして、表現の喜びを味わわせる授業とは
	彫 塑	すじ道のわかる彫塑の授業を創造する	<ul style="list-style-type: none"> ・彫塑における基本的事項により明確にとらえる ・子どもの変容の見取り方、分析する観点を考える ・そして、表現の喜びを味わわせる授業とは
	デザイン	すじ道のわかるデザインの授業を創造する	<ul style="list-style-type: none"> ・デザインにおける基本的事項をより明確にとらえる ・子どもの変容の見取り方、分析する観点を考える ・そして、表現の喜びを味わわせる授業とは
	工 芸	すじ道のわかる工芸の授業を創造する	<ul style="list-style-type: none"> ・工芸における基本的事項をより明確にとらえる ・子どもの変容の見取り方、分析する観点を考える ・そして、表現の喜びを味わわせる授業とは
高 校 部		エネルギーをわきたたせる題材について	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギーをわきたたせる題材について

提 言 者	司 会 者	助 言 者	記 録 者	運 営 委 員
花 田 正 雄 (新 琴 似 緑) 伊 藤 寿 朗 (平 和)	富 田 泰 (栄 緑) 連 盟 胆 振	長 野 昭 (も み じ 台) 伊 藤 英 世 (澄 川 西) 中 坪 市 郎 (室 蘭 市 高 砂 小)	村 田 力 (発 寒) 小 田 久 美 子 (豊 園)	伯 谷 巖 (真 駒 内 緑) 坂 田 恭 侑 (平 岸 西)
菅 原 清 貴 (前 田 北) 小 尾 喬 (開 成)	阿 部 宏 行 (附 属) 鈴 木 和 雄 (苫 小 牧 市 大 成 小)	高 橋 一 美 (東 白 石) 伊 藤 恵 (願 問) 十 勝 造 形	三 井 哲 (山 の 手) 山 田 宏 司 (川 北)	伊 藤 武 雄 (澄 川) 熊 谷 一 彦 (し ら か ぼ 台)
植 木 則 子 (藻 岩 南) 上 井 善 範 (創 成)	佐 藤 健 吾 (真 駒 内 曙) 釧 路 市 造 形	新 谷 純 輔 (市 研 究 所) 長 津 喜 代 (伏 見) 高 橋 忠 昭 (網 走 市 潮 見 小)	前 川 敏 子 (南 白 石) 岩 山 英 輝 (豊 滝)	菅 原 昇 (北 野) 加 藤 倬 英 (東 川 下)
富 田 賢 司 (新 琴 似 北)	荒 谷 博 文 (光 陽) 早 川 輝 彦 (屯 田 中 央)	小 林 暁 (北 栄) 東 志 隆 (八 軒 東)	岡 沢 邦 彦 (稲 陵) 高 橋 一 弘 (北 辰)	加 藤 誠
中 山 龍 男 (札 苗)	石 岡 博 昭 (元 町) 村 谷 利 一 (札 苗)	斎 木 杲 一 (福 移) 米 谷 哲 夫 (東 栄)	八 重 樫 真 一 (美 香 保) 中 村 裕 子 (元 町)	秋 山 久 美 子
田 中 潤 (北 栄)	菅 原 稜 三 (向 陵) 角 力 山 旭 (附 属)	坂 田 武 夫 (も み じ 台) 武 市 尚 政 (市 教 委)	嶋 田 恵 子 (厚 別) 小 幡 哲 也 (真 駒 内)	庄 子 秀 敏
向 敏 光 (清 田)	霍 田 文 彦 (青 葉) 山 田 宏 (日 章)	三 谷 哲 司 (陵 陽) 中 川 清 (東 日 寒) 滝 本 幸 一 (北 白 石)	村 上 秀 明 (東 月 寒) 佐 藤 ま な み (西 岡)	緒 方 尚 子
香 西 富 士 夫 (平 岸)	近 藤 暢 男 (旭 丘)	中 村 矢 一 (高 等 壘) 土 岐 禎 治 (北)	坂 東 宏 哉 (月 寒)	斎 藤 洪 人 (清 田)

校 種	幼稚園
分 野	造形遊び
学 年	2 少
教 室	3 0 1

「絵の具で遊ぼう」

園 児 2年保育年少 34名
授業者 大川和子(白楊幼)

1. 活動を取り上げた理由

入園以来幼児に親しみやすい材料や用具を環境として準備し、幼児が自由にかいたり、作ったりする活動に取り組んでその楽しさを味わえるようにしてきた。その中で友達と遊ぶ姿が目立ってきているが、かかわり合い方は極めて弱い。

また、汚れることを嫌って指絵、泥んこ遊びなどに取り組まない幼児の姿も多い。

この年齢の幼児にとって全身の感覚を全開して素材をもて遊ぶ経験は造形的表現の面、情緒の面で大切なことと思われる。

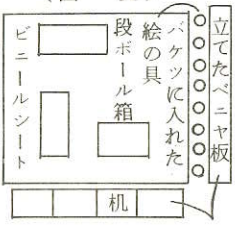
季節的に暑くなり、家庭で海に行く経験ももたれていることから海や魚に関連した活動を取り上げてきた。

そこで、今回は、魚の家や海に絵の具を塗ったり、絵をかいたりして解放的に遊ばせることにより、その楽しさを味わわせるとともに、友達とのかかわり合いをも強めたいと考え、本活動を取り上げた。

2. ね ら い

(1) 魚の家や海に絵の具を塗ったり、絵をかいたりして友達と一緒に楽しむ。

3. 本時の展開

環 境 構 成	時 間	幼 児 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>(園 庭)</p>  <p>ロール紙をはる。</p> <p>〈材料・用具〉 ポスターカラー、指絵の具、段ボール箱、ロール紙、はけ、筆</p>	9:00	<ul style="list-style-type: none"> 登園する。 魚の家で遊ぶ。 着替えて園庭に出る。 	<ul style="list-style-type: none"> 明るい態度であいさつを交わす。 園庭の環境に興味をもつような言葉がけをする。
	9:15	<ul style="list-style-type: none"> 絵の具遊びをする。 魚の家や海を塗る。 魚の家や海に絵をかく。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びにはいらない幼児を把握し、誘いかけを工夫する。 ぬたくりや身体に絵の具を塗るなどの幼児の自由な発想を認め、解放的に遊ばせる。 教師も一緒に遊び楽しい雰囲気を作る。
	9:50	<ul style="list-style-type: none"> かたづけ。 	<ul style="list-style-type: none"> プールで体を洗わせる。

授業討議記録

一幼稚園一題材一絵の具で遊ぼう一白揚幼稚園

授業者 大川和子

司会者 吉村幸子(発寒幼稚園)

1. 授業者の反省

- 絵の具で遊ばせるということで、段ボールで作成したが、ほとんど先生の手で作成ということになってしまった。
- ねらいの絵の具を塗ったり絵をかいたりして友達と一緒に楽しむに関しては、絵をかくまでにはいかなかったようだ。
- 鯨の絵を事前に用意しておき、活動中にみえるようにしたが、効果はあまりなかった。
- 子供たちにとっては絵の具の感触を味わう方が楽しかったようだ。
- 床にしいてあるシートの上に絵の具がついてすべりやすく危険を感じた。

2. 討議

- (1) 絵の具の感触を味わうだけで海というイメージはなかったようでしたが、どのように授業者は考えているか。
 - 造形遊びとは全身を使って遊ぶものだと思うので、前段階の指導案とはかなり変わってきた。
- (2) 今日に至るまでの絵の具の経験はどのようなものか。
 - 絵の具は描くというよりも、塗るものとして活動している。
- (3) 教材としてこの時期に適切であったか。
 - 年少ということで、どこまで子供達が色塗りができるか心配であったが、今まで土遊びやフィンガーペインティングなどを十分して経験があったので適切であった。
- (4) 筆を使って絵を完成させるまではやらないのか。
 - 絵の具よりもクレパスやマジックペンを使用すると形になるようである。今の時期では素材に取り組むことが大切だと思う。

3. 今後に向けて

- 4才児というのは、うんと遊ばせるべきである。
- 子供達の様子をみていると、遊びながら手で感触を味わうグループ、自分たちで言葉を発しながら物語遊びをしているグループ、流して遊ぶグループ、段ボール箱にはけをぶつけて遊ぶことからリズムを感じ音遊びをするグループ等があった。

分科会記録

提言「自分の気持ちを思いきり表出するには」

徳田 香(なかのしま幼)
司会者 吉村 幸子(発寒幼)

1. 提言内容

- 園生活に慣れていない子供達に一番必要なのは、心の開放・発散と考え造形的な遊びの中から楽しさが感じられるように考えた。
- 実践例として新聞紙遊びで、やぶることの楽しさを知り、やぶりながら飛びはねる子もいた。二回目は前回の遊びの延長だったが個々の動きをみると自分のしたいことをしているようだった。
- スタンプ遊びでは、形や色がおもしろいということで、それぞれの満足感を得たようであった。
- フィンガーペインティングでは、絵の具の色の変わり方を楽しむことができたようであった。
- 造形遊びのまとめとして 何をするにしても、おもしろそうだと子供達に感じさせる事、自発性によって遊ばせる事、その遊びの積み重ねの中から子供達自身で創造する事の楽しさを体で感じとり身につけていくのではないだろうか。

2. 討議内容

(1) 絵の発達段階について

最初は絵を描こうという気持ちよりも、目で見て、手で触れ、自分の手の動きに驚く、これが絵画へのきっかけになる。造形遊びというのは、何かのきっかけで個々に違うものであるから、おおいに遊ばせる事が必要である。

(2) 造形・絵画・製作の違いは？

造形遊びというのは作品を作る遊びではなく、遊びの過程が必要である。材料の特性を理論的にではなく、体験として身につけさせることである。道具の準備から後しまつまで造形遊びではこのことが貴重な体験なのである。

(3) 細い筆は使用させないのか

方向性をまちがわなければよい。肉体的や精神的な発達を加味すると、筆の先で絵の具を使用するというのは水の適量というのがわからないしできないのでむずかしい。

3. 話し合いの視点から

- 造形遊びというのは全身で遊び楽しむことによって発想が豊かになるので、精神的な開放が必要である。
- 身近な素材をみおとさないことが必要である。
- 活動というのは、最後の片付けまでである。四才児については、子供達なりに概念としてはつかんでいるようであるが、行動が伴わない。

4. 今後に向けて

○造形遊びというのは、子供達にとって心の開放を重点としていることなので、先生が子供に好かれていなければ成立しない。

「信頼関係」「友愛関係」「善」

心が大切な領域なので、上に書いてある信頼しきっている先生でなければならない。

○低学年、低年齢であればあるほど先生は子供と一緒にとけこまなくてはいけない。そのためには子供にとっては先生からの言葉がけによって発展性が増してくる。そのことによって、次の段階へのきっかけとなるのではないだろうか。活動の中には子供との会話が重要なポイントとなるのである。

○教材については、自然に遊ぶ事、教材・用具・道具で遊ぶ事。大事なことは地域の環境を十分にとらえる事、その上でどのような遊びをさせたらよいかという事をふだん認識しておかなくてはならない。机やすいなども立派な一つの造形遊びの中に含まれるものであって、特に新しい材料でなくても、子供の遊びへの想像・発想が出てくるのではないかと思われる。

○後しまつにおいても、子供にとっては大役をはたしたという気持ちを持たせるような生活指導が大切だ。

○身近な素材で視点をかえた遊び方をすると、いろいろな発展がありうるものである。

5. まとめとして

○造形遊びというのは、作品にするまでの過程が必要で完成が目的なのではない。

○先生と子供と一緒に活動する事が大切なポイントとなる。このことについては、何を発言したのか、子供が面白かったといえるものであれば結果的に先生が何をしたのかわからないという事があってもよいのではないか。

1. 材料・用具とのふれあい
2. 自然とのふれあい
3. 人とのふれあい(心の問題にもつながる)
4. 生活を十分にさせる(その時期に応じた生活)

以上の四つの点を考慮し、それぞれの子供の遊び、とりくみ方をしっかりつかんでいる事いく事が必要である。

校 種	幼稚園
分 野	造形遊び
学 年	2 少
教 室	3 0 1

「絵の具で遊ぼう」

園 児 2年保育年少 34名

授業者 大川和子(白楊幼)

1. 活動を取り上げた理由

入園以来幼児に親しみやすい材料や用具を環境として準備し、幼児が自由にかいたり、作ったりする活動に取り組んでその楽しさを味わえるようにしてきた。その中で友達と遊ぶ姿が目立ってきているが、かかわり合い方は極めて弱い。

また、汚れることを嫌って指絵、泥んこ遊びなどに取り組まない幼児の姿も多い。

この年齢の幼児にとって全身の感覚を全開して素材をもて遊ぶ経験は造形的表現の面、情緒の面で大切なことと思われる。

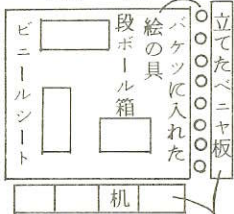
季節的に暑くなり、家庭で海に行く経験ももたれていることから海や魚に関連した活動を取り上げてきた。

そこで、今回は、魚の家や海に絵の具を塗ったり、絵をかいたりして解放的に遊ばせることにより、その楽しさを味わわせるとともに、友達とのかかわり合いをも強めたいと考え、本活動を取り上げた。

2. ねらい

- (1) 魚の家や海に絵の具を塗ったり、絵をかいたりして友達と一緒に楽しむ。

3. 本時の展開

環 境 構 成	時 間	幼 児 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>(園庭)</p>  <p>ロール紙をはる。</p> <p>〈材料・用具〉</p> <p>ポスターカラー、指絵の具、段ボール箱、ロール紙、はけ、筆</p>	<p>9:00</p> <p>9:15</p> <p>9:50</p>	<ul style="list-style-type: none"> 登園する。 魚の家で遊ぶ。 着替えて園庭に出る。 絵の具遊びをする。 魚の家や海を塗る。 魚の家や海に絵をかく。 かたづける。 	<ul style="list-style-type: none"> 明るい態度であいさつを交わす。 園庭の環境に興味をもつような言葉がけをする。 遊びにはいらぬ幼児を把握し、誘いかけを工夫する。 ぬたくりや身体に絵の具を塗るなどの幼児の自由な発想を認め、解放的に遊ばせる。 教師も一緒に遊び楽しい雰囲気を作る。 プールで体を洗わせる。

授業討議記録

一幼稚園—絵画—「うみのなかへいってみよう」—中の島幼稚園

授業者 大西 明美
司会者 石崎 なおみ

1. 授業者の反省

- イ. いつも進んで描いている子が少しも描けていなかったことに気づくのが遅すぎた。
- ロ. 言葉かけをしてもなかなか描けない子がいたが、友達の手伝いをして色ぬりだけでも参加したことに満足してくれたので安心だ。
- ハ. 教材の絵の具が少々不足していたようだ。
- ニ. 後半時間を気にしてしまい、子供達をせかしてしまったのでかわいそうな事をした。
- ホ. マジックで描いたのに、上から絵の具をぬってしまい、せっかくよく描けた絵が死んでしまったので、マジックの上には絵の具をぬらないように等の約束をすればよかった。
- ヘ. ぬりつぶされたものについては、2学期に入ってから、子ども達と相談し、どのようにするか決めてから完成させたい。

2. 討議内容

(1) 一番のねらいはなにか？

- 広いところに自分の好きな絵を描く。協同作業により、友達との交流を深める。マジック、クレヨン、絵の具の用具の選択。

(2) 下がすべる事を事前に子どもに知らせておけばころんだりしなかったのでは。また、最後があっけなく終わってしまったが、歌でもうたうと余韻が残ってよかったのでは？

- 時間が少なく、最後をせかして終わらせたので、かわいそうな事をしてしまった。

(3) 海の色を手で塗りはじめたが、先生は予期していたか？

- 予想はしていたが、子どもの方で「手でぬってもいい？」と気付いてほしかった。

(4) テーマにそってダイナミックに楽しくやっていた。絵の具を取り入れた時期は？

- 6月ごろから。デカルコマニー、糸ひき、フィンガーペインティングなどで。

(5) 途中でハケを出したが、はじめから出したらハケだけに集中するからか？

- ハケを出したのは今日がはじめて。最初から大きなものを描く子がいれば出したが、いなかったなので、海の色をぬりはじめてから出してみた。

(6) 筆を使って絵を完成させないのか？

- 絵の具ではあまり形にはならない。クレパスやマジックペンを使用すると形になるようだ。今の時期は、あせらないで素材にとり組むことが大切なのではないか。

3. 今後に向けて。(その他のことで授業に関係のある事柄)

- 子どもが、時間がきても活動やもめないところはすばらしい。
- 4才児というのは、あわてずにうんと遊ばせるべきで、このことについては、年少についてやらせるべきである。なぜなら、子どもなりの固定概念がついてしまうからである。
- 子ども達の様子を見てみると、遊びながら手で感触を味わってみたり、言葉を発しながら物語遊びをしていたり、リズムをとったりするなどのグループができていた。
- 遊べない子もいたが、遊戯室から離れることもなく、汚れたくなかっただけらしい。

分科会記録

提言—絵画—「雪遊びの絵を描こう」—ふくずみ幼稚園

提言者 嵐 なおみ
司会者 石 崎 南緒子

1. 提言内容

(1) 研究テーマについて

「描きたい、造りたい 意欲をわかせる造形活動」をめざして、日常「絵を描く」という活動のときには、その指導内容について、いつも頭を悩ませています。「絵は子ども達の心の表現である」ということは、常に言われることで、頭の中ではわかっているはずなのですが、いざ、絵を描かせるという段階になると、「どうしたらよい絵を描かせられるだろう？」と、いわゆる大人の目で見た「よい絵」を何とかして描かせようというまぢがいをしていることに気がきました。そこで、今回、この研究にとりくむことになったのを機会に、子ども達がいきいきと活動をつづけていくための素材や教材の選び方、その展開の方法、等々を保育者と子ども達と一緒に考えてみようと思いました。

(2) 題材について

この研究のテーマにそって活動を始めることになったのは、3学期からです。何か絵を描くのによい題材はないかなと考えていたとき、この時期、一番身近にあり、触れる機会が多いのは、「雪」ではないかと思いました。幸い、我が園では、年間を通して「天気の良い日は元気に外で遊ぼう！（積極的に外気にふれさせよう）」と、遊びを通しての体力づくりにも力を入れておりますので、自由保育時にも外遊びが盛んです。そこで、「雪遊びの絵を描こう」という題材を中心に、それに関連して活動を広げてみようと思いました。

(3) 活動内容

活動を展開するにあたり、まずは「絵の具」に慣れることから始めました。年長児の3学期にして、ここから始めるというのは遅いようですが、実際のところ、絵の具を使う経験が今までにあまりなく、ほとんどがクレパスばかりだったのです。また、それと同時に、「雪」というものを印象づけようと、設定保育でも積極的に雪遊びを取り入れていくことにしました。（以下、具体的な活動内容、及び子どもの様子がスライドで説明されました。）

(4) まとめと反省

以上、「雪遊びの絵を描こう」という題材に至るまでに、いろいろな遊びをしてきたわけですが、この研究を通して、ただ「これを描くんだから描きなさい。」ではなく、その題材に対して子ども達の夢をふくらませるような話のし方や、「楽しかった。」という経験をさせることがいかに大切であるかということを変えて知らされたような気がします。子ども達が生き生きと活動を続けていくための素材や教材の選び方、展開等を考え、冬、部屋に閉じこめられた状態で発散させられないでいる子ども達に雪遊びの感動を画用紙の上に現わせることはできないのか、又、雪というものを印象づけることで楽しく絵が描ける活動を願いました。

2. 討議内容

(1) 生活をしている絵ははじめてか？

- 秋のいもほり

(2) 絵の具はだれが用意するのか？

- あらかじめ使いそうな色を用意しておく。

(3) かけない子への配慮は？

- 雪あそびでは導入でたっぷり時間もつかい、雪あそびも十分楽しめたせいか、描けない子はみられなかった。

(4) いつも机をださず絵をかくのか？

- 画用紙の大きさによるが、広いベースで描かせてあげたいので床になってしまう。

(5) いつもどうやって描かせるかと考えてしまっている。

(6) 描きたいのだけれど、むずかしくて描けないという子をどうするか？

(7) 楽しいという気持ちをどのように持たせるか

(8) いつも技術だけを教えているように思う

- たくわえのない子にいい絵を描かせるには

1. 遊ぶ 2. 体験 3. 言葉

を上手にとり入れて指導する。

- よく描けた子をほめてばかりいるが、そればかりではいけない。ほめるというよりも、その子が発見したものをみとめてあげる。

子どもの絵はメッセージである。子どもからうけたメッセージは子どもに返してやる。

- 絵の台紙の色は、目標が達せられれば何色でもよい。

- 描けない子には、その子にあったレベルにおとしてやる。

- クラスの子ども絵に名前をつけなくて先生が子どもの絵を覚え、よく知る事が大切。

- 題材をユーモアをもって与える。

3. 今後に向けて

(1) 絵を描く、絵をよくわかる、つまり子どもをよく知るということである。そして、それにきちんと対処していくのが先生の役目である。

身心がきちんと発達してきているか。技術、表現力をきちんとつけていく事が大切であり、子どもにあまり多くの題材を与える必要はない

(2) 子どもの一番興味を持つものを与え描かせる。

絵は子どもと先生の協同製作なのである。教師が感動しなくては子どもも感動しない。幼児画の指導のポイントは心である。

(3) 子どもが何に感動しているかを理解する事が必要。

それらをしっかりとらえていくことによって、個々の生きた絵が生まれてくる。

校 種	幼 稚 園
分 野	製 作
学 年	2 中
教 室	3 0 2

「はこであそぼう」

園 児 二年保育年中つばめ組 29名
授業者 樋口裕美(第一幼)

1. 題材設定の理由

子供達が楽しんで造形活動を行なうためには、安心してとりくめる素材や材料が必要です。あき箱は子供達にとって身近にあるとおきの素材であり、又、扱いやすいものの1つです。そこでここから、1人1人の子供の自由な発想やイメージを大切に認めてあげたいと思います。

2. 目 標

○あき箱を使って作る楽しさを味わう。

3. 保育の歩み

最初は箱をつぶしたり広げたりして箱に親しみ、序々にハサミやセロハンテープ等の用具を使った遊びに発展させました。本時は、切ったり貼ったりする事を中心に、楽しんで作らせたいと思います。

4. 本時のねらい

○身近にある材料を使って、いろいろなものを楽しんで作る。

5. 準 備

あき箱、空容器類、セロハンテープ、ハサミ、その他。

6. 本時の展開

時 間	活 動	指 導 上 の 留 意 点
9:00	<ul style="list-style-type: none"> ○登園、準備 ○今までに経験したことを思い出しながら作る事への興味をもたせる。 ○材料に目を通す。 ○何が出来るか、どんなものを作りたいかを話しあい、各自のイメージをふくらませる。 ○楽しんで、とりくむ。 ○箱を切ったり組みあわせたりして自由に作る。 ○用具をかたづけ、身近の紙くず等をきれいに拾う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○今までの経験が基本になることを、子供達に理解させ、用具の使い方等大切な点は、再確認させる。 ○いろいろな材料を用意し、自由に選ばせる。 ○材料をどうしたら充分活用できるか、子供達自身に気付かせたい。 ○ひとりひとりの発想や努力を認め、みんなが楽しんで活動に参加出来るようにする。 ○出来上がったものは、大切にする。 ○協力して、かたづけさせる。
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ○降園 	

授業討議記録

—幼稚園—製作— はこであそぼう

授業者 樋口裕美

司会者 藤沢邦子

1. 授業者の反省

- イ. 初めはフリーテーマで製作しようと思っていたが、作れない子がいるので「海」というテーマを与えたが、全く関係のないものを作った子もいた。
- ロ. 段階としては、箱に親しませるために、5月から自由工作をはじめた。6月からテーマを与えて製作した。回を重ねる毎に工夫する姿が見られるようになった。
- ハ. 用具の使い方は、ハサミが難しく、持ち方を注意してきたが、徐々に良くなってきた。

2. 討議

- (1) 教材の与え方について、「ビニールシート」の中に徐々に入って行って、海のようなすがでいてよかった。
- (2) ビニールシートを使って楽しそうだったが、作った作品が乱暴に扱われていたのではないかと、作品は大切なので疑問に思った。
 - 波の動きを出すために子ども達はシートを動かしていたが、少し動いただけでこわれてしまう作品もあった。そのこわれた作品を自分でどこが弱かったのか気がついて工夫してなおすようになるので、良いのではないかと思った。
- (3) シートの位置は中央より隅の方がよかったのではないかと。シートを子どもが動かすより固定しては？
- (4) はさみの使い方、4才児で立体の厚いものを切るというのは、かなりの力があることだし、そのために使い方も乱暴になるのではないかと。やはり無理のようである。
- (5) 出た作品を子ども達に見せてはいたが、他にもっと工夫があったのではないかと。
 - いつも出た順から作品を見せているので、今回もそうした。ふだんは時間外に展示したり鑑賞したりしている。
- (6) 個人的な時間差は、どのようにしているか。
 - やはり個人差があるので、早く出た子には工夫させたりする。いつも全員出きあがってから遊ぶ。
- (7) 遊ばせ方はよかったが、シートの位置に問題があったのではないかと。又、もっと大きくても良かった。
- (8) クレヨンを使わずに、色紙を用意しても良かった。
- (9) ハサミの使い方にしても、やわらかい素材をもっと用意してもよいと思う。
- (10) 早く出きあがった子には、その子に合わせて、先生が指示をすることで良い。

分科会記録

提言「つくりたい意欲を高める活動とは」

提言者 大 畑 洋 子(札幌愛珠幼)
司会者 藤 沢 邦 子
助言者 森 川 昭 夫

1. 提言内容

- (1) 年間指導計画にそって保育している。
- (2) たて割保育が盛んである。(コーナー別活動)
- (3) 混合保育 2月の単元「冬のあそび」より たこづくりの活動。
〈とりあげた理由とねらい〉
 - 新しい素材にふれ工夫する。
 - いままででない「切る、はる、つける」の方法を工夫する。
 - 子どもどうしの交わりにより心のふれあいが増す。
- (4) スライド使用で説明(各コーナー別活動のたこづくりの様子)
 - あらかじめ保育者が各コーナーの内容を把握し、子ども達に説明し、選択させる。
子ども達は使う物を持って各コーナーへ行く。
 - ビニールだこの場合、素材が扱いにくい事、切り方、竹ひごのつける位置、バランス、ひもの結び方を考え、工夫しながら作るように言葉かけをする。
 - 紙だこの場合、バランス、ひもの結び方、しっぽのつけ方、中心線の折り方、模様 of 工夫などを考えながら作るように、また、とまどっている子には友達どうし手伝うように言葉かけをする。
- (5) 水あそび(5日間の活動)
牛乳パック、箱などを使用し、船作りをする。
- (6) 水でっぼう
かなづちは年少の6月から自由保育で使用、竹(太い・細い)くぎ、かなづち、スポンジを使用。竹のあなは、あらかじめあけておく。
- (7) おみせやさんごっこ
期間中、自由に各コーナーをまわらせる。

2. 討議内容

- (1) 絵画や製作などの苦手な子の指導はどうするか?
 - コーナー別で色々な物を作っているの、苦手な子は簡単で見ばえのする物を作っているところへ行く。
 - 興味・関心をひくように言葉かけをしたりする。
- (2) コーナー別活動を普段の保育にどのように取り入れているか?
 - 単元にもとずいてコーナー別指導をする。毎日やるのではなくて20日間のうち5日間くらい。
- (3) 木工の材料などはどのようにしているか?
 - 近くに材木屋さんがあるので、いらぬものをみんなもらってくる。

○ のこぎりは年長が主で、コーナーの時は先生がついている時だけ使っている。

(4) コーナーについて

○ 教師が素材を与えて作ることもよいが、子ども自身が材料を選び作るのもよいのでは

(5) 年令や、クラスによって結果に差があるので、そのへんはどう考えているか？

○ 子どもには個人差もあるし、伸びる時もある。同じクラスばかりでなく色々な刺激をうけるので良いのでは

(6) 見本のあり方について

○ 活動のねらいによって、ない方がよい場合と、ある方がよい場合とがある。

(7) 素材の生かし方

○ 先生自身が素材の特長を知り、アイデアを工夫して勉強しなければならない。

(8) 失敗した子への配慮

○ 子どもにたくさん失敗させて立ちあがらせる。

○ もう少しのんびりさせる。

○ 言葉かけを少なくする。

3. その他

(1) 幼稚園でも高度なことができるのは、先生の事前の準備が良いので楽しくできるようだ。

(2) 船作りでゴムをまいて動くようになっていたが、幼稚園でそこまでやらなくともよいのではないか。

7月29日 第2日目 — 作品を語る会 —

1. 第1幼稚園（3才児の男子のクレヨン・水彩画について）

2. あかしゃ幼稚園（5才児のイメージ画「かこむかし」レコードを聞きながら音の絵）

3. 発寒幼稚園（ひらおりの作品「組み折り」ちぎり絵）

4. 愛珠幼稚園（牛乳パックの舟・竹の水鉄砲）

<質問>

(1) 音の絵について、どんな構想のレコードを使うのか？

○ 「効果音（喜び・驚き）」などの題のついたレコード。ごっこ遊びをさせてかかせる。

(2) 技術的なものと芸術的なものをどのようなバランスで取り入れていったらよいか。

(3) 自主的に取り組まない子に対し、こちらから与えなければ経験しないうちに終わってしまうのでつい教師側から与えてしまうが、やはりやる気をだすまで待った方がよいか。

(4) 単に教師がきれいだと思って子どもたちに「どう、きれいだと思わない？」と聞くことがあるが、それはだめなのだろうか。

<まとめ>



技術的なことを教えるために

いろいろな方法で、子どもにイメージがかわくように言葉をかみくみだいて説明する。

校種	小学校
分野	造形遊び
学年	2年
教室	309

「牛乳パックで遊ぼう」

生徒 2年2組 41名

授業者 篠原 寛(新琴似緑小)

1. 題材について

子ども達の身のまわりにある物で豊富にある材料をつかって「遊び」という楽しい活動を通して造形活動をさせるために、材料として、給食で毎日捨てている牛乳パックを考えてみた。山ほどもある牛乳パックから子ども達は、どんな活動をしてくれるだろうか。ただ「何でもいいからつくろう」では、家庭にある積み木と同じで大量の牛乳パックを必要としないと考えられる。そこで「夏に雪合戦をしよう」、そのために「自分達のお城をつくろう」という遊びと造形活動をさせることにした。自分達の中に入るために大量の牛乳パックを必要とし、入り口、のぞき窓、お城らしくするために、いろいろな造形活動を

してくれるものと考えている。大きさ、遊び、共にふだんの図工の授業にない魅力を感じて少しでも全体的造形活動の楽しさを味わわせることに主眼をおきたい。

2. 学習のねらい

- (1) 牛乳パックを、切る、折る、つなぐ、接着するなどしながら組み立て、中に自分達が入れるお城をつくる。
- (2) 自分達のお城ということで工夫のあるお城にする。
- (3) グループが協力して、仲よく、楽しく遊びに参加する。

3. 用具・材料

大量の牛乳パック、ガムテープ、はさみ、しんぶんし、セロテープ。

4. 本時の展開

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○今日の授業の内容を知る。 ・雪合戦をするためにお城をつくる。 ・やくそくをきめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ただの壁ではなく、お城をつくることを強調する。(入り口、窓、形) ○つくり方とつくる時の約束を決める。
制 作	<ul style="list-style-type: none"> ○自分たちの工夫したお城をつくる。 ○新聞紙で雪玉のかわりに紙玉をつくる。 ○他のグループのお城を見合う。 ○雪(紙)合戦をする。 ○後しまつをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○大きさ・お城らしいか見直させる。 ○セロテープで止めさせる。 ○どんな所を工夫したか見合わせる。 ○遊ぶ時の決まりをつくり、仲よく遊びを楽しませる。 ○グループごとに後片付けさせる。

授業討議記録

—小学校—造形遊び—牛乳パックで遊ぼう—新琴似緑小学校2年

授業者 篠原 寛

司会者 赤石 芳郎(藤の沢小)

関 建治(恵庭市柏小)

1. 授業者の反省

- イ. 学校でいらなくなるもので、大量に集まるものを材料として造形遊びができないかということから牛乳パックを使った。
- ロ. 作りながらいろいろなことを発見させたかったが思うようにいかなかった。
- ハ. 時間のメドに甘さがあった。
- ニ. 紙玉の作り方を指導しておくよかった。

2. 討議

- (1) 全身で遊ばせるということから、作っていることが遊びなのか。出来上がったもので遊ぶのがねらいなのか。
 - 雪合戦から入って、それから城作りに入っている子どもは、城を作りながら遊びがいつでも頭に入っている。だから、このパックをつかっただけの授業は良いのではないか。
 - 遊びの雪合戦から入って自分はこういうものを作りたいという気持ちを持って作業に入っているから分けて考えることはない。
 - 作ることに目的があるのでなく、作る過程が大切なのである。
- (2) 造形遊びを どうとらえるか。
 - 造形遊びは、造形能力の基礎をきずくというのではなく、活動することにより発想し連想し次へのエネルギーをたくわえるためであり、主体的な子どもを育てるためにしているのである。
 - 遊びは遊びだが、その中に造形的要素が入っていなければならない。
 - 子どもたちのイメージが入る余地がなければ、ただの遊びになる。
- (3) 題材と指導について
 - ねらい(立たせて遊ばせたい)を達成させるためには、子どもたちに情報交換をする場を与えねばならない。
 - 遊びのドラマを教師がつくる。そのストーリーを自分で立ててみて最高潮はどこなのかをおさえ、その遊びが最終的にどこに行くのか 子どもたちにどんな遊びをさせ、何を育てるのかを見通すことが大切だ。
 - 牛乳パックを大量に見せられたときの子ども達の感動は素材との出会いが大切であることを示している。
 - 城を立てるとき、立たないグループもあったが、条件づけも大切だ。
- (4) 各学校では、どのような素材を利用しているか。
 - 海辺の砂・流木・海草・ダンボール・あきかん・紙・テープなど
 - できるだけ自然なものを
 - 子どもたちが 発想イメージ化できるもの。

分科会記録

提言 1. 「おり紙あそび」 2. 「継続して行った全身的な造形活動の実践」

長野 祐平(北九条小)
宮崎 むつ(澄川南小)

1. 提言内容

- (1) 長野…○ 全身を「全心」におきかえて、心の解放をねがって手軽に出来るものはないかというところから「おり紙遊び」が出てきた。
 - 手先や頭を使った楽しい遊びはないかということでこの題材を選んだ。
 - 生活にむすびついていたので児童は大変喜んだ。
- (2) 宮崎…○ 造形遊びでエネルギーな活動を続ける源泉は何か。
 - ・ 図工についての概念に抱束されない。
 - ・ 子どもの発想、技法を規制しない。
 - ・ 子どもの試行錯誤を容認する。
 - ・ 偶然性やスリルが新たな意欲を刺激する。
 - 題材を考えるにあたって
 - ・ 全身を使って遊ぶもの
 - ・ 自然の素材をとり入れ、発想、連想を楽しめるもの
 - ・ 造形的な深まりを経験出来るもの。

2. 討 議

- (1) おり紙遊びについて
 - 表現という時間の中で「おり紙」をしている手作業の大事なことは当然だが、折るということをはぶいて与えることも考えられるのではないか。
 - 子どもの活動となると、折り紙はあまりにも決められた条件にありすぎるのではないだろうか。もっと大きい紙がほしいというような要求が出るような場の設定が必要ではないのか。
 - ・ 低学年の初期の段階では、一番手ごろな大きさが、おり紙と考えた。
 - 全身を使うばかりが 造形遊びではなく、おり紙のようなものも純粋な造形遊びに入ると思う。
- (2) 合科学習について
 - 図工科のウエイトをどのようにとらえるか。
 - ・ どちらにウエイトをおくかではなく、活動をどうとらえるかが大切で、直接評価にむすびつけない方がいい。
 - ・ 教師が、この教科のウエイトは ことというようにおさえをはっきりさせて指導に入る。
 - ・ 動くおもちゃのようなものは、理科でスタートして、図工に変わるという手順も考えられる。

- 合科が造形遊びとどのようにつながるか。
 - ・ 体で感じ覚えていくのは図工。分析のような思考面は他教科のように、総合と合科の面を分けて考えていくべきだ。
 - ・ 合科を造形遊びと決めてはいけない。
- (3) 1年から6年までの継続的造形遊びについて。
 - 造形遊びとして全校的に取り組むために
 - ・ 図工の先生だけができるというものではだめで、どの先生にもわかるということを大切に、実践例とその指導案(資料別プリント)を作成しまとめた。
 - ・ 学校あげての研究が必要で、素晴らしいことだ。
 - ・ 6年生の活動を見ても、ゆとりがあり、楽しさがつたわってくる。
- (4) 素材の与え方について
 - 遊びをより発展させるために、素材をどのように与えるかと、その見通しを教師がしっかりとおさえておかなければならない。
 - 素材や場の設定については、日常的に研究をかさね、その具現化に最大の努力をしなければならぬ。
- (5) 課題の提示について
 - 最初の投げかけ方が非常に大切である。
 - 子どもの自発性を誘発させるような課題をしっかりと与えることが必要である。
 - この遊びが、どんな遊びに発展して最後にはどうなるのかというところまで考えた課題の提示が考えられなければならない。
 - 子どもたちに与える言葉を大切に、イメージの広がりや意欲の高まりをうむことばえらびに気を配ることも大切。
 - 最終的には、目や手にいくが、心をゆりうごかす課題の提示を心がけるべき。
- (6) 後かたづけについて
 - 後かたづけも学習の中に入っている。
 - 遊びのあとという感覚ではなく、後かたづけも活動の一部として見る。
 - ・ たとえば、新聞を使って造形遊びをしたとき、「大きなかたまりをつくろう」というようなことばで 子どもたちは喜んで紙をまるめ、そのことがあとかたづけにつながるだろう。
- (7) 教師の立場
 - 子どもたちが考えついたものを、より適確に発展させるよう助言するのが教師の立場である。
 - 子どもの情報交換の場をつくってやる、そこが教師の出番でもある。
- (8) 評価について
 - 子どもたちが、遊びの中でエネルギーに活動していたら、それでいいのではないか。

校 種	小 学 校
分 野	絵 画
学 年	2 年
教 室	3 0 4

「ひっかいてかく絵」

生徒 2年1組 40名

授業者 奥山 慎(白楊小)

1. 題材 ひっかいてかく絵—スクラッチ

2. 題材設定の理由

低学年の児童にとって一番身近な画材であるクレパスを普通の線描材として用いるのではなく、ぬり込みを重ねてスクラッチ技法を用いることによって、表現方法の広がりを経験させたい。また、楽しい夢の世界を想像して線がきすることによって、表現する喜びを十分に味わわせたいと考える。

さらに、ぬり込みの作業は根気のいる仕事であるので、ていねいにしっかり仕事をするということもこの題材で体験させたい。

3. 題材の目標

スクラッチ技法を使って表現させ、色の美

しさを偶然の効果の面白さに気づかせ、表現の楽しさを味わわせる。

4. 指導計画

第一次 主題をきめ、ひっかいてかく絵の手順を理解する。

第二次 ひっかいてかく絵で表現する。かく絵と違った美しさを鑑賞する。

(本時)

5. 本時の目標

- 自分のかきたいものを線がきを生かして効果的に表現する。

- 偶然の面白さに気づき、楽しみながら表現活動する。

6. 本時の展開

過程	学 習 活 動	留 意 効
導 入	<ul style="list-style-type: none"> • 前時の学習をふりかえり、本時のめあてを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> • ひっかいたクレパスのくずで机や床、衣服をよごさないように配慮する。 • 線が細くて絵が単調になる児童には、一番かきたいものを強調させたり、ひっかくものを変えて線の太さに変化をもたせたり、線をならべて面のような効果が出ることなどを指導する。 • 主題ごとの展示を工夫する。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> • 持ってきたくぎなどを使い、ひっかいて絵をかく。 • ひっかく道具によってちがう線を効果的に使う。 • かきながら浮かんでくるイメージをさらに広げながらかいていく。 • 楽しみながら制作する。 	
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> • 友達の作品と自分の作品を比べてみたり、自分で表わしたかったことを発表したりする。 • 友達の作品のよいところをみつける。 	

7. 準 備

クレパス、新聞紙、画用紙(ハツ切)、ひっかく材料(くぎ、ドライバー、フォーク、針金など)

授業討議記録

一小学校一絵画一ひっかいてかく絵「夢の世界」札幌市立白楊小学校2年

授業者 奥山 慎
司会社 佐藤 靖(伏古小学校)

1. 授業者の反省

- ア. (専門は社会ですが、この授業をすることにしました。)イメージをふくらませる題材はこれが初めてである。
- イ. 参考作品に提示した作品“花火”は^{ゆめ}のイメージをふくらませるためだったが、特にイメージのかたまっていない子に影響を与えたようだ。(模倣をする子がいた)
- ウ. 黒インクをローラーでかけて、ぬりこみの補助とした。
- エ. 2年生にとって“夢”という抽象的なものに対するイメージづくりに抵抗があった。
- オ. 用具の不足で細い線が多くなった。
- カ. 作業に結構時間がかかった。

2. 討議

(1) イメージや発想について

- イメージ化の段階で、参考作品の提示の工夫が必要である。
- 子どものとらえた夢といっても、既成の概念的な形も多く見られる。いろいろな機会を通して、造形感覚を鋭敏にしたいものである。
- 同じ題材を扱ったことがあるが、細い線や太い線を集めて面にするようなところみがあまり見られなかった。
- 私たちの期待した通りにはいかないが、子どもは思わぬところで子どもらしい(その子でなければ持っていないもの)表現をするものである。

(2) 題材について

- 「ゆめの世界」という題名そのものも広すぎないだろうか。もう少し、ぐっとしぼって発想させた方が意欲化にもつながっていくのでは……。
- 道具と線の関係などを説明しても良かったのでは……。
- 多彩な色彩が目立ち、集中よりも拡散性が強くなるのではなかろうか。だから、事物をしっかり表すというよりも、花火のような題材が適しているように思われる。
- よごれても良い服装にし、のびのびと思いきりかけていた。
意欲的に取り組んでいたし、本時のねらいも達成されていた。
子どもに接する態度から、日常の実践活動のすばらしさが想像できる。
- 1・2年生の線描を大切にするという指導、また、興味や意欲のあるこの期の子どもたちにとって、この題材は良かったと思う。

分科会記録

- 提言 1. 豊かな表現力を育てる絵画指導をめざして
2. 感動を表現に結びつける手だてについて

永井 恭子
高田 珠美(二条小)

1. 提言内容

(1) 永井先生(1年生)

のびのびと豊かに表現させたい……そんな願いを持って1年生の絵画指導をスタートした。しかし、子どもの実態を見ると、画一的な絵や筆圧の弱さ、限られた色しか使えない子などなど、いろいろな問題点も浮かび上がってきた。

とにかく、もう少し子どもたちの目を自然の営みに向けさせ、画一的な遊びから脱脚させさらに生活経験を豊かにしなければ……と考えた。

- 精神を解放し、全身で取り組める活動から
 - ・ らくがきごっこ……学校のアスファルトや広場にチョークでかく。
 - ・ ハイポーズ……全紙判の画洋紙を2枚はり合わせてコンテでかく。
- 生き生きとした遊びや活動から見つけ出す学習を
 - ・ 見つけたカード……発見やおどろき、知らせたいことを絵にかいて
 - ・ 形みつけ……1つの形から多様なものを想い浮かべる面白さをねらって
- 線がきトレーニング
 - ・ 線あそび ・ はみ出そう ・ つけたそう

『見のがさない確かな目、生活経験の豊かさ、心の耕やしと解放』これらを育てることによって、生き生きとした表現活動も生まれてくる。

(2) 高田先生(1年生)

小さく描く子ども、まん画的、いつも人形さん、うすくしか色をつけれない子ども……こんな子どもたちをなんとかしたい。そのために、次のような手だてで実践をこころみしてみた。

- 大きく描こう……模造紙2枚の大きさと、概念くずしと全身を使ってかくことをねらって。
- ありさんになって野原をゆけば……心に感じたことを大切に絵で表わす。
- 写生会 学校で遊んだこと……大きくのびのびとした表現を大切に。
- 雲の形見つけ……全身を使ってかく。
- 南の海でお魚と泳いだら……ただ羅列的に描くのではなく、意味づけや関連を持たせて。

2. 討 議

ア. 共通のパターンは乏しい発想から生まれてくる。

- ・ 発想とは、内側から満ちあふれてくるものでなければならない。子どもたちは絵を描く時、身近なものから表現しやすいもの、かんたんに描けるものなどを取り上げる場合がある。こんな子どもたちには、生活経験を豊かにしながら発想そのものも新鮮にしていく必要がある。生活経験や表現させる対象をドラマ的に表現させる。これがベースにならなくてはいけないだろう。

イ. 大きく描くということ

- ・ ひとつのプロセスであって、大きくも描けるということが重要である。大きく描くということは、感動の中心や焦点化などがはっきりしていると考えられることもできる。そのものずばり、構成もしやすくなるのでは……………。

ウ. 新鮮なイメージを卒直に表現させる。

- ・ 実践してみると本当にむずかしいものである。もっともっとたくさんの実践を分析し、かみくだきながら、ひとつひとつ積み上げていかなければならないだろう。
- ・ 教師側の豊かな心や発想の転換・準備性・計画的体系的な学習・基礎訓練・技能などをおさえた指導がなければならない。
永井・高田両先生の実践に拍手を送りたい。
- ・ 普段の生活の中でも、イメージのふくらましが大事にされていることが、のびのびとした絵をかくことにつながってくる。
- 低学年は、特に文が書けないから、自己実現という意味からも図工指導が大切である。自由な表現は、入学前からやってほしいが、ともすると 逆行するような指導も見られるのは残念である。
- 「誰でもできる図工指導」でなければならない。そして、自己実現をどうさせるかということであるから、そこを指導者は、じっくりと考えていかなければならない。
- 一回の授業がすべてではなく、子どもたちの持っている願いをくり返し達成させながらさらに子どもたちを生かしていく実践でありたい。
- 発達段階に合った指導、温かい会話のある指導をつくり上げよう。
- 子どもの実態を常にとらえ、それをふまえて次の学習への発想を練るようにしよう。

<永井先生の提言へ>

常に子どもをどうするか見通しを持ちながら、必要かつ効果的な指導をしている。

低学年における基礎基本をおさえた指導でもある。子どもの育つ授業づくりに感心した。

<高田先生の提言へ>

子どもをなんとかしたいという切実な願いが、指導過程のいたるところに見られる。

先生のやさしさが子どもたちに伝わり、さらに、子どもたちが自分たちの描く絵を大きく変えていっているのが作品から見受けられる。

子どもを大切にしている実践指導だった。

校 種	小 学 校
分 野	絵 画
学 年	4 年
教 室	3 0 7

構想画「ふえのしらべに」

生徒 4年1組 37名

授業者 益村 豊(中央小)

1. 題材について

構想画のねらいは、児童が本来持っている、自由で豊かな夢や空想の世界を、心情の高まりや個性に結びつけて、のびのびと表現する喜びを経験させることと、自らの構想を絵画的表現に具現化する技能を身につけさせることにあるといえる。

ここで、「ふえのしらべに」を教材化した理由は、音楽から受けた印象をもとに、物語をつくり、その情景を表現させることで、自分の主題をよりよく表現するための画面構成や彩色の工夫が学習できると考えたからである。音楽という抽象的な要素を構想の契機とさせることで、個々の児童が、自らの心象をより豊かに広げ、個性を生かした深まりのある表現をめざすことができると考える。この題材を通して、児童に身につけさせたい力は、主になるものと従になるものの関係、大小、上下、重なりなどによる構成の工夫、混色や重色、筆使い、水使いを中心にした彩色の工夫であるが、ここでは特に、洗い出しの効果を生かすことで、児童の発想をより広げ、構想力を高めていきたい。

5. 本時の展開

過程	学 習 内 容
導 入	<ul style="list-style-type: none"> 作品を鑑賞しあうことで、主題を確認し、表現のめあてを持つ。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> 洗い出しの下地から、さらに発想を広げる。 主題をもとに、色調の調和や強調を考え、色づかいを工夫して描く。 水づかい、筆づかい、色づくり、重ねぬり など 音楽を聞き、情景を想像したときの印象を思いうかべながら描きすすめる。
整 理	<ul style="list-style-type: none"> 作品の鑑賞しあい、これからの表現活動の参考にする。

2. 学習のねらい

(1) 音楽を聞いて、心に浮かんだ情景を色や形で表現することができる。

(2) 自分の主題を表現するために、画面構成や彩色の工夫をすることができる。

3. 指導計画(8時間)

- 音楽を聞いて主題を持ち、構想を立てる。
- 全体の構図を考え中心になるものから描く。
- 中心になるものが生きよう周りを描く。
- 主題に合った色調を考えながら色で描く。
- 明るい色から順に色を塗り重ねる。
- 全体の色調を考えながら、洗い出しをする。
- 下地をもとに発想を広げて描きすすめる。
- 全体のまとまりを考えながら仕上げる。

4. 本時の目標

洗い出しの下地をもとに、混色や重色の効果を生かして、自分の主題に合った色づかいで描くことができる。

授業討議記録

一小学校一絵画中学年一構想画 「ふえのしらべに」中央小学校4年

授業者 益 村 豊
司会者 福 島 斎(平和通小)

1. 授業者の反省

- (1) 児童の実態として表現力・空想力が劣っている。自由な空想力 表現力を学ばせたいと考え音楽から受けたイメージや心象をもとに表現させてみた。
- (2) 中心になるものをかこうという目あてに向けての手だてが明確でなかった。
- (3) 音楽はサンサーンスの動物の謝肉祭かからえらんだ。条件設定として ・鳥とお話できる笛だよ ・鳥とどんな話をするのかな ・笛を吹いているのは自分だよ ・自分の他に周りに友達 ・札幌の街 ・森や緑を想像して入れよう 等を決めた。
- (4) 顔の色等、肌色を使わずに肌色の概念をくずすつもりで同系色でかかせて色の変化を意識させた。只、その事が本当の色でなくても良いという概念をうえつけたかもしれない。このあとの生活画でもう一度肌色を工夫して作らせた。

2. 討 議

- (1) 白をませる事で教師の期待するものは何か。
 - 白を使うと下地の色に影響されずに描ける事から指示した。子どもから明るく 楽しくしたいという声が多かったので色をたくさん使うようにしたかった。
- (2) 写生画と構想画の両方かかせて子どもの感想はどうか。
 - チェロ弾きの絵(物語)が一番楽しいという感想だった。
- (3) 感 想
 - 子どもたちの絵は生き生きとしているし、人間のバランスもよい。
 - 発想・色彩が豊か、筆づかい・水づかいの確かさ、先生としての魅力もあった。

3. 助言者から

- (1) 概念を気にする事はないが、誤った概念はくずす必要がある。(子ども自身の力で)
- (2) 色がにごるといふ点では、色はパレットの上で混ぜると美しい色が作れるが、紙の上で何色か重ねるとにごる。
- (3) 構想画は ・自由な構成力 ・自由な想像力 ・自由な色彩感覚 ・造形思考
・創造性を高めることができる。
- (4) 教師のねらう技法と子どもが願う自由な技法、この中間あたりをねらうといいが、なるべく子ども側に近づいた方がよいものができる。
- (5) 何もわからないので良い絵をかかせる事ができないという先生がいるが、かえってわからない方がよい授業ができる事もある。教師が指示することが悪い方へ進む事もある。
子どもがやりたい方向へ向けてやる方がいい絵ができる。

1. 提 言

—海底探険を指導して—

小 柳 雄 嗣(桑園小)

(1) はじめに

3年生の段階では、自己中心の狭い世界から自他の関係に目覚め、自分を取り巻く広い世界にも興味と関心が展開していく。今までの経験を生かし、自由な空想の物語を展開するような題材を取り上げるなかで、子供自身の願いに根ざした自由な空想の世界を広げさせたい。

お話の絵の題材の取り上げ方は、物語を読んだり聞いたりしてから感動的な場面をとらえて表わす方法が多いが、今回は、ある程度の条件を設定した中で、だれもがもっている夢の中に自分自身が主人公となってとびこみ、お話をつくりながらかき表わす方法をとった。そうすることにより子ども達は制作の意欲を高め、自らのイメージを拡充発展していった。

条件としては

- ① まず、バックになる海をぼかしの技法で作ることにした。— 偶然できた形・色からもイメージをわき立たせることもねらった。
- ② 何かに乗って海底探険をすることにし、バックとの関係から、別の紙に描き切り取って画面に貼ることにした。—画面上で切り取った自分を自由に動かすことより、子ども達は遊び、お話を展開し充実させていくこともねらった。容易に構図を決めることもできる
- ③ ものともとの関係、大小・長短・濃淡・遠近などの取り合わせを画面構成の中で考えて描くようにさせた。

—イメージを浮かばせ表現に結びつける手だてについて—

富 所 玲(緑丘小)

(1) はじめに

3年になると、今までの様に、心の中に浮かんだものを表現することにより、対象をじっと見つけ、より正確に描きたいという意欲が強くなってくる。このため、観察して表現する題材には、新鮮味を感じ、喜々として取り組む反面、空想したり、想像したりして描くことを嫌がる子どもも出てくるようになる。無理に描かせると、特に女子に概念的な絵を描く子どもが多い様である。そこで、物語の絵の指導の中で、子ども達が、それぞれの場面をくっきりと思い浮かべ、迷うことなく、各自のイメージを表現することができる様に、私達は、指導過程の中でうつつき手だてを考えなくてはならない。以下はその取り組みの一例である。

(2) 取り組み

- ① 題材選びで……3年生の基礎、基本力としての上下、重なり、大小の空間表現ができる物語を探して、イメージの浮かびにくい部分にことばを加えたりしておく。
- ② 指導過程で
ア．課題提示では、主題をはっきりとらえさせる為に、読みきかせの方法をとる。これは教師の近くに児童を集め、緊張感を持たせて話をきかせることができる。話の途中で、「これからどうなるかな。」などと呼びかけ、反応を確かめながら読む。
イ．イメージのほりおこしの為に、具体物を見せる。こうすることにより、子どもの概念を砕いたり、新鮮な驚きや喜びを与えたり、見たことのない物、わからない物の形や色をはっきりさせ、子どものイメージをより明確にし、表現意欲をかき立てるのに役立つと考えた。

1. 討 議

- (1) 言葉だけでなく本当に子どもに感動させること、描きたいと思うようにさせるにはどうしたらよいか。
- ・ すばらしいもの 本物に出会わせることが大切ではないのか。
- (2) お話の中の主題をどう子どもに見つけさせたらいいのか。
- ・ 何を育てようかという教師側のねらいが子どもに伝わるような手だてをとってやる必要があるのではないか。
 - ・ お話の絵の中で物語をもってきて描かせるのは、その時期の子どもの何を育てたいかを考えて物語遊びをするのが大切でないか。
 - ・ 物語の絵と空想の絵と分けて考える必要がある。
空想の絵は ◎表現する工夫をやしなう ◎発想 経験を広げる
- (3) 色づくりについて
- ・ 混色や重ねぬりの経験をつんで、その上で子どもに自由に色の選択をさせたいと考えている。
 - ・ 水彩絵の具は水加減が大切である。水を使わない色のぬり方はまだ早い。
 - ・ 絵の具の使い方の基礎的なことは1時間、1時間の中で目的を1つにしぼって指導していく事が大切である。
 - ・ 感情を色彩で表現するのはむずかしい。(3・4年では)
- (4) 時間内に作品ができないことと条件づけをしていくとある程度画一的な作品ができてしまうのではないか。
- ・ 教師のねらいはその時間の内のできることを子どもにやらせるようにしなくてはならない。
おそくなる子どもは
◎下絵がこまかすぎる
◎同じところをなぞっていて技法的にとまどっている子
◎細い筆しか使わない子
が原因と思うが、どうして遅くなるのか1人1人の原因を見きわめて、その子に合った目あてを見つけて手だてをとってやる事が大切である。
- (5) 感動してかかせる手だては
- ・ 本当に子どもが感動してかくには、本当にかきたくなるような体験をさせてやる事が大事である。大きい絵をかかせてみるのも良い方法の1つである。
- (6) 遠近感・大小関係をとらえさせるには
- ・ お話の中に遠近感が必然的に出てくるものをえらぶことが大切。
- (7) 絵がマンガ的になるが
- ・ 継続的に指導する事が大切、観察する時に気持ちを入れさせる。
- (8) 良い発問
- ◎～してみたらどうでしょう ～するにはどうしたらよいでしょう
～したらどうなるでしょう

校 種	小 学 校
分 野	絵 画
学 年	6 年
教 室	4 0 3

物 語 の 絵 「 つ る 」

生 徒 6 年 3 組 3 8 名

授 業 者 大 場 章 子 (西 岡 南 小)

1. 題材について

物語に「つる」を選んだ理由としては、①子ども達の心をゆさぶる感動的な作品であること。②視覚的な描写表現を多く含んでいるため、子どもがイメージを形成するうえで、極めてプラスになること。③広がりや遠心感を生かした画面構成を十分に追求させられることが、あげられる。特に今回は、この題材の指導を通して、子ども達に画面構成力を身につけさせたいと思っている。具体的な手だてとしては、画面構成上、必要なものを単純化し、それらを画面の上で操作することを考えてみた。そうすることが、子ども達のイメージ形象化に役立ち、どの子もつまづきなく自分のイメージを表現できるのではないかと考え、取り組んでみた。

2. 学習のねらい

- (1) 物語の中で心に浮かぶ場面を生き生きと表現する力を養う。
- (2) 物語の主題を効果的に表現するために、

(3) 展 開

過程	学 習 活 動	留 意 点
導入	・ 主題がよくわかる画面構成を考える。	・ 参考作品提示
展開	・ 鳥の大きさ、位置、流れをつかむ。 ・ 空と山と地面の構成を考える。 ・ 鳥をかき入れる。	・ 補助材料使用〈机間巡視〉 ・ 空間の広がりを意識させる。
整理	・ 主題の表れ方について話し合う。	・ OHP使用。

- (4) 評 価……主題がよくわかるような画面構成ができたか。

画面構成や彩色を工夫させる。

- (3) 独自の新しい世界を創造していく楽しさや喜びを持つようにさせる。

3. 指導計画〈10時間〉

- 物語を読み、描く場面をきめる。〈2〉
- 画面構成に必要なものの写生。〈1〉
- ラフスケッチをする。〈1〉
- 画面構成を考える。(本時) 〈1〉
- 下絵をかく。〈1〉
- 着彩する。〈3〉
- 鑑賞 〈1〉

4. 本時の指導

(1) ねらい

- 主題がよくわかるように、大きさや組み合わせを工夫した画面構成をする。

(2) 準備

- 参考作品、OHP、TPシート、画用紙、二等辺三角形に切った色画用紙、サインペン。

授業討議記録

—小学校—絵画高学年—物語の絵「つる」—西岡南小学校6年

授業者 大場章子

司会者 蛭子信也(北陽小)

1. 授業者の反省

- (1) 事前指導として、次のようなことに取り組んだ。
 - ・木と道と山 — 遠近感
 - ・砂漠と足跡とピラミッド(4色) — 遠近感
 - ・流れ(方向)の指導 — 木と木の葉と風の流れ
 - ・にじみと重ねぬり — 鳥7羽
 - ・流れと奥行きをつくる
 - ・写生会(道庁)
- (2) 5年の時、画面構成を指導していなかったため、平面的で奥行きのない作品が多かったので、今回は画面構成に力を入れた。
- (3) 授業時間が長くなった。

2. 討議

- (1) ラフスケッチについては、各自が気に入るまで何枚か描かせてみた。前はこう思ったがきょう学んでこうなったというように考えていくためには大事なことである。
- (2) 最初のイメージを操作しながら再構成させてイメージをふくらませていくことは必要なことである。ラフスケッチの時は、具象性があるがよく見えていたが、そこに、もっとよくしたいという子どもの願いを取り入れるために、今回の動きのある画面構成の学習に取り組んでみた。しかし、本来なら、3年生ぐらいで身につけさせておく必要がある。
- (3) デザインなのか絵画なのか — すべての子どもに、造形要素(今回はくりかえしのリズム)を身につけさせるには、こんな方法があってもいい。子どもは、イメージをふくらませながら表現していて、見た目はデザイン的であるが、主題に向かって作業していた。ただ、感動がいつまでも失われないように配慮していかなければならない。
- (4) 画面構成と色の二つを同時に取り入れていったのはうまい方法であったが、思うように表現がきかない子、まとまりのとらえ方が花火のようになっている子等が目立った。空間の広がりということをもう少し強調しておくとうよかった。
- (5) 感動表現を画面に表すということについて — 描写力が弱く、明暗の調子や色面(形の面積と色のボリューム)がなかなかうまく表現できなくて、子ども達はむずかしいと感じているのが現状である。そこで、色の要素(色のバランス、流れ、対比、明暗等)を大事にし、それらが一つのリズムになって出てくると、イメージがよりよく表現できることになる。そのためには、授業の中で、教師がステップ毎に区切って目標を明確にしながら進めていくことが大事である。
- (6) 今のカリキュラムでは、系統性は出ているが、具体的なものが不足している。今後は、できるだけ具体化したものを積み重ねていくことが必要である。

分科会記録

- 提言 1. 「林の中にある公園」を指導して……………窪田 恵子(伏古小)
2. 魅力ある「物語絵の指導」……………大沼 芳徳(幌西小)

1. 提言内容

- (1) 窪田 ○ 公園にある樹木と遊具施設やそこで遊ぶ子どもたちの組み合わせを中心に、画面構成を工夫する構想段階を大事に指導してみた。
- 6年生としてぜひ身につけなければならない基礎基本を中心に指導した。
(余分なところをのぞいて再構成する。公園を見る角度をいろいろ変えてみる。楽しい公園にふさわしい彩色をする。筆のタッチや線描の工夫 etc.)
 - 公園の位置を主として考えた画面構成では8種類ほど出ていた。
 - 子ども達一人ひとりに「たしかな表現」を身につけさせるには、その題材に必要な小さな仕事をきちんと怠りなく経験させた上で、画面構成に入るとよい。
 - とり上げる題材は、できるだけ子ども達一人ひとりが、いろいろ工夫できる余地のあるものを開発していかなければならない。
- (2) 大沼 ○ 物語を選ぶ時の基準としては、子ども達が興味をもち、しかも、その学年にふさわしい造形的な内容や情景が豊かで、学習時間が適当と思われることが大事である。
- また、題材の与え方としては、児童が自由に選んだり、教師が何か一つの物語を選んだり、教師が造形要素を考えて自作のお話を与えたりするなど、方法はいろいろ考えられる。
 - さらにイメージ化させるためには、映像型・推量型などの手だてが考えられる。
 - 発問の時のことば一つが子どもを生かすことにつながり、大事である。
 - 同じ絵画領域でも、写生画とか空想画というように、子どもの得意な分野があるようだ。

2. 討 議

(1) 提言1.について

- 再構成の公園なので、観察画というよりは構想画という雰囲気があるが、構想を主とした観察画というように考えられ、失敗ではない。
- 自分の目でしっかり見たものを表現していく中で、はぶきたいもの、つけたしたいものを考えて表現していくことが大切である。
- 現場でよく見て描いたと思われる遊具施設が一つか二つしか描かれていないが、もう少し時間をとってきちんと描かせた方がよいのではないか。
 - ・ しかし、あくまでも、図工の時間の中で描かせるしかないので、そうむやみやたらに時間をとることもできない。
 - ・ 各学校によっては、1日いっぱい写生会の日にしたり、毎日1時間くらいずつ時間を分けて取って1週間で完成させたりというように、時間の生み出し方には、いろいろ工夫する必要がある。
- 目にうつるものを忠実に描かせることは大事だが、時には、「きょうは目に入るものすべてを描きましょう」とか、また時には、「きょうは、これとこれだけをくわしく見て描きましょう」というように限定したりというように、教師の考えが必要になってくる。

したがって、観察する時間は別にとった方がよい。

- 緑色の工夫が足りないので、自然そのものの色の変化をもう少ししっかりとらえることが大事である。そのためにも、色の変化を学ぶ時間が必要であり、自然の色、頭で作った色など、いろいろ経験させることが必要である。
- 紙の選び方では失敗していると思う。もっと、ふつうの画用紙で、透明感、にじみ、重色などを経験させておき、その上で、蛍光ボール紙などを使うと、透明な部分や、どっしりした部分をぬり分けられてよいと思われる。
- 自然な空間と、不自然な空間があるので、公園の場所をしっかりと考える必要がある。

(2) 提言 2.について

- 物語の絵を指導する場合、次のようなことを考えておくことが大事である。
 - ・ 物語を構成させる形や色が出てくるもの。
 - ・ 既成概念にとらわれないようにすること。
 - ・ 子ども達が知らない方が新鮮である。
 - ・ 受け取りやすい造形要素が入っているということ。
- 形の指導と色の指導は分けた方がよい。
- 写生会の場所選びについては、いつも見なれている所がいいと思うが、ねらいをどうするかはきちんと教材研究しておく必要がある。
- 地域のよさを改めて子どもに見つけさせるよう、新たな視点をもって、子どもに発見させることも大事である。
- 写生会で育てなければならない力（表現力・技能）の系統性を考えて場所を決めることが大事で、子どもの世界からあまりかけ離れてもだめで、身近かなものを見つめ直すことも必要である。
- ねらいがしっかりしていれば、学級毎に絵がちがってもいいのではないか。
- 子どもの願いや考えていることを、造形活動の中で表現していくことによって認識が高まっていく。そのために、教師は、ときどき助言によって刺激を与えていく。もしまづければ、さらに、次の発問へと場に応じて対応していくことが大切である。

(3) ま と め

- 教師が、ふしぶしをしっかりとっておさえ完成にもっていくこと、評価をするうえでもよい結果が表われて効果的である。
- 必要なものと不必要なものを整備していくこと。
- 写生画と想画の間のような作品には夢がいっぱいある。夢のない子の作品はおもしろくない。いつも頭の中の画用紙に描かせるようにし思いをふくらませることが大事。
- 教師が事前に写生地を調べて、たまには場所を変えてやると、子どもも感動してよい作品が生まれる結果になる。

校 種	小 学 校
分 野	版 画
学 年	5 年
教 室	4 0 1

「荒馬おどり」＜木版画＞

生徒 5年4組 34名
 授業者 毛馬内 国 夫（東 山 小）

1. 題材について

今年の運動会で子どもたちは民族舞踊を初めて体験した。単純な太鼓のリズムでとても体力をつかう踊りである。どの子も汗を流して練習にとりくんだ思い出が楽しさとして残っている。この踊りを木版画に表すことは、主題を明確にとらえやすく、画面構成も友だちと話し合いながらいろいろ工夫できると考えた。また、動きの中から生きた線を見つけ出し、まわりの彫りの調子によってもいっそう動きが強調される明解な木版画を追求させたい。

2. ね ら い

主題意識を深め、構想を練り、見通しをた

てて表す力を育てる。

彫刻刀の使い方に慣れ、彫りと刷りの関係をとらえさせる。

3. 指 導 計 画

第一次 題材をスケッチする。1時間
 第二次 下絵をかく。2時間（本時3/10）
 第三次 彫る。5時間
 第四次 刷る。2時間

4. 本時のねらい

表したいものがいっそうよく表われるよう版に下絵をかく。

5. 本時の展開

過程	学 習 活 動	留 意 点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 画面構成したものをもとに版に下絵をかく。 	<ul style="list-style-type: none"> 主題意識をいっそう深めて、絵の中心となるところが強調されるように新鮮な気持ちで下絵をとりくませる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> 新しい気持ちでいっそう感じができるように筆で中心になるところからかく。 輪郭線だけでなく、形の中の感じも作例を見て表せるようにする。 	
整理	<ul style="list-style-type: none"> スケッチと比べて強調されたところを話し合う。 	

授業討議記録

一小学校一版画一荒馬おどり一東山小学校5年

授業者 毛馬内 国 夫

司会者 日 高 晴 夫(新陽小)

美

1. 授業者の反省

- イ. 久しぶりの高学年ででない題材で「版画をやってみよう」と考え、子どもの心を動かすものはないか、子どもの体験とか生活を追求した版画をと考え、今年の運動会でした民族舞踊「荒馬」のはげしい動きを何とか木版画にできないか、これにより今までにやったことのない動きのある木版画ができるのではないかと思いとくんだ。
- ロ. スケッチでは、道具作りはおもしろい表現をしたが、おどりの表現は横向きが中心なため動きが感じられなかった。そこで線がきでなく黄色のチョークで動きをつかまえコンテでたしかめの意味でかいてみたら前より少し良くなった。そこで体の動きや大小の組み合わせで おくゆきを表わせれば下絵ができるのではと考えた。
- ハ. 新しい気持ちで転写法でなく、直接版にかかせてみた。技術より表わしたいという表現を中心主題意識を表わせばと思えばスライドとかテープを使った授業をやってみた。
- ニ. 話し合いをもっていないが、子ども達は「もう少し大きさが、力強さが」という意識をもってくれたのではないかと思う。
- ホ. 時間がもう少し必要であった。すみ入れをしないで、物と囲りで白黒の意識づけをさせていきたいと考えている。

2. 討 議

- (1) 下絵のもつ特性をどうとらえるのか、下絵と作品とは逆になるのだが、子ども達はとまどわないか。
 - 題材によって、下絵と逆になっても、ねらっているものが表現できていればいいのではないか。
- (2) 白黒の関係で、すみ入れをしないことと、すみ入れをすることの違いは何か。
 - 下絵にすみ入れをしないで、参考作品のように 刃で筆のように描いていくことにより、白黒のおさえはできるのではないかと思う。
- (3) 授業の手順についての感想
 - 導入のふんい気づくりがとてもよかった。
 - 大きな動きをしっかりとらえ下絵の手順が参考になった。
 - 授業の手だてがしっかりし、子ども達が主題をしっかりとらえていた。
 - 学校内の行事、そして初めての民族舞踊をとり上げたことが、とても良いと思う。ただスケッチを運動会を取りくんでいる時にやらせたら良かったと思う。
 - 新しい方法でやられていて大変勉強になった。
 - クロッキーなど、しっかりやらせていた。
 - 熱心な動機づけ、ふんい気作りがとても立派であり、やる気を持たせるためにも、特に導入段階では必要であると思う。
 - 下絵を板に直接かいていたが、彫ることを考えて指導されていた。

分科会記録

- 提言 1. 「うつす遊びを通して紙版画指導」……………伊藤 誠(札幌北小)
2. 「板紙凸版の指導について」……………葛西 良子(新琴似西小)

1. 提言内容

- (1) 伊藤…今年はやらせる版画ではなく 引き出す版画でやってみた。
どの子にも、1年生のスタートラインに立ち ゴールも1年生のねらいに達成させたい。
表現する喜びを与えてやりたいと思いはじめた。
私の紙版画は形見つけから始めた。いろいろな紙をちぎり、その中から足とか手とかを選ばせた。
手の大きさをきめさせた。手と顔の大きさを決めれば だいたい形になる。
技法は教師がもっていて、版の作り出す喜びを引き出させたい。
○ 写す遊び→ 絵日記での取り組み→ 人形遊び→ 切り取り紙版へとすすめてきた。
- (2) 葛西…紙版から木版へのつなぎとして 板紙凸版がとても大切な仕事である。
紙版は、紙をつみ重ねて作っていく版であり、プラスの仕事である。これに対し木版は、刃でけずりとして作る版であり、マイナスの仕事である。
子どもにとっては、つみ重ねて作った紙版から、けずりとして作る木版の仕事は板であり、刀も使うことだし 大きな抵抗になる。
そこで つなぎとして 紙を使い簡単にできる板紙凸版が適切である。インクのつけ方、プレスの使い方をしっかりできると子どもでも簡単にできる。

2. 討 議

- (1) 紙版に至るまでの指導について
- 版画にはテクニックがあるが、それは教師がもつものであり、子どもにはいらない。
 - 造形活動は、やらせるものではなくて 引き出すものであり、遊びの中から自然に自由に気がつかないうちに作品ができていくものだと思う。低学年では 特に自分の体験や生活と結びつけて作品を作ることが大事だ。
 - 動きというのがとても大事だ。
 - 子どもの実態をしっかりとらえ指導しなければならない。
 - 子どもが満足する作品と教師の満足する作品がかみ合わないところが出てくるが、子どもの満足する作品をつくり上げていくようにしなければならない。
 - よい作品は、先生が苦勞しなければできないことがわかった。
 - 低学年では偶然性がある。
 - 良い作品を作るために造形活動をするのではなく、子ども達の力がクラス全体に広がることが大切である。
 - 低学年では、いろいろな題材を与えることが大切である。
 - 子ども達のよい面を伸ばしてやらなければならない。
- (2) 学年に適した版種の系統性について
- 3年生で、面から線になってしまうのが残念である。3年で板紙凸版が適しているのではないか。

- 各学年で版画の系統性をしっかり立て必要であればプレス機の購入をしてもらってはどうか。
- 版の大きさは、子どもにとって、切りぬいたり彫ったりするのに むずかしくないものを選ぶべきだ。あまり小さすぎると かえってむずかしい。
- 木版が最高の版画ではない。紙版は紙版のよさがある。
- 低学年は、紙版画で、4年生以上は木版になっているが、いろいろな教材を使ってその中で子どもを育ててはどうか。
- 中学年には、板紙凸版が必要である。
- 高学年の場合は、題材を整理して与えるべきである。

(3) 木版画の指導について

- 版画の構成は奇数が大事だ。くの字 への字 Vの字の曲がっている構図の方がよい。
- 木版の彫りでは、2センチ彫ったら休むという方法がよい。
- 4年生としては、自分とのかかわりあるものとして考えると、「笛を吹く子ども」などはよい題材といえよう。
- 4年生のリコーダーについては、大きな黒のかたまりとしておさえてはどうか。正面からとらえるのはむずかしいので、横からとらえてはどうか。手で 笛を持っているところを表わすのはむずかしくバランスがくずれてしまったが、4年生ではそれでもよいのではないか。まわりを彫ることより音が聞こえるような感じがする。
- 4年生あたりの目の表情はむずかしいし、音が聞こえるようなまわりの彫りもむずかしいので、彫り残しにより 音が聞こえる感じになると思う。
- 光の部分は白く、かげの部分は黒くというおさえで下絵をかかせてみた。
- 光とかげの指導では、モデルを逆光の中に立たせ、見る位置をかえ 光のあたり方やかげを見とらせる。このことは、描画の中でも徹底できる。
- 光とかげのとらえ方のできない子には、大まかに下絵の段階で考えさせていく。次に版木にマジックでかかせ、光の部分はぬらす。かげの部分は黒くぬらす。彫りの段階では光の部分を丸刃を主に使わせるようにした。
- 何をしているのかよくわかるのは、目ではないか 目の行き先が大切になってくる。身体の動きだけでなく視線を大切にはどうか。
- 表情をよく表わすには、部分スケッチをするのも一つの方法である。

(4) そ の 他

- 1年間に1題材で、順次性があり、出来上がってみなければわからないということであれば、基礎指導のようなものでうまくやるのが大切だ。版画板のうら面で刃の調子を見たりするのも一つの方法である。
- 1年生の紙の大きさは、かなり大きいのがよいのではないか。
- 1年生では紙版は、手でちぎって作ることを主に、2年生は細かい部分ははさみを使って版を作ってはどうか。
- 子どもの描いたしゅん間の気持ちを大切にしたら動きがなくとも良いのではないか、上手下手ではなく一生懸命やる子が良い。ぞうさんの足が六本あってもよい。

校 種	小 学 校
分 野	彫 塑
学 年	3 年
教 室	3 0 6

「お 話 か ら つ く る」

生 徒 3 年 2 組 3 7 名

授 業 者 桜 田 豊 (新琴似緑小)

1. 題材について

お話という想像の世界に出てくる人物や動物などをグループごとに粘土で実際につくる。これは、3年生になって仲間意識がめばえ始め、グループで共通の問題に取り組むことによってより一層仲間を意識することのできる題材である。お話の場面を決めたり、登場する人物や動物の動作を、グループごとの話し合いを大切にさせながらつくらせていきたい。

グループ製作では、共通のイメージを持ちにくいし、児童はまだ全体のまとまりにより、自分の作ったものを中心に考えがちである。実際にポーズをとらせて動きを見合ったり、お話の場面が他の人が見てわかることの大切さを説明し、配置の仕方を十分考えさせたい。

2. 学習のねらい

- (1) 物語の場面を想像し、登場人物や動物の感じができるように、粘土で立体に表現できるようにする。
- (2) グループで協力してつくる楽しさを味わう。

3. 指導計画 (3時間)

- (1) 作るお話の場面や作るものを決めて、形や大きさなどについてグループで話し合う。
- (2) 粘土の塊から引き出したり、つけたしたりして立体的に作る。
- (3) お話の場面の感じができるように、配置や形の特徴・動きについて話し合ってくる。
- (4) できあがった作品について、みんなで感想をのべよう。

4. 本時の展開

授 業 の 流 れ	児 童 の 活 動
<ul style="list-style-type: none"> ○ お話に登場する人物や動物を、粘土のかたまりから、つまみ出したり、つけたしたりして立体的に作る。 ○ できた作品を見合う。 ○ あとかたづけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各自のつくるものの大きさを考えて、粘土のかたまりを分配する。 ○ つまみ出し、つけたしによってつくる。 ○ ときどき、他の作品とくらべてみて、大きさ、動きなどを工夫してつくる。 ○ 自分の作品や他の作品の良いところ好きなところなどを発表しあう。 ○ 作品を大切に扱いなからあとしまつをする。

授業討議記録

—小学校—彫塑—お話からつくる—新琴似緑小学校3年

授業者 桜田 豊
司会者 富田 泰

1. 授業者の反省

- イ. 一週間前に授業をやり、本時のためにどこまでやればよいのか困った。
- ロ. ガリバー旅行記の本を給食時に読み進めた。そして、クラスのみんなが子どもになり、ガリバーを見張る自分をつくることにした。
- ハ. どこで見張りをしているのか、はっきりときめて行なわせた。
- ニ. お話の中になんとか溶けこんでほしいと思った。
- ホ. 本当になり切ってはいなかった。
- ヘ. 心情豊かに育てることは難しいが、一つひとつの授業の積み重さねで育つと思う。

2. 討議

- (1) 大きなガリバーの製作者は教師であるが、子どもといっしょにワイワイ言いながら、教師とともに、ガリバーを作る事は出来ないのだろうか。
 - 他の題材をカットするなど、カリキュラムの変更をすることによってはできるだろう。
- (2) 6時間ぐらいかけて、お話を口で言いながら、ガリバーを作っていたら、小人の大きさが考え出せたのではないか。また、4人グループなので、みんなでガリバーをつくり、残りで小人をつくるいろいろな大きさ、形の小人ができたように思う。
 - 自分のいる場所からガリバーが動いたらどうやってにげるか、を考えさせ、子どもの観察を高めるためにとった。
 - 量感は子どもではなかなかつかめない。3年生では大きなものを作る事はむずかしいと思う。2kgが限度であろう。
- (3) 作品をどうするか
 - 焼く事は考えていないが、夏休み中に素焼にし、子どもの作品を長く残こしたい気がする。
- (4) 手足がとっても大きく、バランスがとれているがその指導はどうであったのか。
 - 2kgの量が子どもに無理ではなく、処理できていたのは、1年生のときから豊富な粘土になれていること、また、朝とか帰りにクロッキーをさせていた。そして、身体に対して注目できていた。教師側からとやかく言わず、自由にクロッキーをさせていた。
 - 十校内に展示されている作品を見せて歩いている。そのとき大げさなのがいいと指導してきた。

3. 助言者から

- イ. 粘土授業のポイントは全体と細部のかかわり、粘土の抵抗熱を持たせる。そして題材が大きくかかっている。
- ロ. 本日の題材は良かったと思う。教師が楽しいと思えば作りたければ、子どもも楽しく作りたと思うものである。
- ハ. 出来た作品に対して、子どもが語っている場面がイメージを高めるのに大きな助けとなり、本時は成功している。
- ニ. 3年生としての彫塑学習は何が必要か、もう一度考えたいものである。高学年への橋渡しがなされたが、動き、その感じ、そして時間的な保障がされたか。
- ホ. 教師がつくった大きなガリバーをもう少し子どもたちに活用させることはできなかっただろうか。さわらせなかったが、ガリバーの横に寝た子がいたし、また、何個の粘土でつくったのかという量のちがいをつかんでいた子どもがいた。そんな子ども達の心の動きをつかまえて、活用すれば、子どもたちみんなのものになっていくのではないだろうか。
大まかに作る、そしてガリバーの体においてみる、また細部をつくる、最後に仕上げるという段階をもてば、もっとかかわりを持ったのではないだろうか。
- ヘ. 一人の子のつぶやきが他の子の製作のきっかけとなっていく授業は大切である。
- ホ. 子ども達から豊かな言葉が出ていたのは日常の指導の中で、作品について話し合う時間をきちんと設けている結果だと思われる。

4. 参加者からの感想

- イ. 3時間計画ではあったが、今日は1時間で製作、鑑賞までやっていて即きょう的に製作しているように見えた。
- ロ. 児童から出た言葉を製作につなげる指導を加えると動きのある表現への橋渡しになったのではないだろうか。
- ハ. むっくりと起きたガリバーをつくらせたいと授業を見て感じた。

分科会記録

提言 1. 「生き生きと表現させるための彫塑指導のあり方」

花田 正雄(新琴似緑小)

提言 2. 「豊かな心情をたまりとして生き生きと表現する手だてについて」

伊藤 寿朗(平和小)

1. 提言内容

- (1) 花田
- 彫塑学習は地味な活動といえる。環境と設備が必要であり衛生にも配慮が必要である。その点から彫塑学習をさせる原因になっていると考える。しかし、作ってはこわしまたつくることもできるものであり、彫塑は簡単に取り組めるものであるといえる。
 - 彫塑を長い意味で好きにさせることが大切である。めあてに造形要素を明確に入れ、製作前に意欲を高める手だてが必要である。また、できた作品は大切に使えるようなものにしたい。学習においては気づかせる部分と、教えなければならない部分をしっかりとおさえなければならない。
 - 一年生から生活体験を題材にするとすばらしい表現力を発揮するものである。そしておもいきってデフォルメできる子供に育てるには、題材にひきこませる、粘土にさわらせるなどの過程を通し豊かな技法の体得入と結びつけていくことにより、よい作品を望むことができるのではないだろうか。
- (2) 伊藤
- 初めての粘土との出会いを大切にしてほしいと考える。子どもは飾りっ気なく実に力強く製作する。その力強さ、感動は実材の持つ伝達の強さである。その特性と実材としての魅力が豊かな表現の原点であると考ええる。
 - 実材としての自由さをよけいな学習の仕上げという過程の中で、突然実材の持つ不自由さを起こさせてしまうのである。子ども達に生き生きとした意欲的表現をさせるには、この自由さをどう私達が心に据えるかが問題である。

2. 討議(実践作品を鑑賞しながらの話し合いから)

- (1) 芯材はなるべくさけていった方が良いのではないか
- 量感が芯材にとられてしまう
 - 後ろ向きで、そのモデルの人の名前がわかるほどよくデッサンをさけることである。側面(側頭部)をしっかりとかかせるのも大切で、頭部は人体を表す最も大切な部分であり、髪はその作品の特徴を出すのに大切である。
- (2) 表情を出させる苦勞はどこにあるか
- 何かをしている顔として題材を取り上げ、おこった顔、わらった顔などとして取り組んだ。

そして子ども自身が気づいたところは、ほっぺた，口，目であった。しかし、顔，全体を見通すことは子ども達はできないともいえる。

(3) 最近では人体製作でも芯棒に粘土をつけていく学習が行なわれている。

- 子どもにとらえてほしいところは、出来ている。
- 子どもは消化して、型にとらわれていないといえる。
- 子どもにとって出来ばえは大切ではないのではないだろうか。
- 芯材を使おうが、それぞれのねらいがきちんとおさえられていればよいのではないか。

(4) 彫塑学習のあり方

- 苦勞して、がんばって作る子どもは喜ぶだろう。
- 顔の芯材であれば、使わずに、苦勞させるのはどうだろう。
- 教師自身もしっかりわかって子どもに教えることが大切で、時間的にもがっちりと取り組ませたいものである。
- 彫塑としての材料は身近に数多くあるものである。それに目をむけて子どもに与えると数多く体験させることができるものである。

(5) 今の子どもに対して

- 何かを通して、自分を見がくという機会がなかなかないのではないか。図工の中で、あきずに最後までやりとげられる子どもをつくりあげることが大切であろう。
- 見栄えが良い事で子どもが満足するということは、価値判断の誤りではないだろうか。
- 技術的なことを教師が知らない子どもはがっかりするものである。失敗もある程度よいが、しっかりと教える事も大切ではないか。（初めから教えるのではないが。）
- 教師の姿勢（意欲）が一番大切であり子どもへ伝わるものである。（子どもの意欲。）

3. 助言者から

イ．授業の組み立てから見ても本当のエネルギーであっただろう。

ロ．にがてな子をもっとひき上げる手だてはなかっただろうか。

ハ．提言については、実態報告に近く、実際の子どものつまずきなどに欠けたように思う。

ニ．ものをつくることは人間の基礎基本であり、好きな先生の影響を受けるのが最高に思う。

校 種	小 学 校
分 野	工 作
学 年	2 年
教 室	3 0 5

「わたしのアイデア」

生徒 2年1組 32名

授業者 高橋 百合枝(三角山小)

1. 題材設定の理由

この題材は、簡単なリンクの機能を応用したものをしかけとしている。中心となる1本の紙の帯を引いたり、押ししたりすることで腕木が動くというしくみになっている。腕木の部分が動くことに注目させ、その動きに合った楽しい形を考えさせようとするのがねらいである。

子どもたちは動くものに関心が高く、手で触れたり、動かしたりする。また、自分の好みで1部分を作り変えて遊んでいる。

1学期の後半の子ども達に、しかけを適確に理解させて動きを考えさせるのは困難のようにも思えるが、動きから形を見つけたり、ある程度の手順を考えるなどの体験をさせたい。

2. 題材のねらい

(1) 動くしくみを使って楽しいおもちゃを工

夫してつくり、使って遊ぶ

(2) 中厚紙、割りピンなどの材料やカッター、ハサミなどの用具の使い方に慣れさせる

3. 用具、材料

◦色紙用紙 ◦色紙 ◦カッターナイフ
◦割りピン ◦はさみ ◦接着材 ◦工作用紙

4. 指導計画(4時間)

第1次 参考作品を見てしくみを理解する。しくみをつくる。

第2次 } しくみを動かして遊び動きを
第3次 } 見つけ合う。動きに合った形を考える。

しくみを動かしながら形をつくる。

第4次 自分の作品や友だちの作品を動かして遊ぶ。

5. 本時の展開(3/4)

過 程	指 導 内 容
導 入	◦参考作品を見せ、よく動く部分に注目させる。(意欲づけ)
展 開	◦よく動くため工夫、大きく動くための工夫を参考作品で考えさせる。 ◦一番はじめに、どの部分から作るかを決めて、おおよその予想を立てさせる。 ◦色画用紙や、色紙を使いながら形づくりをさせる。
ま と め	◦変わった動かし方を工夫したと思われるものをとり上げて全体に見せる。 ◦友だちの作品を動かしたりして遊ばせる。

授業討議記録

—小学校—工作—わたしのアイデア—三角山小学校2年

授業者 高 橋 百合枝

司会者 阿 部 宏 行(付属小)

鈴 木 和 雄

1. 授業者の反省

- イ. しかけを使った工作は、はじめて取り組んだが、そのことを通していろいろな動きが生まれることを知らなかった。
- ロ. 子供の発想を広げるためにどんな手だてが必要なのか、授業を通してたしかめてみたかった。(イメージを広げるための手だて)
- ハ. 参考作品(完成品)は、ひとつだけとし、それ以外の参考作品は、子供といっしょに指導過程の中でつくっていった。
- ニ. 本時では、導入で時間をかけすぎたと反省しているが、子供の発想を大切にできなかった。
- ホ. 接着剤の指導をしたが、子供の活動の中に指導したことが、生かせていなかった。

2. 討 議

- (1) 子どもの発想を広げるための手だては、授業の中でどうであったか。
 - 参考作品を多く子供の前に提示したが「ほくがやろうとしたこと言われちゃった」という子がいたが、参考例の提示の仕方を考える必要がある。発想を広げる提示の方法というものを教師が研究していくことも大切である。
 - できあがったものが、どんなものであるか知らせるためとできるだけ目標に近づけるために多くの作品を提示した。
 - しくみは、シンプルでよかったが、動きの発想の中でもうひとつ付け加える(たとえば、魚がとびはねる動きに、エサをやろうとする人間)ことでさらに子どもの発想が広がったのではないか。
- (2) 発想の広がり作品化するための指導する側の工夫は、どうであったか。
 - しくみと台紙のつけ方を4通り提示したが、基本のしくみを一部分切り取っても出来ることを子供たちは気づき効果的であった。
 - 発想の広がり作品化するための保障として、ひとつのパターンでなく 選択できるいくつかのパターンを示したことは、子供たちにとって大変よかった。
 - 提示するパターンが、もっと抽象的なものであってほしかった。抽象的なものから具体的なものをひきだしてくる 子供の思考過程がとても大切な造形活動なのだから。
 - 導入部でのしっかりとした指導で、ひとりひとりの考えを大切にせる教師の姿勢がうかがえた。そのことで、だれ一人、友だちや教師のマネをする子がいないということはふだんの育て方の方向を見たような気がする。
 - 接着剤の指導は、長い時間がかかる。ひとつひとつの授業の作業場面でコツコツと指導していくことが大切である。

分科会記録

- 提言 1. 「バルンで あそぼう」 菅原 清 貴（前田北小）
2. 「あきばこで あそぼう」 小 尾 喬（開成小）

2. 提言内容

- (1) 菅原…○ゴミ袋という身近な素材を利用して空気を媒体に造形活動をと考えた。
○らっかさん・ポリ袋だんごやヘビ・ゴミ袋を接着してつくるバルンなどつくりながらあそび、つくりおわった後も充分あそべる題材である。
○自分の体より大きな造形物をつくるのが容易でたのしきもふくらむ。
- (2) 小尾…○公開授業で行なった題材で数百個の大小の空箱を用意して高く積んだり、横にならべたりのあそびを披露した。
○空箱をさらに利用しての「ゆれうごくどうぶつ」づくりは、子どもの発想を生かしながら、ただの箱がたのしい作品に変わることを経験させることができた。

2. 討 議

- (1) 「バルンで あそぼう」について
- ・ 造形あそびで培った造形的感性をその後他の領域につなげて行く教材というものが意外と少ない。そこでこの教材を開発してみた。
 - ・ バルンが出来上がり、中に空気を入れていきしだいにその形があらわれピンとのびる瞬間のよこびは、子供たちにとって大きなものだろう。
 - ・ ポリ袋らっかさん — 輪（あさがをの支柱）にポリ袋を接着しただけだが地上にボンと立瞬間が感動だ。バルンは、大きな物体がブカッと浮上する様子はこれまででない造形物なのではないか。
（実際に子供たちの製作したバルンに空気を入れ参加者がとばしてみたり、製作過程のスライドを見たりと たのしいひとときであった。）
- (2) 「あきばこであそぼう」
- ・ 1年生の学習で子供たちは、つり合わせる事の大切さを経験したが、今回の「ゆれて動く動物」は、その基礎に立った発展学習である。
 - ・ つりあいを取るのに時間がかかった。作業過程で、子供に無理な作業（わりばしに穴をあける）は、教師が行なった。
 - ・ 動物の顔の表情が、どの子も同じようになったが、発想から表現へスムーズにいかなかったものと思う。
（首をふるたのしい工作が いっぱいならべられ ユーモラスなその動きに手にとってみている参加者は、指導された先生のあたたかなお人柄にふれたおもいであったでしょう。）

伊藤 恵 先生の実技研修会

『はさみと紙を使って』

- * 五角形・六角形・七角形・などの多角形のつくり方
紙（正方形・長方形）を折り、はさみを入れるだけで、みごとな星になったり、さくらの花になったりと大変興味深いものであった。
- * ビックリ 紙工作 — 『エリマキトカゲ登場』
大流行だったエリマキトカゲを一枚の紙からつくりあげられるとの話して、参加者はさらに先生の魔力に魅力されてしまった。息もつかずに紙とハサミをあやつる参加者の表情は真剣そのもの。「子供の気持ちよくわかりました」と頭をかく先生の机の上には、みごとなエリマキトカゲがチョココンと立っていました。

作品を語る会

工作一低高合同部会

作品提供者 阿部 宏行（付属小）

「あかり」一紙ぞめを使って（6年生）

- ・紙ぞめあそび（2時間） ・長い紙に紙ぞめ（2時間） ・木わくづくり（2時間） ・鑑賞・遅れている子の指導（2時間）の合計8時間計画でのぞんだ。
- ・布染め用のえのぐを使用して紙ぞめを行なったが、発色がとても良かった。

討 議

- どんな単純なものでもまず教師が作ってみななければならないと思う。それはつまずきの発見にもなりさらに、その時たのしきを感じれるかが大切である。
- ただかざる物というだけでは、物足りない気がする。そのために、しかけを考えたり、動くしくみを考えることが多い。
- 子供が試考錯誤している姿から教師は、学ぶべきである。
- つまずきをどう指導するか
低学年の場合 — 教師が指導するからには、できた作品は先生とみんなの合作であるという考えが大切であろう。
高学年の場合 — つまずきは、どこに原因があつてのことなのか子供になげかけながら指導する事が大切である。
- 評定と評価について
 - ・ 評定は、子どもに知らせなくてもよいが、評価については、子供の努力のあとを充分認めてあげなければならない。
 - ・ 偶然にできたものであっても子供らしいかがやきがあるものが時々ある。それを見逃さないで ほめてあげる教師の目や心も大切であろう。
- 今の子供は、失敗を恐れ安易な方に逃げてしまう場合が多いようである。良い発想、意欲を子供にもたせるためには、教師のはたらきかけ、クラスのあたたかな雰囲気などもとても重要なものとなってくるだろう。

校 種	小 学 校
分 野	工 作
学 年	5 年
教 室	4 0 2

「動くおもちゃの指導」

生徒 5年3組 36名

授業者 小林長幸(白楊小)

1. 題材について

子どもたちは、既製品(プラモデル・ジグソーパズルなど)を組み立てる生活経験は豊富であるが、子どもたちの身近な生活の中の木片、空缶、空箱に強い関心を示すことが少ないように思える。これは、自分でみつけ、自分の方法で、自分だけのものを工夫して削り出し、喜ぶ経験が不足しているからと考えられる。そこで、本題材では子どもにとって、非常に魅力ある「動くおもちゃ」を設定した。基本となるしくみは、できるだけ単純化して、クラス全体の子どもが成し遂げられるものを教材にした。ただの物質としての「紙」が、あたかも生命を与えられたように動き出した時の感動は、つくった人のみが味わえる特別な感情である。材料や用具を大切に使う習慣や用具を正しく安全に扱う技能を身につけさせながら、子どもたちの自由な発想を大切に、計画的に製作する態度を育て、完成の喜びを味わわせるとともに、創造意欲を高めさせたい。

2. 学習のねらい

しかけの基本の形や動きにふさわしい発想をさせ、手づくりのおもちゃのよさやつくる楽しさを味わわせる。

3. 指導計画(6時間)

1次	基本のしくみを理解し、動くおもちゃを製作しようとする意欲を持たせる。
2次	計画を立て、アイデアスケッチをし、製作の順序を考えさせる。
3次	動きや丈夫さを確かめながら製作させる(夢をふくらませる)
4次	お互いに作品を見せあい、工夫や苦心したところを話し合わせる。手直しして、遊ばせる。

4. 本時の展開(3次)

過 程	学 習 活 動	留 意 点
導 入	完成までの順序を考え、必要な材料用具を準備する。	
展 開	思いつきを取り入れ、試行錯誤しながら製作する。 ・スムーズに動くように……(形・接着) ・補強の仕方の工夫	安全に注意する
整 理	友だちの作品を鑑賞する	

授業討議記録

一小学校一工作一動くおもちゃの指導一白楊小学校5年

授業者 小林 長 幸
司会者 佐藤 健 吾(真駒内曙小)

1. 授業者の反省

- イ. 子どもの独創的なアイデアを、引き出すことができた。
- ロ. 動く為の工夫として平面から立体へということを考えた。
- ハ. 動かない子どもの指導のため、机間巡視を行ったが二・三の子どもの指導がもれてしまった。
- ニ. 普段、図工にあまり興味を示さない子どもの作品がよく動いた。

2. 討 議

- (1) 動かない(ゆれない)子どもの作品を、どうしたらよいか。ろうのまさつの工夫を、どうしたらよいか。

- | | | | |
|---------|------------------|--------|--------------|
| ・ まわらない | — ろうそくのまさつが大きすぎる | ・ ゆれない | — 半円がでこぼこ |
| | — ゴムが弱い | | — 回る部分が軽い |
| | — ひっかかる | | — 二つの半円がふぞろい |

- (2) 時間が少なかったのでは

- ・ できていない、わからない子どもがいた
- ・ 指導を工夫し、全員がなんとか動くようにさせてやる必要がある。
- ・ 本時は、動かないものを動かすのがねらいなのである。

- (3) 題材の与え方について

- ・ 作品のつりあいとれていた子どもは、意欲を感じることができた。
- ・ 重心の移動により回転を起こすという内容は、少し欲ばりすぎたのではないか。

- (4) そ の 他

- ・ 教師の指示説明がよかった。(試作品の提示→ 中の見える窓)
- ・ 道具の使い方が、不十分ではないか。(技法指導)
 - 子ども同士で、教えあうのはどうか。
 - 技法だけの練習は、ありえない。技法を、教材化する。
- ・ 教師のかざりに対する、かまえないのでは。

- (5) ま と め

- ・ 板書が、わかりやすかった。
- ・ 材料の準備が、良かった。(ハシ・ろうそく等)
- ・ 子どもの独創的なアイデアを、引き出すことができた。
- ・ しくみの原理を、おさえることが大切である。
- ・ 授業後、子どもの声(苦勞・苦心)を発表させ、教師のはめ言葉をかけてやることができた。

分科会記録

- 提言 1. 「クランクで動くおもちゃ」 土井善範(創成小)
2. 「紙の彫刻」 植木則子(藻岩南小)

- (1) 土井…○アイデアと材料選択は、同時に考えてよいのではないかと
○不用になった物をとっておき、それを利用していく。
○動力を伝える機構や、構造がよく考えられ、計画的な作業が進められなければならない。
- (2) 植木…○題材を与えるにあたり教師がおさえておいた事
・創造的思考を養うのに適しているか
・計画性を育てるといって都合の内容が多いか
・個性的な表現力を育てるのに都合がよいか
・作品を通して、人間的なふれあいを深めることができるか
・「もの」を扱い「もの」をつくり「もの」を通して、人と人とのコミュニケーションをはかるよう努めた。

(1) 子どもの発想を豊かにする助言について

- ・事例作品を提示する
 - ・はげましの言葉をかけてやる
 - ・発展教材を用意する
 - ・基礎、基本の指導を十分する
 - ・手順(順序性)を考えさせる
 - ・教師自身も題材を好きになり、つくってみる
- どこが一番むずかしいか
どこをおさえると、授業をうまく進められるか
指導の観点をうまくとらえられるのか

(2) アイデアを具体化する計画段階における、材料選択、技法指導について

- ・道具の準備 — 道具類は、十分に考慮して使う。(特に、家庭から持ってくる物)
- ・子どもの能力差 — 早く完成する子どものために、発展教材を用意する。
- ・発想をうみだすための時間を設定する。
- ・機構の仕組み、学年の発達段階、学年の実態に応じて指導する。
- ・試行学習をやらせてみる。
- ・最小限の材料、道具で、最大限の作品を製作する。

(3) 機能性と美しさの調和を具体化させる指導の手だて

- ・仕上がりの美しさ
子どもの作品に対する愛情を持たせる→ 作品製作の喜び
- ・基礎、基本をしっかりやる
 - 白の美しさ
 - 着色…色紙、サインペンなど

- ・経験を色々させ、技法を学び造形性を身につける
- ・先行経験を、掘り起こす(こだわりすぎない程度に)
- ・困難を解決するための指導→ 教師
 - └ 技法工夫
 - └ 成功に導くヒントを出してやる
 - └ 学年、学級の実態にあわせた指導が大切
- ・機能性と美しさは、ひとつのものである
(子どもは、統合的にものを見ることができない。)

(4) ま と め

- ・作品に愛情→ 5年間は、大切に保存し動く。
- ・評価は作品の完成度、製作中の過程などを十分に評価する。
- ・作品完成の満足度が次への創作へとつながっていく。
- ・教師が全体の流れを持っていることが大切。
- ・動く→ 大きく動かなければいけない。
- ・材料
 - └ その子が、使いこなせるものでなければならない。
 - └ 最小限のものを、最大限に生かす。

(5) 今後に向けて

- ・技法指導は、6年間全体のカリキュラムの中で考える。
- ・紙工作は、3年生が完了していてもいいのではないか。
- ・機構の原理をしっかり教えることが大切。
- ・作品の中にテーマがあり、お話がある。
- ・評価は、作品の動かない子どもは、その子の製作中のプロセスを評価する。
- ・教師は、事前に作品を製作し、子どもたちへの意欲づけをする。
- ・教師は、その題材を好きにならべるべきだ。

(6) その他 <助言の新谷先生の資料から>

「造形活動における自己教育力の育成」

※子どもの造形意欲に対する「自助へほう助」(学習指導)

- ・子どもの造形欲求を保障する
ものを造りたい→ せいいっぱい遊びたい→ 仲間と一諸のことをしたい→ 努力を認められたい→ 能力を十分に出しきりたい。
- ・子どもの造形活動を保障する
自分のつくりたいものはっきりさせる→ 自分のイメージ(発想)をふくらませる→ どうしたら出来るか、どこまで出来るか、どこまで出来るかを見通す→ 自分が作りたかったものを造りあげる。
- ・教師の指導、援助を保障する。
多様を選択でき、発展できる教材を用意する。その造形に必要な基礎的、基本的な知識技能を与える。造形意欲をゆさぶり、わきたたせる場面(教具)をつくる。等
- ・造形的な環境を保障する
自他を容認し、はげまし合える学習集団。造形が日常化された教育環境。等

◇ 中学校 共通基調提言

研究大主題 表現のよろこびを味わわせる授業の創造

研究小主題 —— すじ道のわかる授業の実践 ——

1. 研究の主題設定と経過

私たち、札幌市教育研究協議会中学美術部では、上記の研究主題をかかげ実践を続けている。これは、これまでの実践研究で培ってきた美術科の独自性と学力「高めたい力」の成果の上に立っている。そして、生徒の側に立った視点から、表現のよろこびを味わわせる授業はどうあるべきか検証していくことを課題としている。

経過は、昭和52年度までの「人間形成の過程における色と形の認識と創造性の育成」の研究成果の上に、昭和53年度より「表現のよろこびを味わわせる授業の創造」を大主題に設定し、まず、「表現のよろこびを培う題材配列」にとりくんだ。昭和56年度より「すじ道のわかる授業の実践」を小主題に絵画分野を手始めに彫塑、デザイン、工芸の3分野にとりくんでいるところである。

※ 学力「高めたい力」とは

学力「高めたい力」について簡潔に述べると、提示された表現題材の学習について自己の学習主題を明確にとらえ、その主題実現のために必要な能力を駆使して、主体的にとりくみ、自己実現する学力内容＝実践的学力であるとおさえている。これは造形的思考の構造を造形的諸能力でとらえたものである。また、系統的な各学年の「目的達成のための視点」から指導過程をとらえ、学力の構造化を試みている。

2. 研究の内容

現段階での札幌市教育研究協議会中学美術部の共同研究では、学力「高めたい力」を一層高め、使いこなし、生かしていくための基本的指導事項を、絵画・彫塑・デザイン・工芸の各分野で洗い出している。その基本的指導事項が授業の展開にかかわって、教師の指導のどんな手だてでやくふうがされているかによって、また、生徒のどんな学習活動によって高められていくかを発想、構想の段階に重点をおいて実践している。

札幌大会の研究主題、視点のかかわりからおさえると、この発想、構想の段階で対象の美しさに気づき、感動し、喜びをもって生徒の想(おもい)を実現させ、生徒の変容をとらえる実践研究を積み重ねているところである。

3. 研究の方法

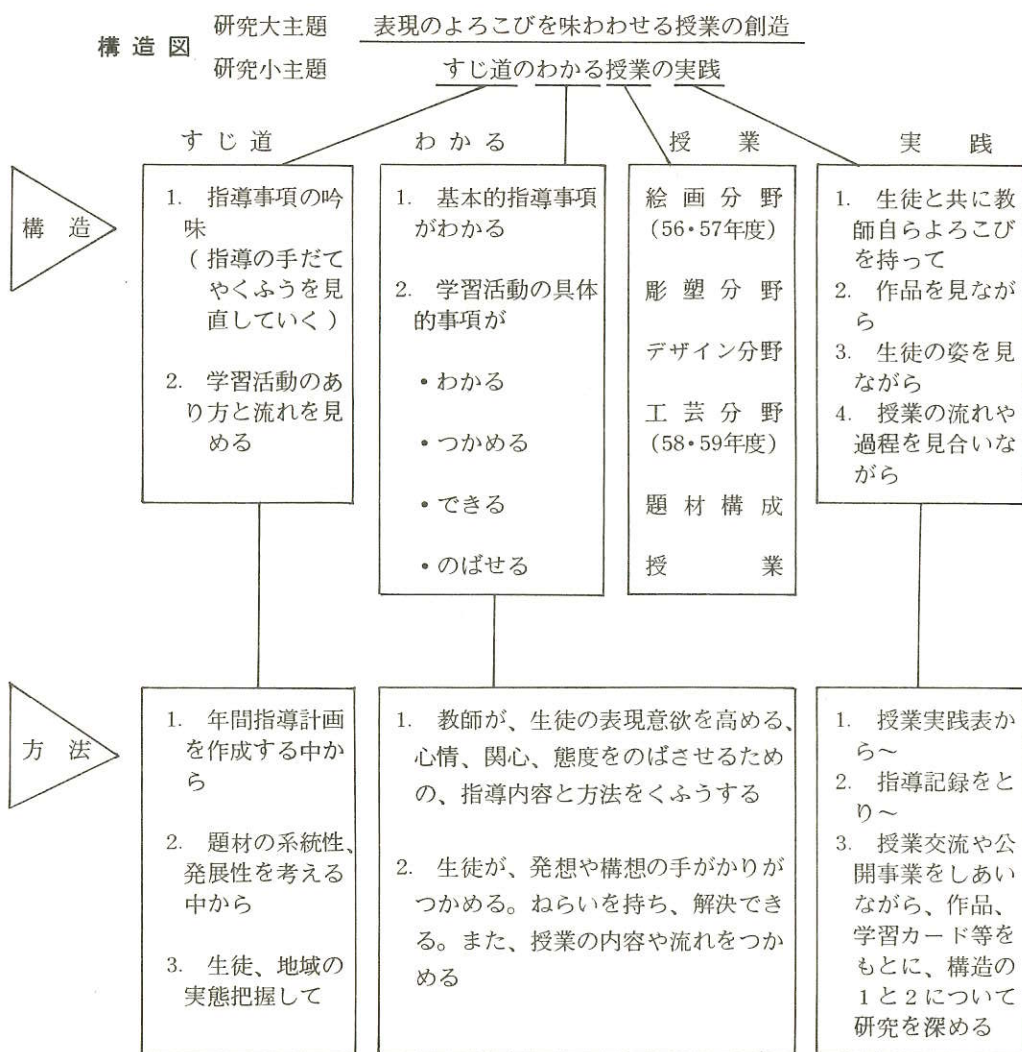
- ・ 絵画・彫塑・デザイン・工芸の各分野で、すじ道を大切に前述した研究の内容を研究実践している。
- ・ 発想・構想の段階を中心として製作のつながりの中で実践している。
- ・ 教師の指導の手だてでやくふうから生徒の変容をとらえ、学習の効果をさぐるようとしている。
- ・ ブロックごとに表現の各分野を分担し、研究を進めている。
- ・ 公開授業を中心に、生徒作品、指導資料をもちよって研究を進めている。

- 各校から授業実践表（A表）・（B表）を提出してもらい、それをもとに研究を交流し、また、研究の分析と集約をする基礎資料としている。

4. 現在の研究実践「すじ道のわかる授業の実践」

(1) 研究の基盤

表現のよろこびを味わわせる授業とはどのようなものか、その具体的かつ基本的な指導事項や学習活動の内容をどうおさえていかなければならないかを、下記の構造図を研究の基盤として実践していくことで解決しようとしている。



(2) 研究のねらいと具体的方法

- 1) とりあつかう題材の基本的指導事項を学力「高めたい力」と視点(下記枠内)からさぐる。
- 2) 教師の指導の手だてやくふうを考え、生徒の学習活動のあり方や流れを考える。
- 3) より、喜びを味わわせる授業に何が不足し、何が大切であるかを明らかにするために、生徒の変容の姿から教師の手だてやくふうと生徒の学習活動を見なおす。
- 4) 絵画・彫塑・デザイン・工芸の4分野に共通する基本的指導事項、あるいは各分野に独自の基本的指導事項を明らかにしていく。
- 5) 学力「高めたい力」が、生徒にとってもほんとうに「高めたい力」たりえたか検証する。

(3) 生徒の変容について

生徒の変容については、教師がその授業の中で生徒に期待するもの、言いかえるなら、その授業のねらいとして、生徒にわかる、つかめる、できる、のばせるという表出された姿で見ているものにおいている。

(4) 研究推進の現状

現在、絵画分野の取り組みを一応終り、彫塑・デザイン・工芸の3分野に研究を広めたところである。

最初の絵画分野のとりくみでは、どの教師も日常実践している授業を実践表で集約し、その実践の中で共通して重要視されているものを基本的指導事項として下記のように浮き彫りにした。

- | | |
|------------------------------------|---|
| ① 主題のとらえさせ方 | 自己の主題と表現上の問題点を明らかにする上で鑑賞は大きく作用する。 |
| ② 形、構
色 | そのとらえさせ方により表現効果にちがいがあ
その見方、とらえさせ方により表現に大きくかわる。 |
| スケッチ
(形、構図、色を
とりまとめるた
めの) | 表現にどう結びつけるかにより効果的な設定が必要である。 |
| ③ 条 件 | 視点、的確な条件を設定することにより作品の完成度は高くなる。
反面、個性、ユニークさについて問題が出てくる。 |
| ④ 見 方 と 技 法 | 表現意欲は高まるが、技術的に高まるのが安易な満足につながる
ことがある。 |

公開授業、その後の話し合いの中で上記事項についてさまざまな問題点があげられているが、この絵画分野の研究の成果を共通の観点にして、彫塑・デザイン・工芸の3分野に実践研究の範囲を広げ、各分野の基本的指導事項を基本的指導事項をさぐる視点と共にさぐっているところである。

校 種	中 学 校
分 野	絵 画
学 年	1 年
教 室	4 0 4

「私の好きな生きもの」(木版画)

生徒 1年組 44名

授業者 平林冬美(光陽中)

1. 題材設定の理由

中学入学以来、絵画・彫塑分野において次の題材を経験させてきた。手の素描(観察、4月)、生活の思い出を描く(構想・印象、4・5月)、生き生きした手を作る(観察・印象、6月)。以上の学習の中で、印象をもとに構想をまとめていく表現の場合、自分の意図したものを思うように表わすことが難しく、自分の作品に自信が持てないでいる生徒が多いと感じた。この題材では一層自分の印象を中心に構想を練り、自分の意図したものを表わせる描写力・構成力を伸ばし、さらに木版による黒白の簡潔な美しさを表現させた

2. 題材の目標

自分の好む対象(動物・鳥・昆虫・魚等)

5. 本時の展開

を通して心の中のイメージをほりおこし、木版により、黒白で対象の感じを勢いある彫り方をくふうし生き生きと表わす。

3. 全体指導計画(12時間)

(1) 主題把握。対象のラフスケッチ 2時間

(2) 下絵。形の再構成と構図

黒白の面積の割合・配置の検討

————— 3時間(本時⁵/_{1 2})

(3) 版木に転写・墨入れ ————— 1時間

(4) 彫り。技法研究。試し刷りと

修正 ————— 4時間

(5) 本刷り。鑑賞と評価 ————— 2時間

4. 本時のねらい

黒白の面積の割合・配置を考えさせて、下絵に墨入れさせる。

	指導事項：「高めたい力」	予想される生徒の活動	留意点
発 想	<主題をとらえる力> ・前時と本時の関連について話す。 <対象をとらえて見直す力> ・参考作品を見せ、表現の幅を広げさせる。	・下絵を黒白に分けるため、墨入れすることを知る。 ・黒白の面積の割合・位置・つながりの大切さに気づく。 ・ぼかしやかすれの部分に注目する。	・陰刻・陽刻・それらの調和のとれた作品を見せる。
構 想 ・ 製 作	<イメージを発展させる力> ・墨入れの方法を知らせ、製作に進ませる。 <対象をとらえて見直す力> ・製作中の下絵を数点取り上げ、作品をかえりみさせ修正させる。	・思いきって筆跡を生かして下絵に墨入れをする。 ・他の生徒の下絵を参考にして黒白の割合等をくふうし、ねらいによりせまる墨入れを続ける。	・刷り上がりを予想できる下絵にさせる。
鑑 賞	<ねらいに即して比較判断する力> ・本時の成果を確認し、今後の方向を考えさせる。	・自己評価をする。 ・黒白の割合・位置等を確認する。 ・感想を発表する。 ・次時の課題・準備をする。	

授業討議記録

—中学校—絵画分野—私の好きなもの—光陽中学校2年

授業者 平 林 冬 美
司会者 荒 谷 博 文(光陽中)
早 川 輝 彦(屯田中央中)

1. 授業者の反省

イ. 生徒の実態

札幌市の中学校としては平均的な施設、環境の中にある。22学級(半数以上が普通学級で授業を行っている)で全体的におだやかな雰囲気につつまれている。

想像をもとにした表現学習の場合、自分の意図したものを思うように表わすことが難しく適度の条件設定がないと、緊張感が少なく発表の広がりも乏しくなる。

ロ. 題材の展開や取りあつかいで難しい面、苦慮した面

下絵作成の際、自然の中の生きものの動勢、習性の観察経験にとぼしく、対象の印象や記憶やイメージをスケッチさせ画面構成を考えさせた。

墨一色の木版画における、黒と白の面積の割合、配置のつりあいの指導に注意した。

彫刻刀の彫りや使用法の工夫を知らせ、技法をつかむように注意した。

ハ. 題材の展開指導

鑑賞資料を重視して意欲づけ、方向づけ、製作手順の確認を行った。

2. 討 議

- 実物を見せられなかったのは授業者にとっては不満足であった。
- 動物を見せられなかったら、人物をとりあげるのがよい。
- 小学校時の版画の経験や学校間の差があるなかで、自然の中の生きもので構想画を行うことの問題がある。
- 生徒の実態から構想画をとりあげるのがよいかそれを動物で表現させることがよいか。
- 構想的にした内容を持っているか。中学生としての動物の素材はむずかしい。
- 心象表現は一年生ではむずかしい。手だてが必要である。
- 詩・物語をえらんできてそこから形を出させる方が良かったのではないか。
- 写生の中にも構想がある。観察による表現→ 想像による表現
生活画・物語・夢・抽象・幻想・音楽・表現テクニック
- 版画表現は写生のいきずまりを解決する手段になるかも知れない。
- 今の生徒に欠ける、心で感じて描く(描画)ということ。版画ならできるとおさえ子供の考えを切りかえること。
- むりやりかかせると技法が高まるが、イメージはかれるのではないか。

- 自分の頭をとおして美をつくる描画は表現の基礎ではないか。1年ではあまり技法にしゅう着しない方がよい。動物なら愛着のあるものの方が良い。今回の授業ではのびやかさが欠けていたのではないか。
- この授業ですじ道がわかるかどうか。
- 1学期：今の時期を考えてとりあつかうべきである。
- 中学3年間で生徒をどうつくっていくのかという考えがほしい。
- 生徒の実態をそのままにしてこの題材を行うことへの疑問がある。
- 機械と同じようにかくのではない。見方をとらえることができる、そして心をプラスさせていきたい。
- 製作のよろこびが技能の発揮にあるのか、そうでない時にあるのか、喜びは題材（モチーフ）とともに変わることがある。
- 満足感は技法をともなった時にあるか、その過程ではどうなのか。
- いかに楽しくやらせるかが問題になるのではないか。
- 良さはつくっている時に感動していて、それが形に表われる版画の場合、刀の切れ味が感動を呼び起こしてくれる。それが版に表われる時、良い版画になる。
- 教師の信念をもとにこれだけは生徒に身につけさせたいというつらさに耐えて、そのあとに満足感が出るのではないか（生徒指導との関連が生まれてくる）。生徒の心をおちつかせて集中してかかせること。
- 美術では共感的指導、教科で何かを語っていくことが必要である。
- 言葉づかいに気をつけた授業をすべきではないか。
- 写生から構想もあるが、構想の中に写生を必要とすることもある。中学が、あまりにも客観的なことを重視するため、つめたく、かきずらくなる。心象的なものが失なわれてしまう。
- 版に対するねらいをしぼって大人の版画を子供におしつけようとする面があるのではないか。また、技法のパターンをおしつける面もあるがどうか。もっと逆のとらえ方、直接、版にあたるとも中学にあってよいのではないか。より子供が製作に肉はくできることをみつけたていきたい。

分科会記録

提言 「すじ道のわかる絵画の授業を創造する」

富田 賢 司（新琴似北）

1. 提言内容

イ．中学校 共通基調提言（P 58. 59. 60.）内容の解説（各分科会共通）

- ・ 高めたい力について、現在までの研究の流れ
- ・ A表、B表の内容とおさえ方
- ・ 問題点は情意面へのとりくみがある。

ロ．すじ道のわかる絵画

- ・ だれでもが生徒の変客を確認できる指導の手順。
- ・ どの学校でもできる共通の「たかめたい力」（この学年はここまで）を求めて。
- ・ 分析が今後の課題である。

注 — 共通基調提言の内容説明は最後の工芸分野にまとめて文章表現をしてある。

2. 討 議

- 多くの地域の～方式で成果のあがったところは勉強になる。
- 基本的指導事項が授業と結びつかない気がする。
- 経験的なものの中に授業のくみたてを考える。
- 場面場面でどんな高めたい力にせまる指導事項を出しているところである。
どういふことばで話しをしていくのか明確になっていくのではないか。
- 指導事項は教師の指導案に表われているのではないか。
- 造形連盟・札幌中学は札幌研の研究内容である。10年前の研究のあとにブランクがあった。
今もそうである。
- 「イメージが発展させる力」→ 墨入れをする。影りを意識して は具体的にどう指導かはっ
きりさせたい。
- よりよい方法（指導法）が実践表を通してこれからつけ加えられていくのかどうか。
- 「高めたい力」の14は全て必要か。「高めたい力」はどの項目か③④について、
- 「高めたい力」をおさえた授業、何を指導すべきか、子供の変客を教師がとらえることが良い
のか、札幌の先生のもがきである。10年前のことがらを具体的に実践にむすびつけている過程
である。
- 29回 岩見沢大会での自己実現をはかるための「高めたい力」と「つきたい力」があるの
ではないか。14の力を整理すれば2つにわけることができようと思ふ。教えることと育てること
の2つである。（情意面に欠けていることの反省がでている）
- 題材のおさえを十分に、評価できるようにしなければならない。
- 実態を見てどこまで到達すればよいかを見つめて
- 14が並列ではない。
- 高める力のためのつきたい力。
- 今回は途中経過、何年かすると何かでてくる。札幌の努力をみとめてほしい。これからです。
実のところ、今まで（前札幌大会～今大会まで）ほとんど成果らしいものはなかったということ。

校 種	中 学 校
分 野	彫 塑
学 年	1 年
教 室	4 0 5

「にぎる手」(塑造)

生徒 1年5組 44名

授業者 福島 昭一(太平中)

1. 題材設定の理由

小学校での観察による粘土表現の経験をもとに、日常生活における身近な自分の手の動きに着目し、理解させ、握った手を立体的彫塑表現することで、彫塑の美しさを学ばせた。

2. 題材の目標

指とへらで、粘土を扱う事で、量を実感としてとらえ、意図的な立体(手を握った時の力強さ)を造る喜びを味わわせる事を目標に次の3点をおいた。

- (1) 対象を面でとらえさせる。(量の把握)
- (2) こぶしの部分と腕の部分との自然なつながりを表わす工夫をさせる。
- (3) 握ったこぶしの力強さ、生命感をいきい

きと表わす工夫をさせる。

3. 全体指導計画(9時間)

- (1) 主題の把握、粘土の手びねり——2時間
- (2) 手の素描(角度を変えて)——1.5時間
- (3) しんづくり—————0.5時間
- (4) 荒づけ——2時間(本時 $\frac{5}{9}$)
- (5) 仕上げ—————2時間
- (6) 鑑賞と評価—————1時間

4. 本時のねらい

- (1) しんへの、しっかりとした土づけをさせる。
- (2) 握った手が、面で構成された基本的なかたまりで成立している事に気づかせ、粘土で表わさせる。

5. 本時の展開

	指導事項:「高めたい力」	予想される生徒の活動	留意点
発 想	<主題をとらえる力> ・本時のねらいを理解させる。 ・材料、用具の確認をさせる。 ・粘土をねりながら、量を感じとらせる。 ・しんへ、土づけさせる(№1)。	・制作カードと並行して知る ・各自、材料、用具の点検をする。 ・土ねりをする。 ・しんに、思うままに土づけをする。	・粘土の適度な柔らかさを知らせる。 ・へらの同時利用。
構 想	<形の大きさ広がりとしてとらえる力> ・より良い土づけの方法を理解させる。 ・しんへ土づけさせる(№2)。	・握りと、しんの位置関係、土づけの方法を考え、再度、土づけする。	・グループごと発表 ・腕の厚さに注意させる。
製 作	<対象を量としてとらえる力> ・握りの基本的なかたまり、面に気づかせる。 <材料・用具の特性に気づく力> ・面の整理に、たたき棒を使用させる。	・握りが面で構成された、基本的なかたまりである事に気づく。 ・たたき棒により、量と面が変化し、整理されていく事に気づく。	・手にアルミホイルをまかせ、面を知る。
鑑 賞	<イメージを発展させる力> ・次時の活動(面の細かい変化と量のバランスをとらせる)。	・自分の手が粘土の基本的なかたまりに、おきかえられていく事を発見し、次時の見通しをもつ。	

授業討議記録

—中学校—彫塑分野—にぎる手— 太平中学校 1年

授業者 福島 昭一
司会者 石岡 博昭(元町中)
村谷 利一(札幌中)

1. 授業者の反省

イ. 生徒の実態

学級数は現在28学級でマンモス化の傾向を見せている。

生徒は明るく素直な面を備えているが、自主性、また向上心に欠けるところがあり、学習に取り組む姿勢に意欲を感じない。

現在美術教室は2つ確保されているが、1つは普通教室であり、施設設備の面でまだ不十分といえる。

ロ. 題材の展開や取りあつかいで難しい面、苦慮した面

小学校の美術学習の「遊び」的要素を含めた内容から、美しさを求めてその具現化をめざす学習へ移行するにあたり、より一層の観察を深め、その表現方法を理解させ、表現させることに苦慮する点があるが、指導のねらいにそった生徒の製作意欲を大切にしながら、生き生きと活動させ、次の題材へつなげる評価のくふうをしていきたい。

ハ. 題材の展開指導

- ・ ゆったりとした時間が欲しかった。(腕とのバランス、面でとらえることなどゆっくり追求させたかった。)
- ・ 面の角度がまだとらえられていない。面の方向、細部表現、生命感などに留意していききたい。

2. 討議

- クレイド粘土の特徴とあまり粘らずにすぐ作品づくりに入れるのはどうしてか。
- 台は常に自作でつくっていたのか。
- 以前、生徒の個人のものとしてつくったがたいへんであった。
- 2年生で手をつくらせたが、粘土(ブロンズ)がこわれやすい。現在フォルモを使用心材を選ばずにすむ。手になじみやすい特徴がある。
- 聴覚障害の生徒は立体感のとらえが弱い。(粘土を扱うことは好きだ)
- 粘土がよい。力強い作品が予想される。時間をかけるにしたがい、力強さに欠ける点に注意した方がよい。

- 授業のすすめ方が自分で体験してよくわからない。使用している粘土はウッディ粘土、面でとらえさせるところ、かたまりとしてとらえさせるところのちがいがいい。大まかな面、部分の面の指導について知りたい。
- 立体のとらえ方を立体模型からだんだんに分ける方法をとる。その後頭や野菜をもとに面を見出す。たたき棒で大まかな面を、粘土べらで細かな面を発見させる。最終的に生命感、均衡、動勢などへ結びつけたい。（子供の要求を満たしながら）
- 発達段階をとらえた面その他の指導についての御助言を
- 作品をつくることの一歩は力強さ、それが立体化されていてやがて面がでてくる。それぞれの子供の個性を生かしてはどうか、躍動する生命感をもっと表現したものを最初から少しは入れた方がいいのではないか。
- 面をとらえる基本練習が時前にある。その発展として今日の授業をとらえるならもっと人間の手の中に表現の多様化、感情移入（指がまっすぐとか、開いているとか。）が欲しい。面の存在を子供に意識化させるのは徹底していた。しかし面だけを意識するにはペーパークラフトの方が適している。どこまで面についてつっこむのかということが問題になってくる。ヴォリュームとの関係をおさえて。
- 子供に自己の主題をもたせる工夫はどのようにしているか。
- レディネステストの結果から思いどおりにつくりたいという気持が強い。一年のうちに面等の要素を指導。高学年にいくにしたがって感情面を出していくようにしたい。これから観察をとおして個人にまかせたい。

分科会記録

提言 「すじ道のわかる彫塑の授業を創造する」

中山 龍雄(札幌中)

1. 授業者の反省

- イ. 中学校 共通基調提言 以下絵画に同じ
- ロ. すじ道のわかる彫塑
 - ・ 4つの基本的指導事項の位置づけ
 - ・ 学年ごと発達段階において指導する内容。教師側の授業における山場、どこでどう変容させたかについての話し合いを。

2. 討 議

- P 60 の絵画分野を 4 つの視点に分けた理由と④の説明の意味。
- 提言補助資料による要約された基本的指導事項とその方法を参考。
- レベルが高まるにつれ、画一されたものに陥りやすい。技術面の追求だけでなく、情意面をおさえさせたい。
- 主題をとらえる力 — 精神的な変容、生活面、教師と生徒の変容など、あらゆる角度からとらえるところに視点をおくとよい。
- 文章表現からみると何を主張したいかわかりづらい。
- 実践表を通して内容を深めてみてはどうか。
- 実践表B表は基本的指導事項を洗い出し、へで生徒の学習の活動事項とその内容を出し、留意点もあげるが、生徒の変容のところでは現在研究の途中で白紙の状態これから生徒の変容と分析を深めていきたい。
- 今日の授業では、主題について子供が大主題をとらえて小主題につなげることが山場になっているが、子供はどう受けとめているか。
- 最初の導入で子供にどう考えさせ、とりくませるか、どう題材とねらいが伝っていくかが大切ではないか。
- 高めたい力のとりくみがあり、洗い出され、主題にかかわるようなところで構造・方法がとらえられる。授業の流れの中でとらえられている。すじ道のわかる、授業の実践の4つでこの他にベースとなるものがある。それを省略し、しぼられてこのP 59の図ができています。(過去の経過説明)
- 高めたい力の本の中にもっとこまかい交錯した図があったはずであった。もう少しその説明が下ののべてあれば問題はない。

- すじ道のわかる授業からみると今日の授業はプロセスが子供にとって整理された面がうかがえる。個別化のちがいをみてはどうか。触覚的な子供、平盤な子供、立体的な子供様々な子供がいる。釧路では子供の学習構造を4つにセットしていた。展開の段階が4通りある。今日感じたことはもし触覚型の子がいたら、その子供は情意的なのびはあまり感じられないですんでしまったのではないかと思われる。
- 指導をすればするほど情意的な面がうかがえるのではないかと思うが、それぞれの個性を生かすことができないのではないかという点ではどうですか。
- 今日の授業の場面ではあまり個性の問題をおかなくてもよいと思われる。この次の段階から個性化が追求できていくと思う。
- 発達段階と子供の個性とはどんなものか。
- 子供を一定のわくにはめこみながらの指導は教師側からみると楽である。子供の側から考えると、子供の2年・3年の過程でどうやって個性を発揮するか心配である。にぎりこぶしは子供の個性を表現するのに不向き。私の例は指の組み合わせてやる。子供も意欲をみせてくれる。1年の段階ではもっとフリーに観察させることの方がすじ道にのっているのではないだろうか。
- どの分野でも子供の考えた構想がどの部分で作品の中に生きてくるのか、また手をつくることが人間を理解していく上で手のもつ動き、骨格を考え、その手の持ち主の感情になって考えてみる方法を私はとっている。
- 今日の授業ではほとんどの子供がおちこぼれなくきていてよいが、各個の個性がある子供にしてみると、究極的な手はやはり量と面ではないかと思う。
- 一定のレベルまであげるためには技術を教えこむ、しかし個性を大切にすることはできない。このかねあいについてはどうか。
- 子供がその作品の中でどんな悩みがあるのかを教師が吸収してから授業をしたのを見たことがあるが、基本的なものを一率に流してやることもよいと思ったが、高めたい力 子供の変容とからめてみると一生けん命やる子と技術の差で悩むことがある。
- 評価につながってくると思う。エネルギーの消化のしかたがわからない生徒の評価で迷うのだが、1年のうちに基本的なことを指導しておくとのびる可能性がその子にでてくると思う。
- 子供が発表している場面をみて、子供が発見して子供がつくり出す授業をしているのに感動した。(以下省略)

校 種	中 学 校
分 野	デ ザ イ ン
学 年	1 年
教 室	4 0 8

「自然物をもとにして構成する
— 身近な野菜から —」

生 徒 1年2組 43名
授業者 高 橋 久美子(向 陵 中)

1. 題材設定の理由

デザインの分野の具象的な色や形の創作活動の基盤として「身近な野菜」をもとにした構成を学習する。5月より、対象のとらえ方や造形処理の考え方を、色彩学習の基本から幅広く順次性を大切に進めてきた。自然物自体の造形的要素の特徴を、観察の方法から感得させ、形の特徴をとらえた形づくりに入る。

自然界にある色や形の美的秩序や構成を感得につかみ、美的感覚、創造的な発想力を育てたい。さらに伝達デザイン・工芸などの学習にこの力は生かされ、2・3年生では意図的に表現されるように題材配列の系統化を図っている。

2. 題材の目標

- (1) 身近な野菜の形をもとに、単純化や強調をして新しい形をつくり構成を工夫する。
- (2) 色彩のもつ感情に気づかせ、主題に向けて計画的に配色する。

3. 全体指導計画(10時間)

- (1) 主題の把握・観察方法の理解 …………… ①
- (2) 自然物のスケッチをする …………… ①
- (3) 単純化された形から構成方法の理解… ③
- (4) 調和ある配色効果の理解(本時 7/10) … ④
- (5) 鑑賞・評価 …………… ①

4. 本時のねらい

主題から配色を吟味し、調和のある配色と効果を工夫させる。

5. 本時の展開

過程	指導事項・「高めたい力」	予想される生徒の活動	留意点
発想	〈対象をとらえ見直す力〉 ・自己評価表、作品による配色の見直しをさせる(視点を出して)	・グループで配色上の悩み、迷いを出し合い、ヒント(参考になったこと)を評価表に記入する。	・自己評価表で教師は事前に把握。
構想	〈色や形として想像する力〉 ・鑑賞資料による配色の種類、配色の効果・工夫に気づかせる。 ・鑑賞から各自の作品を見直す。	・鑑賞から配色の種類・効果を知る。 ・色の感情や色の秩序性を知る。 ・各自の設定した条件(主題)から調和のある配色を検討する。	・単なる方法論でなく主題性を大切にする。
制作	〈結果をみ通し計画的にあらわす力〉 ・配色を再構成させ、主題にあう調和ある配色計画をさせる。	・調和する配色を、配色上の要素から再確認し配色計画する。 ・色紙を置き換えながらすすめる。	・個の思考を大切にする。 ・机間巡視
まとめ	〈ねらいに即し比較判断する力〉 ・配色計画の変化・見通しを主題からとらえ、学習成果をまとめる。	・配色の変化・修正を発表する。 ・配色効果と主題性について理解し見通しをもつ。	・評価表の記入 ・変容の見届け

授業討議記録

—中学校—デザイン分野—自然をもとにして構成する—啓明中学校1年
—身近な野菜から—

授業者 高橋 久美子
司会者 菅原 稜三
角力山 旭

1. 授業者の反省

イ. 題材設定と生徒の実態

- ・ 5月の「色の学習」と「技法」の研究を行い、配色カード、色数の多い参考資料を鑑賞させ、色についての知的理解を図ってきた。
- ・ これに基づいて「技法の研究」では、積極的に画面づくりをさせ、絵具のあつかいに慣れさせてきた。
- ・ この題材では、形と色のおたがいのからみ合いを総合的に、しかし、既習事項とのかかわり学習の順次性を大切にすすめている。

ロ. 公開授業について

- ・ 向陵中に4年で現在3年担任、1年は4学級を担当。今日の授業が一番進んでいる学級である。
- ・ 調和の要素として類似、対照、グラデーションをあげたが、グラデーションは類似・対照のどちらともかかわる。
- ・ 前時までの段階で自分の配色に満足している生徒が多かった。
- ・ 配色計画の見通しについて単純に色をうすくすれば良いと思った生徒がいたかも知れない。
- ・ 色紙の入れ替えによりどちらかが自分の心によくひびくかを検討する。
- ・ どれだけ悩んでかえようとしたか、どれだけ自信を持てたかを見とる。

2. 討議

イ. 自己評価表の活用について 出席者のうち活用している先生4～5名

- 自分で課題を設定し、それに対し自分はどうか自己評価をさせているが、評価表を書かせる時間をもったいない時がある。生徒の活動を中断させたくない。どのくらいウエイトをかけているのか。
- 評価の参考にしている。書いていない生徒もいるがそのような生徒は見通しがついていないのでは、又すべての項目を予測して書いている生徒もいた。
- 段階を踏んだ評価を。生徒は評価表を書くことを苦痛にしてはいないか。もっと自由に書ける、つまり作りたい子はそのまま続け、悩みのある子が書く。統一的に書かせるのではなく、それぞれが自由に書く。

- 作品だけで評価してはいけないという裏がきが出て、それが発展していったものが評価表である。中間層に埋没していく生徒、ABCの中間に印をつける傾向があるので注意が必要。もっと子供の姿、仕事の過程を確認できる方法を、それには綿密な計画と確実に読みとることが必要である。自己評価表は子供の仕事が充実する手がかりになるものなのでは。

ロ．色紙(トータルカラー)かポスターカラーか

- それぞれに良さがある
 - ・色紙 色数を豊富に与えることができる
配色計画の見直しに便利である
 - ・ポスターカラー 色をつくる苦勞を味わわせる

ハ．対照と類似のとらえ方(用語の問題)

- アクセントとして説明した方がよい。資料(スライド)もあったのでは。
- 似たもの同士
 きわだったもので
 だんだんわかる

}	感じが良くまとまるという説明の方が
---	-------------------
- わかりやすい例で説明しては、たとえば対照の説明なども人間の対比で漫才士の例などわかりやすいのでは。

ニ．環境—生徒の実態について(省略)

ホ．助言から

- 教師がその授業に対しどのくらい自信を持っているか、消化しているか。
- 自己評価表については
 - ・生徒のまよいつまづきを教師に知らせる。
 - ・個別指導のきっかけとなる。
 - ・主題把握の度合いがわかる。
 - ・生徒に見通しを持たせる、見直しができる。

一人ひとりの子供に学習を成立させる、学習のしかたを学ばせるということで形成的評価が大切である。自己評価表もその一つであり、生徒の達成の状態をたしかめながら授業をすすめる。生徒には自己指導力をつけさせる。

- 色紙か、ポスターカラーかについては年間のカリキュラムから考えなければならない。1年の構成の作業という点、新しい見方をさせるという点、比較ができるなどの点から考えると色紙でよかったのでは。
- 用語の問題では、授業で使うことには計画性がなければならない。また意欲化にもつながってくる。

分科会記録

提言 「すじ道のわかるデザインの授業を創造する」

田 中 潤（北栄中）

1. 提言内容

絵画・彫塑に同じ

2 討 議

- 小学校では図工の授業が楽しかったが、中学校に入ってきてわからなくなってきたという子が多いというのは、小学校からつながっている生徒の個を忘れ、小中を輪切りにしているのではないか。小学校の指導と中学校の指導の接点を持つ必要があるのでは、また、中学校で教える内容を整理すること、説明などからぜい肉をとりさることが必要である。類似の説明に夕やけなど自然の感動を持ちこめないものだろうか。
- 助言者から
 - ・ 授業が生きて働くことが大切で、教科知識の注入だけで終わっていないか。
 - ・ 重点化 — 題材の中の基礎・基本をどう重点化して子供におろすか、付属物が多すぎると希薄化して定着しないことがあるのではないか。
 - ・ 評 価 — 子供たちの姿が見えるような評価。授業をもとにした、すじ道のわかるという研究。どこでどうやって子供たちの中の基礎・基本が定着し、働く力となるのか。
 - ・ 美術の立場 — 厳しい。人間本来の造形という基本的な行為を教えるのに「技芸」という認識では困る。地域活動の際も、教科性をはっきりと、教科性の考えそのものを変えようとする動きがあり、美術科は選択教科にされたり、他教科との合科となり得る危険性がある。
 - ・ やらせの教育とやる気の教育 — 教師のイメージした作品に強引に持っていかうとしてはいないか。「一人ひとりを生かす」とは「一人ひとりの個性（能力）に応じて」ということを考がえる。複線の指導が必要。授業において上・中・下位の生徒像をふまえた授業が大切である。
- 助言者から
 - ・ 共同研究について — 必要感・使命感がないと共同研究はできない。子供とともに喜びを感じなくては。
 - ・ 美術科は人間の本性に直接かかわる教科である。
教師からの意図的なゆさぶり（新鮮な感動・作る喜び・完成の喜び・表現するたのしさ・使うたのしさ）によって子供は変容する。
意図的なゆさぶりによって子供を変容させ、教師の意志を具現化していくのが教師の使命・特権・喜びである。
 - ・ なぜ、共同研究が必要なのか。
小中合同の研究会が持たれているということは大変幸福なことだと言える。
「中学校の教師は小学校に学べ、小学校の教師は中学校を理解せよ」ともいわれ、札幌では小中の連携がとれていない面がある。
共同研究には或る程度の人数がいないとできない。
一人の研究よりも、共同研究の方が信憑性が高い。
北海道では、幼・小・中・高をむすびつける場合は造形教育連盟しかない。
共同研究は、できる内容からはじめていこう。

校 種	中 学 校
分 野	工 芸
学 年	2 年
教 室	4 0 6

「 土 の 笛 」

生徒 2年1組 42名

授業者 石谷正美(北都中)

1. 題材設定の理由

この題材は粘土を素材として、その可塑性を生かし、土の笛作りを試みる。

それは単に形の追求にとどまらず、音の出るしくみを理解し、条件をふまえた上で、土の笛のもつ機能と形態の調和を意図する。

音の出たとき、生徒の目は輝く。土の笛は造形する喜びを教えてくれる魅力に富んだ題材である。

2. 題材の目標

- (1) 粘土の可塑性を生かし、土の笛のもつ機能と形態の調和を追求する態度を育てる。
- (2) 粘土を使うときの心得を身につけさせ、協力して学習する態度を育てる。

3. 全体指導計画(9時間)

(1) 主題の把握

粘土を使うときの心得。笛作りの手順と方法 _____ 1時間

(2) アイディアスケッチと粘土練り・成形 _____ 2時間

(3) 歌口部の製作と微調整 1時間(本時 $\frac{4}{9}$)

(4) 作品の製作 _____ 2時間

(5) 素地調整 _____ 1時間

(6) 彩色 _____ 1時間

(7) 鑑賞 _____ 1時間

4. 本時のねらい

- (1) 土の笛の歌口部のつくり方を理解させ、音が出るように製作させる。
- (2) 作品を作るための意欲をもたせる。

5. 本時の展開

	指導事項：「高めたい力」	予想される生徒の活動	留意点
題材提示・発想	<p>〈主題をとらえる力〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を明確にさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌口部の製作にポイントがあることを知る。 	
構想・製作	<p>〈条件をふまえて構成する力〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音のなる原理と作り方のポイントを学習させる。 ・歌口部の製作をさせる。 ・ポイントの確認と歌口部の微調整をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音の出る原理がわかる。 ・音の出ない理由がわかる。 ・歌口部の微調整をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・OHPの効果的活用。 ・音の出ないときはポイントの再確認。
鑑賞	<p>〈アイディアを発展させる力〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時のまとめ。次時予告。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品製作の意欲をもつ。 	

授業討議記録

—中学校—工芸分野—土の笛 北都中学校2年

授業者 石谷正美
司会者 山田 宏
霍田文彦

1. 授業者の反省

この教材の取り組みのきっかけは、青森県で買ってきた修学旅行のはと笛が学校にあったことからである。美術部の生徒に作らせた所、とても喜んだことに始まる。

本校生徒の実態は、市内では比較的生徒指導上の問題が少なく大へん素直であるが、その反面消極的で自主性に乏しい。授業学級担当2年の中では、活発な方であるが、授業では少しおとなしく、感動した表情が少なかった。

今日のねらいは音出しであったが、1時間の中でいかに音を出すのが心配で、それでも全員の作品が鳴って普段の4～5倍の生徒が音を出すのに成功したようだ。結果的には、ついていけない子供たちも鳴ったので、班でやったのがよかったのかなとも思った。

指導内容では生徒に考えさせる場面を設定したかったが、限られた時間の中で多くの生徒に音を出させることができるようにしたかった。そこで教師の一方的な音の出るしくみの説明で終わってしまった感じがする。

教師の説明したことを理解させ、製作の段階でいろいろ考えさせたかったが理解できない生徒のことも考えて、はと笛のモデルや個別指導、またOHPだけでなくプリントも活用してみた。

今後の問題点としてははと笛から始めたので、音ならしが主であったが来年度はもっと音楽と関連させて、形を複雑にしたり、たくさん穴をあけて音をたのしむ方向にもっていきたいと考えている。

のっている生徒は1個の粘土から1つ作ると次々とたくさん作ることができるし、形によって大きく音が変わるのでその点も興味をもつことが多い。今後、音と形をもっと関連づけて大小の多くのオリジナル作品を作っていきたいと考える。また、形の方から入っていくと、音を出すしくみが複雑になることが多いが、作品例を見るとすばらしい形と音の作品も多いので、今後さらに努力して教材研究をしてみたいと考えている。

2. 討議

- 授業の準備に大変苦労したと思うが、公開授業では生徒の予想以上の生徒が音を出すことができたのでとても良かったと思う。今日の山場は先生の説明をいかに理解し、1人ひとりの生徒がいかに音を出すことができるかにしぼられていた。その後については発展的な扱いの説明もあったが、最終的に全員が音を出すことができたということは、先生がOHP・模型・プリントで工夫した成果だと思う。教材としては音が鳴った時に生徒の喜びがあるというねらいが達成されたと思う。それでは質問をどうぞ。
- さらにやっていきたいこと(その後の扱い)は授業以外でやるのか。
- 授業でやる余った粘土が半分以上あるので2個目は形や音を冷静に出せるようにさせたい。今回は試作で、共鳴部は休み中家でやり、残り粘土は2学期に2作目、3作目を製作させる。
- 指導過程の作品(公開授業)を仕上げるだけではないのか。

- 他に1・2点作らせる。音を出せるようになると、音出しの時間が短縮され、簡単にできるはずだ。
- 札幌大会のテーマとしては自分の力でできないところを乗り越え、新しいものを創り上げるというパターンが望ましいという指導を子供にしてきたようだが、今回の授業は説明が多すぎたようだ。自分も見せる授業では、これだけの準備をするだろうが、生徒が失敗しながら悩んで発見していくという方法はどうか。
- 昨年、校内での公開授業で同じ内容でやったが、成形から入って2人しか音が出なかった。その時は考えさせるという形をとったが、その時間内で鳴らないというのは成就感がないので子供はがっかりするから、今回は音を出すことを最優先とした。
- 指導が良ければ生徒ものっていき、良い作品ができると思って今までやってきたが、それではためなのではないか。情報をあたえすぎず、自分で失敗しながらやらせる方がおもしろいのでは。来年は函館での大会なので、期待半分、興味半分できたのだが。
- 授業者も全員が鳴るとは思っていなかったのでチェックポイントを用意したのだが、たまたま生徒がよく理解するようにと苦労した結果うまく音が出たので、悩みながら創るといふ具合にはならなかった。
- 音が出ないのでどうしたら良いかというやり取りの場面が欲しかった。
- 私はオカリナを5年つづけてきたが、工芸であるから機能性第1で形は意識しない。
 授業では機能性1点ばかりで鳴らなきゃ点数を与えない。しくみを理解し、粘土をうまく扱えば必ず鳴る。割ったものを接合すると音は低くなるとか、音の種類、オカリナのしくみを教えてやらしても5・6人しか音を出せない。悪戦・苦闘して先生と生徒がいっしょにやっていると音が出るが、穴を大きくすると音が出なくなるという難しさがある。
 形の上での面白さを出すのか、1音を1オクターブに広げ音の楽しさを出すのか、先生のねらい、目的により持っていく方はちがうのではないか。自分は1音ではつまらない。オカリナという機能を持たせると、子供は難しいのできついが何時間でもやらせれば満足感を持つ。工芸は、使用に耐えなければならないという事を明確にさせることが必要ではないか。
- 公開授業はショーだから見せ場が欲しいが、できるだけ失敗させながらやるのが面白いので見たかった。今回のようなOHPの使い方などとてもよかった。今日のようにサーッと流れる授業もすばらしいと思うが。(紙面の都合で以下省略)

分科会記録

提言 「すじ道のわかる工芸の授業を創造する」

向 敏 光 (清田中)

1. 提言内容

共通基調提言の内容から

- イ. 経過として、昭和52年度までは、人間形成の過程における色と形の認識と創造性の育成の研究成果の中で高めたい力を14項目についてまとめた。昭和53年度からは指導要領の改訂があり、各学校から題材配列の資料を集めたり、授業の中で工夫されている実践の検証をしていた。昭和56年度からは、すじ道のわかる授業の実践ということで、各分野ごとに基本的指導事項や、生徒活動のあり方や流れについて検証していきたいということで現在にいたっている。「高めたい力」ということばは提示された題材について、生徒が自ら学習主題を明確にとらえ、その主題実現のために、主体的に取り組み自己実現する学力内容である。
- ロ. 2の研究の内容については基本的指導事項を洗い出していくということで、絵画・彫塑・デザイン・工芸の4つの分野で取り組もうとしている。初めの2年間は絵画分野を全市で取り組んだ。その後7つの地区を3つのブロックに分け、この地区では工芸を中心に取り組んでいる。
- ハ. 3の研究の方法では、すじ道を大切に、授業実践や指導過程について深めていこうとしている。また、発想・構想の段階を中心として製作へのつながりのなかで実践したりしている。変容という言葉が使われているが、どのように生徒が変わっていくかという姿を見たいということである。また、全市的に人数も増大し、取り組みやすい方法はないかということで、ブロック制をとって研究を進めている。そして公開授業を中心に生徒の作品や資料を持ちよることです。
- ニ. A・B表の実践表については、公開授業のおり、各校の先生方の実践を持ちより、その記録をもとにして関連題材や実態、それから指導上のおさえを記入することになっている。さらにB表については、授業の前後をふくめて指導過程や内容について記入することになっている。また「高めたい力」を中心にぬき出しながら、それにもとづいて、教師の働きかけや生徒の動きを記入したものである。最後に、どのように教師の働きかけによって変っていったかという生徒の変容について。
- ホ. 教師がおさえることのできる生徒の変容と見ることのできない内面的な変化の両方があるのではないかということと、その時間内の中で教師が生徒にもとめようとしている指導事項に生徒が表出した変化を変容として考えていこうというところで現在進めている。
- ヘ. 研究のねらいと具体的方法については基本的指導事項と「高めたい力」との関連について考えていくことや、教師の指導の手だてや生徒の活動のあり方を見ていくことがある。生徒の変容については、授業の終わったあと生徒にもっとこういうものを考えさせたり、わからせたりした方がよいという表出されるであろう姿の面も考えられる。研究推進の現状については、完全なものではないが絵画分野でのとりくみで4つの視点が浮き彫りにされたが、他の分野ではどうであろうかという研究がされている。
- ト. 工芸分野では、「高めたい力」を14項目におさえ、絵画で出された4つの視点をもとに試みているが、この4つの視点の他にも、目的や条件や材料といった面にも、まだ他にもあるのではないかと考えられる。

2. 討 議

授業討議の記録に紙面をとったため、全面省略をする。内容については前3分野の内容を参考とする。

校 種	高等学校
分 野	
学 年	
教 室	407

「エネルギーをわきたたせる題材を考える」 について

提言者 香西富士夫(平岸高)

- ◆ 早いもので美術の教師になって23年たちます。前半15年は中学校に籍を置き、義務教育としての美術を指導してきました。
- ◆ 中学校美術においては、一般教養的な基礎能力を付けると言う「ねらい」から、5領域(絵画・彫塑・デザイン・工芸・鑑賞)を片寄ることなく学習させることと、成長発達段階に応じた題材配列をすることの2つが中心にあり、共同研究も盛んであったこともあり、題材配列の例や指導の過程・変化に富んだ題材例などもあって、他教科と同様に1つのパターンに添って教科経営を進めていけば良かった。
- ◆ しかし9年前に高校に移り、高校教育における美術教育を考えてみた場合(本質的には何ら変わりは無いと思うのだが)いくつかの相異点・困難点・戸惑いなどがあつた。

それを箇条書きにしてみますと

1. 教科に対する期待度が生徒それぞれ違うこと
2. 長時間を要する制作には飽きがる生徒が結構いること
3. 本校の事情で、絵画領域と平面デザインの領域しかできないこと(狭い教室に45名の生徒が人っけていて、教材室などもない)
4. また、2年生は1単位履修である
5. 実習費を一斉徴収することが不可能であり、画材等は各自が購入するので教材が不揃いになる

などがあげられます。

そこで、この高校部の分科会では次の3点を中心に話し合っていたいただき、何らかの収穫を得られればと思います。

- ・年間指導計画はいかにあるべきか。(題材数・時間数・各領域の問題)
- ・生徒が興味を持ち意欲的に取り組む題材とはいかなるものか。
- ・効果的な指導過程とは。(発想・構想・制作・鑑賞・評価)
- ◆ 話し合いの発端として、本校生徒の実践作品を持参致します。ありきたりのものばかりですが御指導をお願い致します。
 - ◇絵画作品として 1年— 幾何形態素描・油彩静物6F・はめ絵
2年— 石膏像鉛筆素描・油彩自画像・凹版画
3年— 静物素描・模写
 - ◇平面デザイン作品として 1年— レコードジャケット・平面構成
2年— カレンダーイラスト・マーク
3年— 詩のためのイラスト・平面構成
- ◆ なお、市立高校4校の1年生を対象に「美術に関する意識調査」を実施してみました。美術選択の理由・好きな領域・評価についてなどです。結果についても御意見をいただきたいと思います。

高等学校

分科会記録

提言者 香 西 富士男(平岸高)

司会者 近 藤 暢 男(旭丘高)

1. 提言内容

- エネルギーをわきたたせる題材を考える

- (1) 年間指導計画はいかにあるべきか
- (2) 1つの題材にかける時間数の大小
- (3) 題材の選定について

美術Ⅰの進度表→ 4月幾何形態デッサン 5月レタリング 6月レコードジャケット 8月静物写生 10月平面構成 11月自画像 2月西洋美術(鑑賞)

美術Ⅱの進度表→ オリエンテーション 4月石こうデッサン 6月静物写生 10月版画(ドライポイント)空想画 1月カレンダーイラストレーション

美術Ⅲの進度表→ オリエンテーション 5月静物デッサン 6月人物群像 8月平面構成 10月石こうデッサン(木炭) 11月模写 1月卒業製作

- 各学校における指導計画について

学期における題材の数は多い方がよいのか(4つほど)少ないもので時間をかけた方がよいのか。

題材配列をどのようにするのか、例えば、1つの分野を系統的に配列するか、各題材を次々と消化していくのがよいのか。

部活動のあり方はどうあるべきか。

2. 各校の実践

<札幌 土岐先生> 工芸

- ◎ 工芸の中の用を重んじたい(使いやすさ)その他機能的な面も重んじたい。又制作費をなるべく少くしたい。

- ◎ ーペン立てー 金属加工

- ペンの長さを考える→ 制作物の実長を出す。上下にななめに切断したものを実際に紙を展開図からおこして製作する(傾斜する面の展開図)

- ラフスケッチ(ペン立て)→ 透視図法と陽と陰の関係を表現する(黒色紙に鉛筆で明るい部分を描かせる)

- ◎ ーキャンドルスタンドー 金属線材 ガラス溶接

- ローソク立てのつめの部分→ 和ローソクを洋ローソクの熱のちがいがあり、洋ローソクは熱でたおれる。

- ◎ その他 2年時は木工作品、又、3年の2学期後半の忙しい時ほど生徒は集中する。

<札幌 真栄 佐野先生>

- ◎ 新設校のため設備不足。生徒は筆記用具位しか用意していない。生徒は私語もなく作業していたが、授業をどこまで理解しているか問題がのこる。

<札幌 啓北商業 佐藤先生>

- ◎ 石こうデッサン(木炭 10時間) 油絵の前段階として行う。その後鉛筆で自画像のデッサン

<千歳 北陽 木滑先生>

- ◎ 油彩12時間位で1学期かかる。2学期は油彩の2枚目を行う。その後デッサン分野。全体として完成までやらせる。2年時は少々ゆったりと授業をする。

<札幌 近藤先生>

- ◎ 1年時は徹底して油彩の授業。油彩道具の使い方、風景、静物、自画像、美術館鑑賞、油彩10時間程度
- ◎ 2年時はレタリング(1学期) 立体画(2学期)ゲームの制作、ビデオ活用
- ◎ 3年時 石こうデッサン ステンドグラス 七宝焼き
あまり時間数を少なくすると題材を深められない

<千歳 垂石先生>

- ◎ 美Ⅰ、美Ⅱとも2単位、年間70時間であるが実際は50時間となることもある。
鑑賞はビデオ、スライドを使って。その他数年前からレポートを提出させている(西洋日本美術史)油彩はデッサンを含めて時間をかけて行っている。版画、粘土、ペーパークラフト、屋外にある身近な見すごしてしまうものを題材として行う。

<東豊 白川先生>

- ◎ アクリルとスケッチブックを用意して行う。学校祭での壁画のとりくみ、新設校という事で教室をよごせない。芸術3年次選択の生徒の質が問題である、生徒の授業態度の重視(評価)テストの活用(教科書から)展開進度の差が一番遅れているクラスに合わせる。
評価は1時間毎に10段階評価とする。理論面は実技とかかわるものを実施する。

3. 質議応答

- ◎ 模写はどういうものを
 - 各自原画を用意して4号キャンバスで行う。
 - モノクロで、色のバルルをモノクロで表現
 - 描く意欲はあるが描けない生徒に対して模写を利用する
 - 一時期模写は教育的でないといわれていたのでは。
 - 小学校教育の概念くつきはかえって描く意欲をそぐのでは。技術習得も大切である。
 - 今までに経験したことのない色彩経験をすることも大切
 - 自らの中でわからなくなった時に突破口としてならば必要である。
 - 模写は模写であり絵ではない。美術教育での位置づけは模写をしたあと、どのように発展させるかが問題である。
 - 知的理解のための一助となれば
- ◎ 評価はどのようにしているか、教師の眠力のみで評価
 - 指導のねらいを項目別に評価
- ◎ 学校設備の面での各先生から教室面積などの問題が出た
 - 新設校では、美術工芸で2教室、準備室で2が新設されている。しかし他の学校では十分なスペースが確保できていない。
- ◎ 言葉のしゃべれない生徒の現状について、施設、設備は大学に匹敵するものがある。しかし、生徒のけじめ、言葉の理解など指導のむずかしさがある。
- ◎ えんぴつが削れない子ども→ 現代はよい筆記用具がある。
味覚についても伝統的な味はわからない。しかしインスタントの味はよく好む。
人間の手を経た技術が忘れられている。
- ◎ 美術の分野でいろいろな題材をとり上げているようだけでも地域や学校の実情を考えておこなってほしい。

速報 造形さっぽろ

34 北海道造形教育研究大会 札幌大会 速報班

速報 造形さっぽろ

34 北海道造形教育研究大会 札幌大会 速報班

札幌大会をむかえて

大会委員長
連盟委員長

種市 誠次郎



ようこそ さっぽろ



大会運営委員長
会場校札幌市立白楊小学校長
森川 昭夫

北国の夏は短かいがさわやかです。その太陽の季節がやってきました。

月おくれの七夕ではないが、年に一度、この時期に遠くの道内の仲間達と顔を合わせ、お互いに元気であることを確認し合う日がやってきました。

ただ、顔で握手するだけで、もう気持ちが伝わり一年間の無沙汰もここで解消するのです。

ようこそ さっぽろ この会場で、気持ちのよい挨拶をかかわせるのを、今日まで待ちこがれておりました。

全体会場で分科会でお互いの一年間の無沙汰を解き、実践を交換し合ひましょう。

大事な大会の会場をひきうけて、今日の大会をむかえるまでそれぞれの分野で各自力いっぱい準備してきました。

おそらく不備な点が多々あろうかと存じますが、どうか、その誠意と努力に免じてお許し下さいます様に。

2日間のごさっぽろを有意義にお過ごし下さい。

この札幌大会では、連盟の研究テーマである「創り出す心を呼び起こす造形教育」と、札幌大会のテーマである「知恵とエネルギーをわきたたせる造形教育」という命題にとりくみ、研究がもたれますが、造形教育が創り出す仕事を通して、子ども達に—その充実感や満足感を味あわせるとともに、知恵によって主体的に、新しい価値をつくり出すことを願っております。

具体的には子ども達に

- ・楽しんで造形活動をさせ
- ・業直な発想や新鮮なアイデアを生み出させ
- ・ほんとうに必要な内容が与えられ
- ・発遣に即した材料や用具を使わせながら
- ・個性的な表現ができる。

そのためには、日常の指導がどのようにすれば効果が上がるのか、又、実践上の諸問題についても解決が図られる研究となることを期待しています。

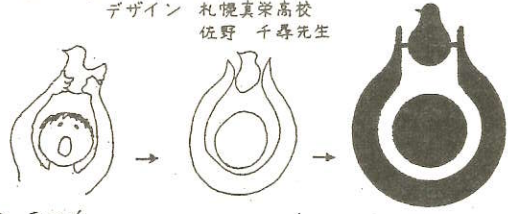
この大会によって、造形教育の実践活動が盛んになり、各地で子どもの創造の芽がすくすく育つことを期待するものであります。

第10回北海道教育美術展記念画集



教育美術展も昭和58年度で第10回を数えます。この度「日本アイビーエムK.K.」の協力を得て記念画集ができました。奨励賞100点が編集されてあります。この一冊で全道のレベルがわかるとおもいます。

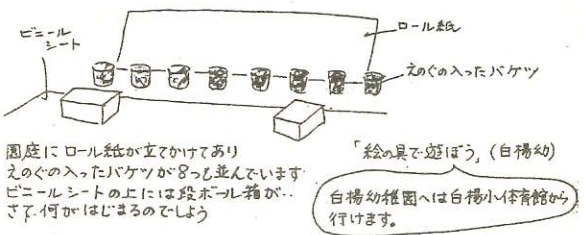
シンボルマーク



「や、たー、」
 「できたぞー」誇らしげに、高々と、作品をかざす子どもたちの姿をシンボライズしたもの。

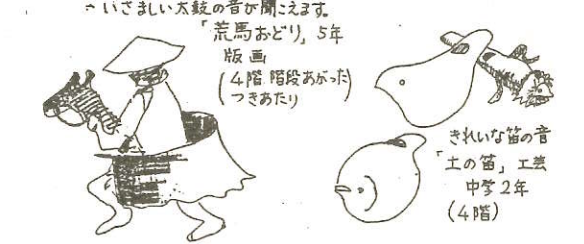
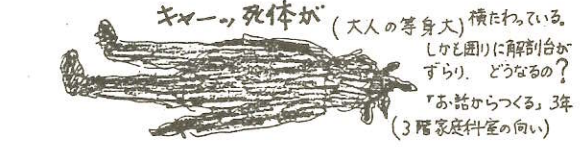
わきたつ発想・たしかな表現
つくりだす喜び
 (15の公開授業)

サステーマびっりのダイナミックでユニークな授業が15教室で公開されます。
 分野で選別しますか、学校種で選びますか、それとも学年を指定して見ますか？ とにかくどれもこれも見逃されたい授業ばかりです。超人的に全部見られたらいいのですが、2,3ご紹介しましょう。



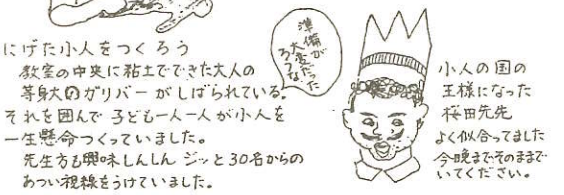
園庭にロール紙が立てかけてあり
 えのぐの入ったバケツが8つ並んでいます
 ビニールシートの上には段ボール箱が
 ぞう何かがはじまるのでしょう

牛乳パックが**1600**個
 マટેどんな遊びが始まるでしょう。
 「牛乳パックで遊ぼう、2年
 (3階回室)」



公開授業 熱気・熱気・熱気

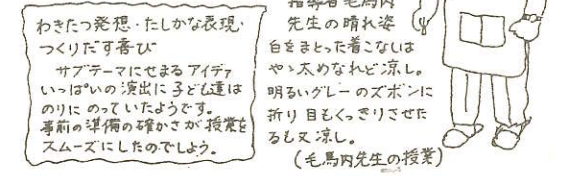
30度近くまで気温が上がって、文字通り、熱気あふれる授業が公開されました。
 それにしても子ども達はりっぴですわ。普段とまったく変わらない熱心な話し合いが続いていました。



大きなガリバーを前に子ども達はもう粘土を出したくて出たくて落ちてきません。「もうちょっと待ってね。子どものほろきれんばかりの心をあてえるのに苦労していました。先生のまなざしは、その目のようにやさしく先生は」
 (稲田先生の授業)

「気をつけ、これから園工の勉強を始めます。」
 元気に満ちた子どもたちの声がひびく。
 先生が手にしたジャンボ紙作品に子どもたちは「ウワー」「スゲー」
 「動くかな、暑々とした期待の眼・眼、でかん声をあげていました。
 「今日は動きや文天ごを確かめながら紙に命を与える日。
 まだ半数以上がスムーズに動かない。まわらないのは、ゆれないのは、たぶれるのは、動かす原因を見つけて、直す手立てを考えさそく製作にとりかかる。
 にわとり・ヨット・つる・ロボット
 次々と作品が完成に近づく。
 やがて ゆらり・ゆらりと動きはじめる。
 子ども達のひとみがきらり。
 互いに顔をみつめあわせ苦心の過程を話し合う。(小林先生の授業)

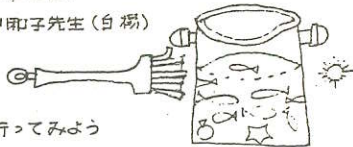
おはやしの笛と天鼓の音と共に始まり祝詞に最後まで続く。運動会で6年生と共演した「荒馬おどり」の絵を版画にしようというのだ。
 今日はその下絵を直接ワリバンペンで板にかく授業。
 OHPで参考作品による白黒の彫り分けの説明があつて、次時へつなげられた。



公開授業 朝の種まき

◇幼稚園〈造形あそび〉…えのぐであそぼう
 子どもたち、歌声をあげながらピアノのリズムにのり、赤、青、ローラー、ペンキなどで等々、かべぬり、ダンボールぬり、たちまち海の中に早稲いり。
 魚の家には、ステキな赤、ピンク、黄の色などボンボンと軽い音をたてながらあそびました。

・大川和子先生(白羽)



◇幼稚園〈絵画〉

…海のながへ行ってみよう

色とりどりのスモック(上着)をつけた子どもたち、どの席にと笑みがいっぱい。まず、教室の本棚におかれた大きな風用紙の上にごかかなクレヨンでまちどろし。その上にえのぐでまづきをするという学習の流れ、とどと楽しい授業風景でした。

・大西明美先生(甲の島)

◇幼稚園〈製作〉…はこであそぼう

樋口裕美先生(第一幼稚園)は空ばこを使、この製作です。授業は展開前半の段階でしたが、子どもたちはハサミ、セロテープを片手に鉛筆、動物の形づくりが的確、一生けんめい工夫しながら製作し

ている姿が目につきました。特に、子どもたちの身振りの活発さ、造ったいろいろな製作中に自分なアイデアがみられ、得意な様子が見られました。

◇中・高〈工芸〉

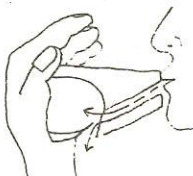
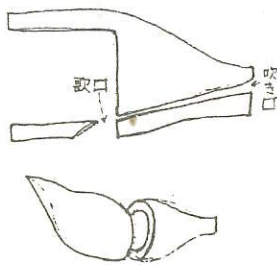
…土の笛

公開授業の様子であちこちとび回り、中学校の方は入り口で首をうつこも程度で突進しました。

その中で、石谷先生のものでいてみましたが、先ず目に付いたのは、板書のすばらしさ、大きな文字、わかり易い図解です。特に、OHPによる説明は授業する生徒にとってプラスされること大だ、と思います。土の笛の構造、音の出るしくみについて板書され、授業の結果はどうなったんだろうと原稿をかいていたら…土の笛、うま〜い♪たようだ。生徒の笛、手塚なつたようだ、という一般評はいろいろありました。

音がたどる生徒の喜びがうま〜い♪たようにみえるようです。

・石谷正美先生(北都中)



「すばらし〜造形はしば〜う〜と〜り…」

写真のマトリクスシオン、南司家川の吹奏楽は小学生とは思えない演奏ぶりになつて、レパトリーと広くアイアナは特に心づかれるのがあった。



委員長の挨拶

種市 誠次郎氏

天気心配されていたが、大会を祝うように夏らしくカラッと晴れてくれたとても嬉しい。

全道各地からたくさんの方々が集まり、年に一度の顔合せができてこれも嬉しい。

造形教育が子どもと人間の心というものと、どんなつながりがあるのか、子どもの心を育てることが、いかに大事か、21世紀に生きる子どもを豊かな人間に育てることと、どうかかわっているのか、考えていきたい。

ものを造り出す仕事というものは、さまざまな力を育てるものであるし、それによって、充実感・満足感・進歩感なども育っていくのである。

札幌大会のテーマ「創り出す心と呼び起こす造形教育は、今日の授業や、これまでのさまざまな研究を通して追求してきた。各地の皆様方の研究と交流し、より一層、深めていきたい。これによって、造形教育の輪が広がり、子どもの心が育つよう願っている。

本大会参加者総数 **801名**
 中継(11時30分現在)

分科会始まる

15の公開授業後開会式が行われました。その後16の分科会に分かれて活発な話し合いに入りました。

それぞれの分科会では型どおり授業者からの話があった後、いろいろな質問や意見が出されました。

何かを学ぼうとして集まってきた方々です、その一問一答に一つ一つ聞き手が面白いとメモを片手にじっくり耳を傾けておりました。

どの分科会からも、子ども達がとても生き生きと活動していたことに感心していたとの声も聞かれました。

今日の回工の時間に至るまでに、どれくらいのことを積み上げればこのようなすばらしい授業になるのでしょうか。それはけっして回工だけの準備ではないはずで、一言でいえば、どんなことを目ざして学級経営がなされてきたか、ということでしょう。

授業では見られないところに、その秘密がかくされていそうです。だから話を聞かないと全体がわからないと思うのですが。

午前の分科会を終わって一言 造形ポスト第号

私達のように基本的なところでまどっている者には、もっと具体的な話を聞きたいのです。だから分科会とA組・B組とかに分けて同次元同工で話し合ったらどうでしょうか。

みんなからの質問を一つひとつまとめて往をつくらから話し合いに入ったら時間がたりなくなるのではないかな。

教室がせまくて、窮屈でした。私が太っていたせいではないと思うのですが。

大会の感想をお聞かせ下さい 造形ポストへ

又々の札幌大会いかがでしたでしょうか。感じたこと、考えたこと、疑問に思ったこと等々お気軽にメモして造形ポストにお入れ下さい。(用紙はお手本の袋の中に入っている速報班の用紙をお使い下さい。)

造形ポストから

今日ほ暑か。たですわ。この暑さの中での大会準備・運営・大変ご苦労さまでした。この白樺小学校の環境の良いのがうらやましいです。

明るい校舎で施設・その他のも子どもたちにとって良いですね。ただ音を聞けると車の騒音に悩まされますわ。



明日もこの暑さ？
冷めたいジュース・コーヒーなどの販売もあってよいのでは……実はのがかわいてしまって非常に困ったのです。水道の水ではね。……

もっと深くつ込んだ話し合いを

良い授業・良い発言と大変勉強になりました。
残念なことは、限られた時間内で授業や発言に対する感想を全員に言わせるのほど的なものでしょうか。
美辞礼賛になりがちで1時間近くも費したことはもったいないと思います。
もっと広く深くつ込んだ話し合いにしてほしいと思いました。室蘭の先生は汽車の人となることと大変残念がっております。

子どもの欲求をくんだ指導を

熱いお茶にはほとほとまいりました。暑いのでお茶は熱いのは口に合わず。ほとんど飲みなかつたのでのどがからからでした。

「子どもを見つめなおすこと、子どもが作品を通じて何をうったえようとしているのかを常に、私たちが指導するなかで、忘れないこと、数多くの作品の中で、そして討論の中で感じとったことです。
形を運ぶこと、まさに大人の理屈を打ちやぶる作業であり、ことの対話であると思えました。

いじ悪文部省

もれ聞くとところによると、会場校白樺小学校に文部省の監査が入ったそうすわね。しかも今日突然に、
ただでさえ夏休み返上で忙しい日に運んでいるのに大変なことだと思います。しかしそんなことをおくびにも出さず、私運のために献身的につくされている姿に頭が下がります。
それにつけても、わざとじじ悪をしているように大会開催校にぶつけてくるなんてなんということでしょうか。
そうはいってしそのことに、何のお手伝いもできないのですからほかゆいかなげです。
せめて、みんなで後始末をしっかりやって、白樺小学校に感謝の気持ちを表したいと思えます。

みんなで後始末

PTAのお母さんかごめつたです。

PTAのみなさんおいしいお茶をありがとうございました。暑い時の熱いお茶もおいしいものです。夏は暑いものです。熱いお茶を飲んで暑さをふきとほしましょう。

レセプション ミカド



猛暑のうちに札幌大会第1日は盛会に終了し、夕方には次の催物であるレセプションがひかえている。
時4時を告げ、多会者は地下鉄にて一路ミカドへ向かう、パリのムーランルージュ、リドに似せた札幌一の社交場ミカドには、そうめんに門をくぐるチャンスは少ないと思ふ。緊張のあとは空を穿ち、場と心奪なり……
年に一度、旧知の友や同僚にあえたいうことで呑む程に酔う程に時のたつのを忘れ話かはすむ光景があちこちにみえとてと楽しい雰囲気でした。

ミカド

ミカドに入るなり、きいろの制服に身をつつんだボーイがおごそかにおまねき……
すんなり……まあ、猛暑から、クーラーのきいた会場へ……早く早く、ビールがのみたい。
今日は、おいしいビールがのめるぞ、ノロノロにいよいよから松島校長のにぎにぎしいレセプションに開会式のあいさつ。そして、理事連盟委員長にかわって赤井校長のあいさつ、とにかく日程の半分以上をおわ。てほつとしたような、また、安心したような満足しきつた観、観、観



この顔が、今ミカドにある。とにかく明日はあるが、今日は大いにのんびり関係者のみなさまごいっしょに労をねぎらいましょう。

……カンパイ、と同時にあちこちの高からよどみなく聴らぬの声をきこえました。



Mikado

札幌の夜の観光案内でらんになりましたが、ススキノを中心にお祭りの地図をわかり易くかき同封しましたが、昨年の2次会は、なじみのスナック?……赤ちようちんなどで語り、カラオケのマイブ合戦もあつたのではないのでしょうか。
ところで、今日2日目は講演があります。頭をすっきりさせ竹岡先生のお話をききましょう。

◇演題 「私の美術館めぐり」

北海道新聞編集局長次長
美術評論家
北海道美術ハンクラブ同人
・竹岡和田勇氏

分科会から

彫 塑

地味な仕事



粘土教材は、とても地味な仕事であり、絵画のように、色あり・形あり 構想画あり、物語・静物ありといったものではありません。むしろ ほったり、つけたり ひねったりのぼしたりするだけのきわめて単純でさぼくな技法であります。

その中でどのように動きをだすのか、表情をどのようにするのか が大切な課題でありました。その運形要素としておさえることを必ず考えていかなければならないポイントであります。

やはり このあたりがいつでも真剣に話された程の中心でありました。



現在指導要領の中では、表現と鑑賞との2領域になっていて、その中で絵画・彫塑・デザイン・工作は並列に位置していますが、彫塑は絵画ほど体系的なおさえの上で十分とはいえません。

教科書にあるから、教材セットが手に入るからと安易に題材をとりあげてはいないでしょうか。教育の場にその時突然にはゆるされません。

どうして頭像なのか

なぜこの学年では頭像なのか、それに至るまで前の学年では何をしておかなければならないのかをしっかりとおさえておかないと、全くの教師の好みで行うことになりす。

教育の場では常に一学年ずつ積み上げていくことを考えていなければいけないと思うのです。

絵 画

単元をガッチリ

夢想づくりが 基盤

授業を中心とした話の中で、色やイメージの広がりのことが話題となりました。

参加者からは「色がとても明るく美しい、またそれぞれのイメージを形にするとさー一つの形がバランスのとれ 構成もすっかりしている。さーと授業以外でも時間をとって指導しているだろうと思いますが本当のところを聞かせて下さい。」との声がありました。

授業者の益村先生いわく「あまりたくさん こまごまとはかせません 学期に設定した単元をガッチリ 徹底的に指導するようにしています。」

加えて助色者からは「益村先生は、子どもたちとすっかりつながっている そのことが、回工指導の基盤です。」との話をいただきました。

子ども一人を しっかり指導

絵画は言うにあよはず図工科のどの分野にも言えることだが、子どもが感動したことや他に伝える手段としてあるのだから、子どもの気持ちや能力(発達段階)を無視してはならないと思います。子どもが今、何を感ず、何を要求しているのかを、そして今この子はどれくらい力を持っていて、どのくらいに引き伸ばしてやるのかを常にしっかりとおさえておかなければだめだと思ふのです。

作品を語る会

今日も朝からむし暑い真夏日です。それにもめげず各会員は、それぞれの分科会に別れ、作品を前に活発に意見をたたかわしました。

幼稚園部会などは、約70名からの熱心な会員が集まり廊下から身をのり出している人たちが見られました。

絵 画

旭川の絵画展作品から話し合い開始
写生地は、神社、博物館、貝い物公園、工場などがあるが、学校近辺を中心に学習し、校外へは年1回程度出るとのこと。

入選作品を画集、版画版にして発行し、日常授業資料に活用しており、子どもたちのはげみにもなっているという。

指導要領改訂で、線描中心ではあるが、旭川

市教研では観察表現にも力点をあき、ものを正しくみる眼をやしなうと同時に色づかいの学習も組み上げている ー以上旭川ー

線の豊かなタッチの多様な3年生の作品にうたれて参観者一同 ーとき無言の鑑賞。

益村先生が3年生に指導した「にわとり」のダイナミックな水彩画にも注目されていた。

工 作

「子どもの意欲をいかにわきたせるか」について話し合われていた。

工作指導にあたり 指導者の姿勢・熱情が子どもに作る作品へ愛着を持たせ 大切にすることを育てる。そのために教師自身が試作してみ、楽しめる教材でなければならぬ。

単純なものにもむずかしさがあり、どんなに小さなものにも指導すべきポイントが秘められている。だからこそ事前の試作が重要。

動くおもちゃづくり指導のポイントとしていること。

1. 身近にある材料 用具を扱う。
2. 正確につくり上げられるもの。
3. しかけは単純で、発想が豊かに広げられるもの。
4. クラス全員が生かせるしかけであること。

授業で子どもが試行錯誤しながら製作している中から助言、個別指導するよりも、学びとるものが多くある。

造形ポストから

函館であいましょう

猛暑の中、約600人を集めて行なわれた第34回大会・札幌大会も無事終わることができました。

2日間で行われた各分科会では、沢山の実践交流がなされ、又別な面での課題を持ったのではないのでしょうか。

明日からの1年間、新しい課題にむかって、実践を積み重ねていきましょう。

その実践を次回の函館大会に持ち寄りましょう。

次回35大会は、異国情緒のある町、港のある町、評情豊かな函館です。

今日、ここに万集まりのみなさんはもちろん、友人知人、恋人を連れて来年会いましょう。そして作品で握手あいましょう。



2日目だけの参加でしたが、分科会で多くの方々の考えや意見を聞き日常自分がしていること、考えていることを見なおす機会を得ることができ、大変有意義であったと思います。

来年の開催をたのしみしています。

大会の準備等いろいろ御苦労さまでした。参加して思うことは、教員をながくやっていることもあり、何か「ハット」するものがなかったことです。

テーマの共通性が公開授業を通して感ずることがなかったこと、地域性・札幌市でなくてはならないものを、何処かで出してほしかった。

時代を先どりした、テーマなり素材なりを利用した授業がみたい。

前向きにやっていきたいと考えて参加したが要求がみたされず残念でした。

校内研でやれる事を全道研でやるのは少々物足りない。

あしがき

7.28.11時35分宛

暑い中での札幌大会も無事終わりました。乱筆の速報モードも予定通りやっど10号までござっけました。大会全体の様子をくまなくお伝えできなかったことに少々不満は残りますが、少人数では、これがざりざりのところでした。次回はもっとかんばります。

速報班一同

35回大会 60.7.29(月)~30(火) 札幌校 函館市立跡生小学校 函館市跡生町4-16

ことが出来る幼稚園では、その積み上げ方によって高度に見える作品を完成出来ると思います。子どものみの作業でなく共に作るよろこびを味わいながらの作業となるからである。子どもの未来の姿を思う時楽しい思い出として心に残ると思いたい。(保育所の先生)

連盟にカツ!

授業者・提言者共に2回もしも返えった感じである。自信を持ってがんばっている姿が印象的であった。

しかし授業者・提言者共に、札幌という一つのわくの中で単一の業種にどっぶりつかっているだけで授業の構築から展開言葉使いにしても自分の本当のものになっていない点。

子どもに何をどう教え、どう育てるかを明確にしていけない点、自分の考えが一番N.O.Wと考え、全体的・全道的・全国的な傾向を知っていない点、又それをこれからやろうとしない、知ろうとしない態度。

そんな点が、言動のはしはしに見受けられ、今後の全道の造形連盟がどうなるかという心配もある。

とにかく、皆がいう事はわかっているんだ。その上で私は、札幌は、の考えを捨て、共にわからない点は、はっきりさせ共に学んで行きたいのです。

かんばれ、札幌、次代の連盟

手続きの件

研修当日まで、講習案内が何もなく、初めての参加でした。たので大会前に心配になり連絡をとりました。

当日の受付も会場が2会場であるのに小学校の受付で、多少不親切に思いました。

場所

交通量も多く声(提言者・司会者)が聞こえないことあった。(分科会)

速報は各会場のようすがうかがえ直接参加できなくて速報が手に入れられよかった。

時間どおりのスムーズに運ばれたこと、沢山の方々の裏でのお仕事をしてくださった方々、みなさまに感謝致します。来年函館にも参加を望んでいます。(幼稚園の先生)

速報一ひととわかりやすい編集で楽しく読ませてください。

幼稚園部会では、助言の先生方の良いお言葉を愛していただき、勝ちな保育に、広い視野を持つようになると、お話を聞かれたように思います。

反面、保育実践の流れ、運び、準備のしかた等を覚えていないために心がしっくりいかない助言(幼稚園としては準備できるのではないか、0-0は00年生でもできるか)がありました。学校とらわって、保育者と共に時間を

全道造形教育研究大会の開催地と研究主題一覧

- 第1回 (札幌) 1950
情操教育の一環として本道図工教育の進展をはかるため。
- 第2回 (札幌) 1952
美術教育の新思潮である創造主義美術教育の諸問題について。
- 第3回 (旭川) 1953
美術教育の指導とは何か。
- 第4回 (函館) 1954
図画工作教育実践上の諸問題について。
- 第5回 (釧路) 1955
図画工作教育における学習指導上の問題点の解明。
- 第6回 (札幌) 1956
造形教育において、つくり出す力を養うにはどうしたらよいか。
- 第7回 (室蘭) 1957
のぞましい造形教育における具体的諸問題について。
- 第8回 (小樽) 1958
図画工作学習によって児童生徒の人間性がどのように培われるか。
- 第9回 (帯広) 1959
新段階における造形教育のあり方。
- 第10回 (網走) 1960
本道における造形教育の実践を通して今後のあり方を見よう。
- 第11回 (滝川) 1961
子どもたちの芸術性を育てるために私たちは何を与え何をすべきか。
- 第12回 (名寄) 1962
子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか。
- 第13回 (余市) 1963
子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか。
- 第14回 (札幌) 1964
子どもの造形能力とは何か。
- 第15回 (稚内) 1965
子どもの造形能力とは何か。
- 第16回 (室蘭) 1966
子どもの造形能力とは何か。
- 第17回 (函館) 1967
指導の構築を具体化する。
- 第18回 (苫小牧) 1968
指導の構築を具体化する。
- 第19回 (札幌) 1969
造形能力は、どのような指導によって育てられるか。

- 第20回 (旭川) 1970
ゆたかに生きる子どもの造形能力をどう育てるか。
- 第21回 (札幌) 1971
造形能力は、どのような指導によって育てられるか。
- 第22回 (帯広) 1972
未来に生きる子どもの造形教育(生活に根ざした造形表現をどう高めるか。)
- 第23回 (室蘭) 1973
未来に生きる子どもの造形教育(たしかな表現力をどのように育てるか。)
- 第24回 (美幌) 1974
未来に生きる子どもの造形教育(ひとりひとりの子どもの表現力をどう高めるか。)
- 第25回 (江別) 1975
未来に生きる子どもの造形教育(自ら創りだす力をどう育てるか。)
- 第26回 (岩見沢) 1976
未来に生きる子どもの造形教育(すべての子どもの造形のよこびを。)
- 第27回 (札幌) 1977
(第30回全国造形教育研究大会とかねる。)みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践。
- 第28回 (函館) 1978
みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践(すべての子どもが生き生きととりくむ学習。)
- 第29回 (旭川) 1979
生き生きとしたゆとりのある子どもを育てる図工美術教育のあり方。
- 第30回 (苫小牧) 1980
ひろがりと深まりの造形教育を求めて。
- 第31回 (釧路) 1981
創りだす心をよびおこす造形教育
- 第32回 (室蘭) 1982
見る、知る、感ずるそして、創りあげる喜びを。
- 第33回 (留萌) 1983
生活とふれ合い、創る心のひろがりを求める造形活動。
- 第34回 (札幌) 1984
知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動(わきたつ発想・たしかな表現・つくり出す喜び)
- 第35回 (函館) 1985
開催を決定・準備中



北海道造形教育連盟規約

1. 名称と目的
本連盟は、北海道造形教育連盟といい、本道造形教育の振興をはかるをもって目的とする。
 2. 事業
本連盟は、目的を達成するためにつぎの事業を行なう。
 1. 研究会・講演会・展示会等の開催及び後援
 2. 造形教育に関する教科書・教材・教育等の研究
 3. 機関誌「北海道造形教育」の刊行
 4. 他の造形教育団体との連絡提携
 5. その他造形教育振興上必要な事項
 3. 会 員
正 会 員 本道幼・小・中・高・その他これに準ずる学校の教職員
賛助会員 本連盟の目的に賛同するもの
 4. 組 織
本 部 本連盟の本部は札幌におく
支 部 本道各地に支部を置き、会員は原則としてこれに所属する
 5. 構成及び任務
 1. 役 員
委 員 長 1 名 本連盟を代表する
副委員長 若干名 委員長を補佐する
会計監査 2 名 会計の監査をする
 2. 委 員
支部委員 支部2名 支部を代表する
常任委員 若 干 名 本連盟の運営に当る
顧 問 連盟の重要な問題につき意見を述べる
 6. 選 任
委員長、副委員長、会計監査は総会で選出する。
 - 支部委員は支部で選出する
 - 常任委員は委員長の委嘱による
 - 顧問は総会において委嘱する
 7. 任 期
役員および委員の任期は1カ年とする。但し重任を妨げない
 8. 会 議
 - 総 会 必要に応じ開催し、連盟の組織及び運営につき協議する
 - 常任委員会 役員及び常任委員をもって構成し、連盟の事業を執行する
 9. 会 計
本連盟の会計は、会費・事業収入及び寄附金により執行する
会 費 正会員は1人年額1,000円を納入するものとする
 10. 事 務 局
 - 事務局は事務局長在勤の学校におく
 - 事務局に次の5部をおく
庶務会計・広報・渉外・研究・事業
 - 事務局長は常任委員中より委員長が委嘱する
 11. 年 度
本連盟の事業並びに会計年度は5月に始まり翌年4月に終わる
 12. 規 約 の 改 廃
本規約の改廃は総会の決議による(昭和49年5月3日改訂)
- 附 則
本連盟と接触を希望する全道各地の研究団体(美術サークル)は年額2,000円の連絡費を納入する。

第34回 全道造形教育研究大会札幌大会役員

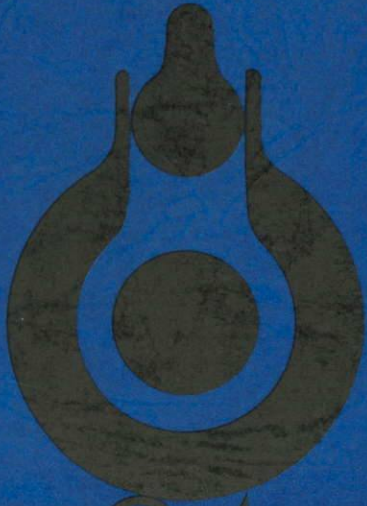
大会委員長	種市誠次郎	(連盟委員長 篠路西小長)
大会副委員長	鈴木利彦	(" 副委員長 函館、千代田小長)
"	吉田義晴	(" 斜里、来運小長)
"	加藤正	(" 留萌、沖見小長)
"	一ノ戸信雄	(" 長沼、西長沼小長)
大会顧問	朝倉力男	(連盟顧問)
"	荒木アイ	(")
"	砂金隆	(")
"	石崎義政	(")
"	泉秀雄	(")
"	伊藤藤将夫	(")
"	伊藤藤恵	(")
"	遠藤久男	(")
"	加上藤彬	(")
"	越田雄也	(")
"	佐藤一哲	(")
"	繁野三郎	(")
"	菅原隆治	(")
"	諏訪英雄	(")
"	高橋栄吉	(")
"	滝村虎雄	(")
"	辻悦平	(")
"	中川大三	(")
"	橋本川富	(")
"	長谷川三喜	(")
"	島山叢三	(")
"	藤野高常	(")
"	宮林繁雄	(")
"	和田芳郎	(")
大会運営委員長	森川昭夫	(連盟副委員長 白揚小長)
大会運営副委員長	三谷哲司	(北海道中学校美術教育会会長 陵陽中長)
"	松島輝男	(連盟事務局長 栄西小長)
"	佐藤吉五郎	(" 事務局事業部長 山の手南小長)
大会運営顧問	山本圭一郎	(" 事務局顧問 中の島小長)
"	井内利道	(" 曙小長)

大会運営顧問	高佐中	橋藤川	一	美圭	(連盟事務局顧問	東白石小長)
"	佐中	藤川		圭	("	南白石小長)
"	小斉	林木		清	("	東月寒中長)
"	米谷	木谷	杲	暁	("	北栄中長)
"	坂田	田藤	哲	一	("	福移小中長)
"	斉佐	木井	武	夫	("	東栄中長)
"	佐金	井田	洪	男	("	もみじ台中長)
"	成鈴	田木	理	人	("	清田高)
"	東滝	志本	秀	温	("	伏古小)
"	平森	高山	一	男	("	南小)
"	森高	橋田	将	男	("	美香保小)
"	高山	田本		夫	("	栄西小)
"	吉今	本市	幸	隆	("	八軒東中)
"	武新	市谷		一	("	北白石中)
"	鹿加	島藤		満	("	伏見中)
大会事務局長	加白	井着		健	("	平岸中)
"次長	船伊	藤口	礼	清	("	西岡中)
"事務局員	伊坂	藤子	広	二	("	西陵中)
"	伊坂	口子	哲	仕	("	北陽中)
"	伊坂	子原	尚	夫	("	札幌中)
"	伊坂	原谷	純	政	("	市指導主事)
"	伊坂	谷野		鋪	("	市研究所研究員)
"	伊坂	野岐		健	(連盟事務局次長	福住小)
大会会計部長	鈴長	津野	五	和	(札教研中学校美術部長	北辰中)
"次長	奥富	野所	十	毅	("小学図工部長	大倉山小)
"次長	吉早	田坂		弘	(連盟研究部長	中沼小)
大会庶務部長				世	("広報部長	澄川西小)
次長				紀	("事業部次長	幌南小)
				一	("札幌支部長	藻岩小)
				也	("庶務部次長	北陽小)
				三	("事務局次長	向陵中)
				文	("研究部次長	光陽中)
				尋	("事業部次長	真栄高)
				次	("研究部次長	北高)
				司	("常任委員	白揚小)
				代	("研究部次長	伏見小)
				男	("会計部次長	稲陵中)
				玲	("常任委員	緑丘小)
				雄	("広報部次長	新川中央小)
				次	("常任委員	中島中)

大会庶務部員	村石	谷岡	利博	一昭	(連盟常任委員)	札苗中)
"	高杉	島	正	和	(")	元町中)
"	福西	田	齊	寛	(札教研図工常任委員)	平和通小)
"	高岩	山	珠	美	(")	北白石小)
"	稲国	実分	英	輝	(")	二条小)
"	三上	山	照	順	(")	豊滝小)
"	岡	田	久	子	(連盟常任委員)	西園小)
"	館	山	義	博	(")	真駒内南小)
"	渡	山	充	子	(")	手稲鉄北小)
"	青	辺	美	智	(")	平岸小)
"	芝	木	賢	一	(")	豊水小)
大会研究部長	島	西	秀	昭	(連盟事業部次長)	緑丘小)
"次長	香	塚	界	二	(")	月寒東小)
"	藤	中	富	士	(" 事務局次長)	山の手南小)
"部員	田	向	愛	子	(" 常任委員)	太平中)
"	向	高	潤	光	(")	平岸高)
"	富	橋	敏	美	(")	第一幼)
"	前	田	久	子	(札教研美術委員)	北栄中)
"	遠	田	賢	司	(")	清田中)
"	中	藤	哲	雄	(")	向陵中)
"	山	尾	芳	光	(")	新琴似北中)
"	大	崎	孝	典	(")	栄南中)
"	桜	沼	芳	亨	(")	信濃中)
"	植	田	徳	子	(連盟常任委員)	真駒内曙中)
"	菅	木	豊	子	(")	前田中)
"	窪	原	則	貴	(")	幌西小)
"	益	田	清	恵	(")	新琴似緑小)
"	小	村	恵	子	(")	藻岩南小)
"	伊	柳	雄	嗣	(")	前田北小)
"	阿	藤	誠	行	(札教研図工常任委員)	伏古小)
"	森	部	宏	司	(連盟常任委員)	中央小)
"	佐	田	紘	靖	(札教研図工常任委員)	もみじ台南小)
"	田	藤	由	里	(連盟常任委員)	札苗北小)
"	高	中	里	子	(")	附属小)
"	葛	橋	百	合	(")	西野小)
"		西	良	子	(")	篠路西小)

大会事業部員	宮	崎	美智子	("	澄川小)
"	若	狭	忠平	(札教研函工常任委員	発寒東小)
"	熊	谷	一彦	("	しらかば台小)
"	小	田	久美子	("	豊園小)
"	白	井	真澄	("	桑園小)
"	村	上	秀明	(札教研美術委員	東月寒中)
"	武	田	郁代	(連盟常任委員	啓明中)
"	小	路	七穂子	("	柏中)
"	池	嶋	憲彦	("	屯田中央中)
"	中	山	龍雄	("	札苗中)
"	石	谷	正美	("	北都中)
"	小	幡	哲也	("	真駒内中)
"	岡	沢	邦彦	("	稲陵中)
大会会場部長	谷		勲	(連盟庶務部次長	伏見小)
" 次長	多	田	紘一	(" 常任委員	柏中)
" 部長	長	野	裕平	("	北九条小)
"	花	田	光陳	("	東山小)
"	伊	藤	武雄	(札教研函工常任委員	澄川小)
"	川	緒	定明	("	屯田南小)
"	今	川	忠良	("	白石小)
"	沢	波	隆信	("	手稲鉄北小)
"	伯	谷	巖	(連盟常任委員	真駒内緑小)
"	岡	田	義己	(札教研函工常任委員	西岡小)
"	藤	井	正治	("	茨戸小)
"	上	野	千鶴子	("	真駒内緑小)
"	三	国	満	("	東札幌小)
"	江	幡	和子	("	月寒小)
"	山	田	宏司	("	川北小)
"	沼	沢	由美子	("	旭小)
"	千	葉	哲	("	本町小)
"	大	橋	郁夫	(札教研美術常任委員	清田中)
"	香	取	正人	(連盟常任委員	発寒中)
"	工	藤	堅一	(札教研美術委員	中島中)
"	田	口	哲	("	新琴似中)
"	八	重 榎	信一	("	美香保中)
"	辻	岡	環	("	信濃中)
"	馬	止	久美子	("	澄川中)
"	百	武	スズ子	("	陵北中)
"	斎	藤	征夫	(連盟常任委員	栄中)

大会研究部員	永	井	恭	子	(連盟常任委員	福住小)
"	赤	石	芳	郎	(札幌研函工常任委員	藤の沢小)
大会研究紀要部長	岩	間	歳	仁	(連盟札幌支部事務局長	もみじ台中)
" 次長	伊	藤	善	彬	(" 研究部次長	曙小)
"	富	田		泰	(" 広報部次長	栄緑小)
"	早	川	輝	彦	(" 常任委員	屯田中央中)
" 部員	花	田	正	雄	(")	新琴似緑小)
"	辻	井	達	郎	(札幌研常任委員	幌北小)
"	毛	馬内	国	夫	(連盟常任委員	東山小)
"	小	幡	静	子	(札幌研函工常任委員	平和通小)
"	佐	藤	健	吾	(")	真駒内曙小)
"	大	場	章	子	(")	西岡南小)
"	宮	崎	心	つ	(連盟常任委員	澄川南小)
"	伊	藤	寿	郎	(札幌研函工常任委員	平和小)
"	板	田	恭	侑	(")	平岸西小)
"	平	島	恵	都子	(")	清田小)
"	日	高	晴	美	(連盟常任委員	新陽小)
"	土	井	善	範	(")	創成小)
"	高	井	裕	美子	(札幌研函工常任委員	新光小)
"	白	崎		博	(連盟常任委員	美香保中)
"	岡	島	仁	志	(札幌研美術委員	八軒東中)
"	平	林	冬	美	(")	光陽中)
"	中	村	裕	子	(")	元町中)
"	佐	藤	ま	なみ	(")	西岡中)
"	嶋	田	恵	子	(")	厚別中)
"	古	山	隆	弘	(")	幌東中)
"	山	田		宏	(連盟常任委員	日章中)
"	角	山		旭	(")	附属中)
"	寺	島	文	憲	(")	北野中)
大会事業部長	鶴	賀	孝	三	(")	八軒西小)
" 次長	塚	野	昭	臣	(")	宮の丘中)
" 部員	藤	原		寛	(")	新琴似緑小)
"	早	坂		学	(札幌研函工常任委員	北小)
"	伊	藤	武	司	(")	篠路小)
"	前	川	敏	子	(")	南白石小)
"	小	尾		喬	(")	開成小)
"	小	泉	信	嗣	(")	藤野小)
"	村	田		力	(")	堯寒小)
"	菅	原		昇	(")	北野小)
"	三	中		哲	(")	山の手小)



34

主 催 北海道造形教育連盟